仙台市文化財調査報告書第24集

今泉城跡

—発掘調査報告書—

1980年8月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第24集

今泉城跡

—発掘調査報告書—

1980年8月

仙台市教育委員会

序　　文

市内六郷地区の今泉字久保山に所在する祐善寺は、昭和53年６月に起った宮城県沖地震で大きな被害をうけました。祐善寺は、その復興に関連する開発計画を立案するに至りましたが、ここ久保山の集落は中世時代の築城と考えられる城館跡として古くから知られていたため、仙台市教育委員会と再三にわたる協議をし、事前の発掘調査を実施する運びとなりました。

この城館は今泉城、玄蕃館とも称され、「仙台領古城書上」には「東西三十六間、南北四十五間、西に堀形あり、四重の土手あり……」とあり、また「湿原地帯に構えられ、まわりを土塁と水濠でくまなく包囲されていた」とあって、その要害振りを大書しています。

今回の調査は遺跡のほぼ中心にあたるところ約2,000㎡が対象となりましたが、掘立柱建物跡、土壙、竪穴遺跡、溝遺構等多数の遺構群が発見され、大きな考古学的成果を得ることができました。本書はその成果についてまとめ上げた貴重な報告書であります。

この調査や報告書の作成にあたりましては、祐善寺住職の立花氏をはじめ、多くの檀家の方々の御協力をいただきました。ここに深甚なる感謝を申し上げます。

最後に本書が各学界や個人研究家、そして市民の貴重な文献資料として永く後世に継承され、活用されることを、切に念願する次第であります。

昭和55年８月

仙台市教育委員会

教育長　藤井　黎

例　　言

1．本報告書は仙台市今泉字久保山に所在する今泉城跡発掘調査報告書である。

2．本文の執筆は下記のとおり分担し、編集は篠原信彦が行なった。

篠原信彦……Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ4（23・19号土壙を除く）、Ⅴ1(4)~(6)、4、Ⅵ、

木村浩二……Ⅳ1・3・5、Ⅴ5

工藤哲司……Ⅳ2・4（23・19土壙）、Ⅴ1(2)・(3)・2・6

佐藤甲二……Ⅴ1(1)

渡部弘美……Ⅴ3

3．本報告書中の実測図のトレースは次のとおり分担した。

遺構実測製図…篠原信彦、木村浩二、工藤哲司、真山尚幸、石黒伸一朗、坂忠彦、巻野俊夫

遺物実測製図…篠原信彦、工藤哲司、佐藤甲二、渡部弘美、石黒伸一朗、真山尚幸、坂忠彦
巻野俊夫、柿沼敏朗

4．本報告書中の写真は次のとおり分担した。

遺構写真…木村浩二、工藤哲司

遺物写真…木村浩二、鳴瀬光之、松本寿一

5．本報告書中の土色については「新版標準土色帳」(小山、佐原：1973）を使用した。

6．本報告書の実測図中の方位は真北で統一してある。

7．遺物の分類は下記のとおりである。

A類　土　器・瓦

弥生土器	A 001 ~ 100
土師器非ロクロ	A 101 ~ 200
土師器ロクロ	A 201 ~ 300
須恵器	A 301 ~ 400
中世陶器	A 401 ~ 500
青磁	A 501 ~ 600
近世陶磁器	A 601 ~ 700
火鉢	A 701 ~ 800
瓦	A 801 ~ 900

B類　土製品

土玉	B 001 ~ 100
土錘	B 101 ~ 200

C類　金属製品

刀・釘	C 001 ~ 100
金具	C 101 ~ 200
古銭	C 201 ~ 300

D類　石製品・板碑

石製模造品	D 001 ~ 100
砥石	D 101 ~ 200
石臼	D 201 ~ 300
石斧	D 301 ~ 400
板碑	D 401 ~ 500

E類　木製品

井戸枠材	E 001 ~ 100
下駄・曲物・漆器	E 101 ~ 200
木材片	E 201 ~ 300

本 文 目 次

序　　文

例　　言

Ⅰ　調査に至る経過……1

Ⅱ　位置と環境……1

1．自然的環境……1

2．歴史的環境……1

Ⅲ　調査の方法と経過……3

Ⅳ　発 見 遺 構……8

1．掘立柱建物跡……8

2．竪 穴 遺 構……12

3．井　戸　跡……13

4．土　　壙……19

5．溝　　跡……25

Ⅴ　出土遺物……28

1．土　　器……28

(1)　弥生土器……28

(2)　土 師 器……32

(3)　須 恵 器……39

(4)　中世陶器……39

(5)　青　　磁……41

(6)　近世陶磁器……43

2．土 製 品……44

3．金属製品……45

4．石 製 品……48

5．木 製 品……50

6．板　　碑……54

Ⅵ　考察とまとめ……55

挿図・表・図版目次

第１図　遺跡位置図……２
第２図　調査区設定図……４
第３図　遺構配置図……５・６
第４図　調査区セクション図……７
第５図　１号掘立柱建物跡・２号掘立柱列実測図……８
第６図　掘立柱建物跡平面図……10
第７図　１号竪穴遺構実測図……12
第８図　２号井戸跡実測図……14
第９図　10号井戸跡実測図……15
第10図　井戸跡実測図(1)……16
第11図　井戸跡実測図(2)……18
第12図　23号土壙実測図……20
第13図　19号土壙実測図……21
第14図　24号、29号土壙実測図……22
第15図　土壙実測図……23
第16図　２号、16号溝セクション図……27
第17図　弥生土器実測図(1)……29
第18図　弥生土器実測図(2)……30
第19図　土師器実測図(1)……33
第20図　土師器実測図(2)……34
第21図　土師器、須恵器実測図……37
第22図　須恵器実測図……38
第23図　中世陶器実測図……40
第24図　中世陶器、青磁、近世陶器実測図……42
第25図　近世陶磁器実測図……43
第26図　土錘実測図……45
第27図　金属製品実測図……46
第28図　古銭拓影……47
第29図　石製品実測図……49
第30図　２号井戸出土井戸枠材実測図……51
第31図　木製品実測図（下駄、曲物）……52
第32図　37号土壙漆品出土状況平面図……53
第33図　漆品実測図……54
第34図　板碑実測図……55

第１表　井戸跡一覧表……17
第２表　土壙一覧表……24
第３表　土師器一覧表……35
第４表　土師器坏一覧表……36
第５表　須恵器坏一覧表……39
第６表　土錘一覧表……44
第７表　古銭一覧表……46

図版１……59
　１　遺構確認状況（南より）……59
　２　調査区全景（南より）……59
　３　調査区全景（北より）……59
図版２……60
　１　掘立柱建物跡全景（西より）……60
　２　１号竪穴遺構全景（西より）……60
　３　２号井戸跡全景（南より）……60
図版３……61
　１　２号井戸跡全景（東より）……61
　２　２号井戸跡セクション（東より）……61
　３　５号井戸跡全景（南より）……61
図版４……62
　１　８号井戸跡全景（西より）……62
　２　10号井戸跡全景（西より）……62

3　10号・38号井戸跡全景（西より）……62
図版5……63
1　26号井戸跡全景（南より）……63
2　36号井戸跡全景……63
3　50号井戸跡全景……63
図版6……64
1　27号井戸跡出土遺物（山物）……64
2　6号・7号土壙全景（東より）……64
3　11号土壙全景（西より）……64
図版7……65
1　12号土壙全景（西より）……65
2　13号土壙セクション（西より）……65
3　19号土壙遺物出土状況（東より）……65
図版8……66
1　19号土壙全景（東より）……66
2　23号土壙全景（西より）……66
3　23号土壙遺物出土状況（東より）……66
図版9……67
1　24号土壙全景（南より）……67
2　25号土壙全景（南より）……67
3　24号・29号土壙全景（南より）……67
図版10……68
1　31号土壙全景（西より）……68
2　37号土壙全景（東より）……68
3　37号土壙漆器出土状況（北より）……68
図版11……69
1　37号土壙全景（北より）……69
2　43号土壙全景（南より）……69
3　51号土壙全景（北より）……69
図版12……70
1　52号土壙全景（南より）……70
2　53号土壙全景（西より）……70
3　54号土壙全景（東より）……70
図版13……71
1　2号溝セクション（北より）……71
2　16号溝セクション（西より）……71
3　16号溝西端全景（北より）……71
図版14　弥生土器……72
図版15　土師器……73
図版16　土師器……74
図版17　須恵器……75
図版18　中世陶器……76
図版19　近世陶磁器……77
図版20　土製品・金属製品……78
図版21……79
1　古銭……79
2　焼米……79
図版22　木製品……80
図版23　木製品・火鉢……81
図版24　木製品・石製品・板碑……82

調 査 要 項

○遺跡名称　今泉城跡（C－507）

○所在地　仙台市今泉字久保田85の1　他

○調査主体　仙台市教育委員会

○調査担当　仙台市教育委員会社会教育課文化財係

○担当職員　試掘調査…渋谷孝雄、高橋彦之

本調査…篠原信彦、木村浩二、工藤哲司、佐藤洋、佐藤甲二、渡部弘美

○調査期間　試掘調査（昭和54年3月13日～3月16日）

本調査（昭和54年10月8日～12月26日）

○調査参加者　真山尚幸、鳴瀬光之、巻野俊夫、松本寿一、只野正昭、小野寺弘純、森剛男、石黒伸一朗、坂忠彦、阿蘇幸二、毛利貴洋、柿沼敏朗、人間川富市、阿部徳四郎、白井一夫、佐藤正弘、伊藤清之助、小池英子

○調査協力　立花正立、山田幸左衛門

祐善寺檀家一同

Ⅰ．調査に至る経過

今泉城跡（仙台市文化財登録番号Ｃ－507）は標高約3.5ｍの沖積平野に築かれた館跡である。「仙台領古城書上」によれば、東西36間、南北45間の規模で、城主は須田玄蕃とあり、別名玄蕃館ともよばれている。また「仙台領古城書立之覚」には、西に堀形あり、四重の土手ありとある。

昭和53年６月に起った宮城県沖地震は各地に大きな被害をもたらした。仙台市今泉字久保田に位置する祐善寺でも本堂等が被害をうけ、その修理等のために同市今泉字久保山85の１が宅地造成されることになった。そのため仙台市教育委員会社会教育課文化財係ではこの開発地が今泉城跡のほぼ中央付近に位置していることから開発者と協議し、試掘調査を実施して再度協議することになった。

試掘調査は昭和54年３月13日～３月16日に実施して遺構の確認を行なった。トレンチは開発地北端に２×10ｍの第１トレンチ、中央部に２×２ｍの第２トレンチを設定して調査した。第１トレンチでは内堀跡と考えられる大溝１条と幅１ｍの近世の溝１条が検出された。第２トレンチでは井戸跡、土壙、ピット等の遺構が検出された。これらのことから開発予定地について再度協議の結果、開発部分の事前調査を実施することとし、同年10月８日より本調査を実施した。

Ⅱ．遺跡の位置と環境

１．自然的環境

今泉城跡は仙台市の東南部、仙台市今泉字久保田に位置し、東北本線仙台駅より東南に約6.5㎞の地点にあたる。仙台バイパスより県道井土・長町線を2.5㎞東走すると六郷支所があり、支所の南西0.5㎞に久保田地区がある。南側1.5㎞には名取川が東流し、４㎞下って太平洋に注いでいる。

遺跡は沖積平野の低湿地の微高地上に立地し、標高は約3.5ｍである。周辺は水田であるが最近、北側には宅地化が進んでいる。地形的にはほぼ平坦であり、南側がわずかに低くなっている。遺跡内はまだ畑地の部分が多く残っているが宅地化の波は急速に進んできている。部分的に凹地となっている所は今泉城の堀跡と考えられる。

２．歴史的環境

霞ノ目から名取川以北の沖積平野の微高地、自然堤防上には幾つかの遺跡が点在している。本遺跡を中心に北北西2.6～４㎞の間には弥生時代から古墳時代にかけての大集落跡である

C−507　今泉城跡
C−001　遠見塚古墳
C−019　下飯田薬師堂古墳
C−102　南小泉遺跡
C−103　藤田新田遺跡
C−166　中在家遺跡
C−167　下荒井遺跡
C−214　高田遺跡
C−229　日辺遺跡
C−230　築道遺跡
C−231　押口遺跡
C−241　屋敷東遺跡
C−421　仙台東部団地遺跡
C−506　沖野城跡
C−526　日辺館

第1図　遺跡位置図

南小泉遺跡（C－102）があり、その中に東北地方で第3位の規模をほこる主軸長110mの前方後円墳の遠見塚古墳（C－001）が位置する。同2.2kmには沖野城跡（C－506）が位置する。

北方3.4kmには土師器を出土する中在家遺跡（C－166）、仙台東郊条里跡（C－421）、北東3～4kmには土師器を出土する押口遺跡（C－231）、土師器、須恵器散布地の下荒井遺跡（C－167）がある。

東方約1～2.5km付近には弥生土器を出土する藤田新田遺跡（C－103）、下飯田薬師堂古墳（C－019）、土師器、円筒埴輪片等を出土する屋敷末遺跡（C－241）、土師器、須恵器散布地の築道遺跡（C－230）がある。

西方0.5～1.5kmには土師器・須恵器散布地の高田遺跡（C－214）、日辺遺跡（C－229）、土塁と水濠の残っている日辺館跡（C－526）がある。

以上のように今泉城跡周辺には古くは弥生時代から中世頃までの遺跡が位置している。

Ⅲ．調査の方法と経過

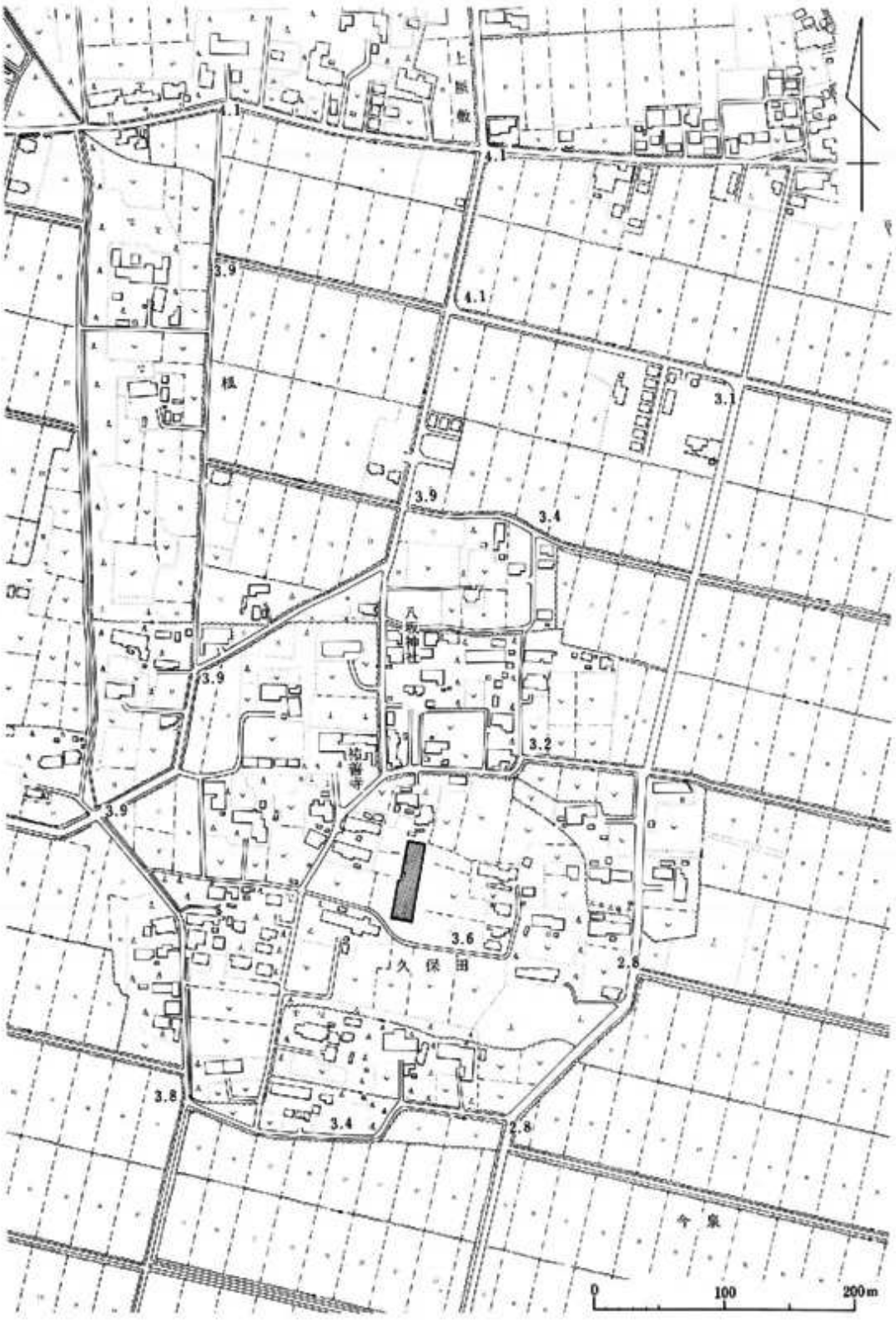
発掘調査は10月8日より実施し、開発面積1800㎡のうち、排土等を考慮した約900㎡を調査した。調査区は東西約15m、南北60mの範囲に設定した。表土は法切りユンボを用いて地下40～60cm程掘り下げた。黄褐色粘土質シルト（地山）まで掘り下げると遺構の確認は明瞭なため、調査区全体を機械で排土した。

遺跡の基本層位は大きく見て3層に分けられる。第Ⅰ層：耕作土で厚さ20cm程でさらさらした黒褐色シルト層である。第Ⅱ層：20～40cmで3層に細分される。II_a層は黒褐色シルト層で中に褐色シルトを若干含む。II_b層は黒褐色シルト層で焼土、炭化物を含む。II_c層は黒色シルト層で焼土、炭化物を含む。全体としてII_a、II_b層が大部分で、II_c層は部分的に堆積している。第Ⅲ層：黄褐色粘土質シルト層（地山）である。

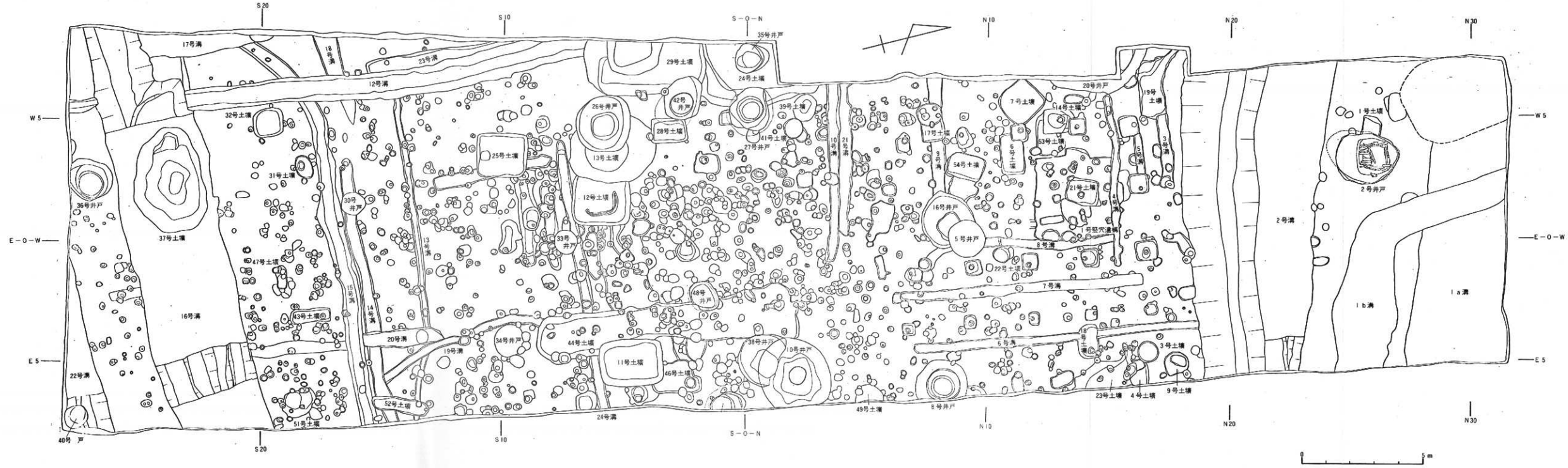
遺構は調査区のほぼ全域から検出され、ほとんど重複している。特に調査区中央部付近の密集度が高く、幾重にも切り合っている状況である。遺構の掘り込み面はほとんど第Ⅱ層より掘り込まれている。

検出された遺構は掘立柱建物跡24棟、竪穴遺構1基、井戸跡18基、土壙35基、溝跡25条、さらに建物跡を含むピット約1200個である。時期別に見ると弥生時代、古墳時代、平安時代、中世・近世の遺構がある。

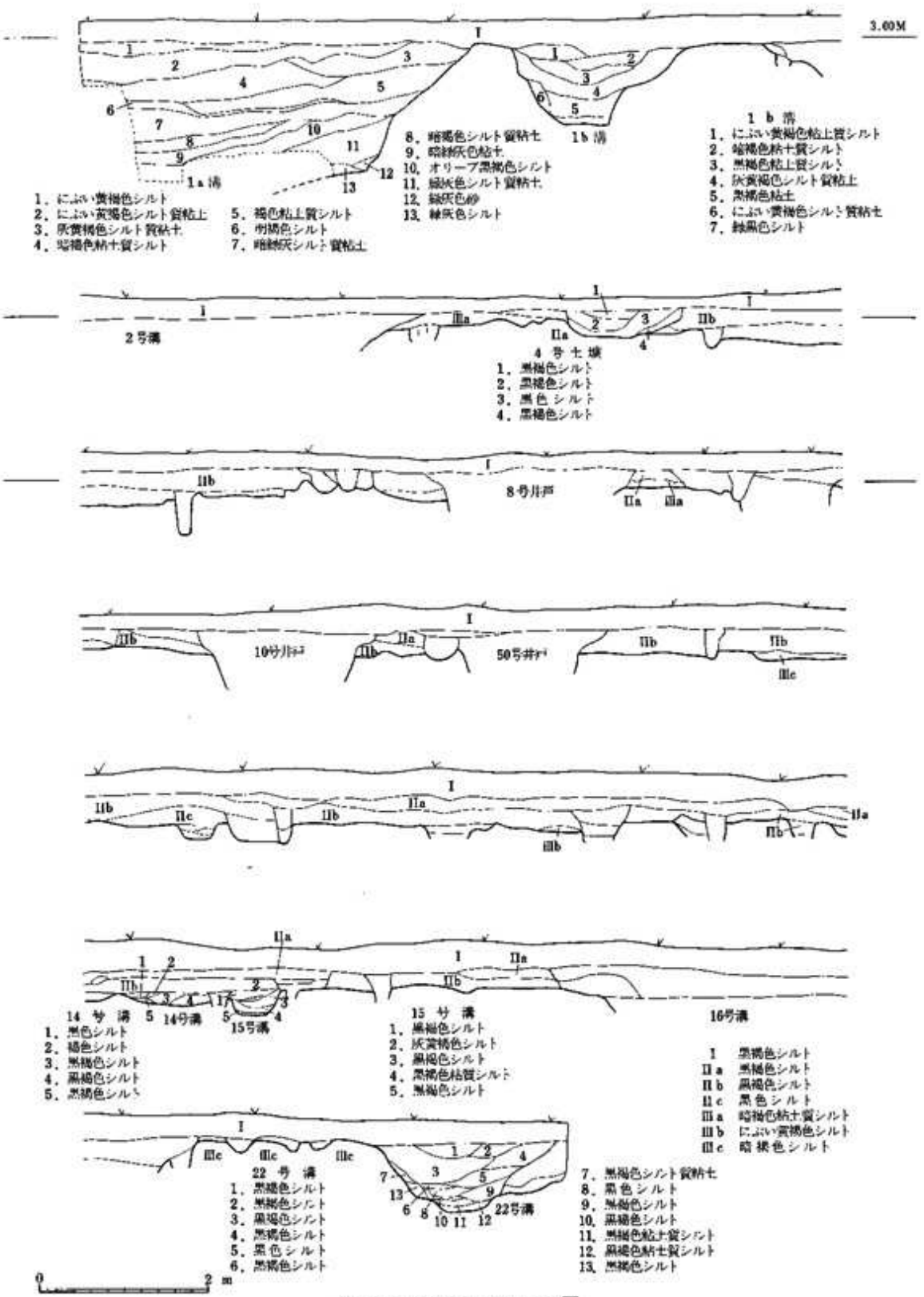
実測方法は調査区全域に3m方眼の遣り方を設定し、新しい時期より順次実測し、調査は延50日を費し、12月26日終了した。



第2図　調査区設定図


S20
S10
S-0-N
N10
N20
N30
W5
E-0-W
E5
17号溝
18号溝
23号溝
12号溝
35号井戸
29号土壙
24号土壙
32号土壙
26号井戸
42号井戸
39号土壙
28号土壙
41号土壙
27号井戸
25号土壙
13号土壙
10号溝
21号溝
9号溝
17号土壙
54号土壙
7号土壙
14号土壙
20号井戸
19号土壙
6号土壙
53号土壙
5号溝
3号溝
1号土壙
2号井戸
31号土壙
30号井戸
12号土壙
21号土壙
4号溝
36号井戸
37号土壙
33号井戸
16号井戸
5号井戸
2号溝
47号土壙
15号溝
13号溝
8号溝
22号土壙
7号溝
16号溝
43号土壙
14号溝
48号井戸
1b溝
1a溝
20号溝
34号井戸
44号土壙
38号井戸
10号井戸
6号溝
18号土壙
3号土壙
19号溝
11号土壙
46号土壙
22号溝
52号土壙
23号土壙
4号土壙
9号土壙
51号土壙
24号溝
49号土壙
8号井戸
40号戸
0
5m

第3図 遺構配置図



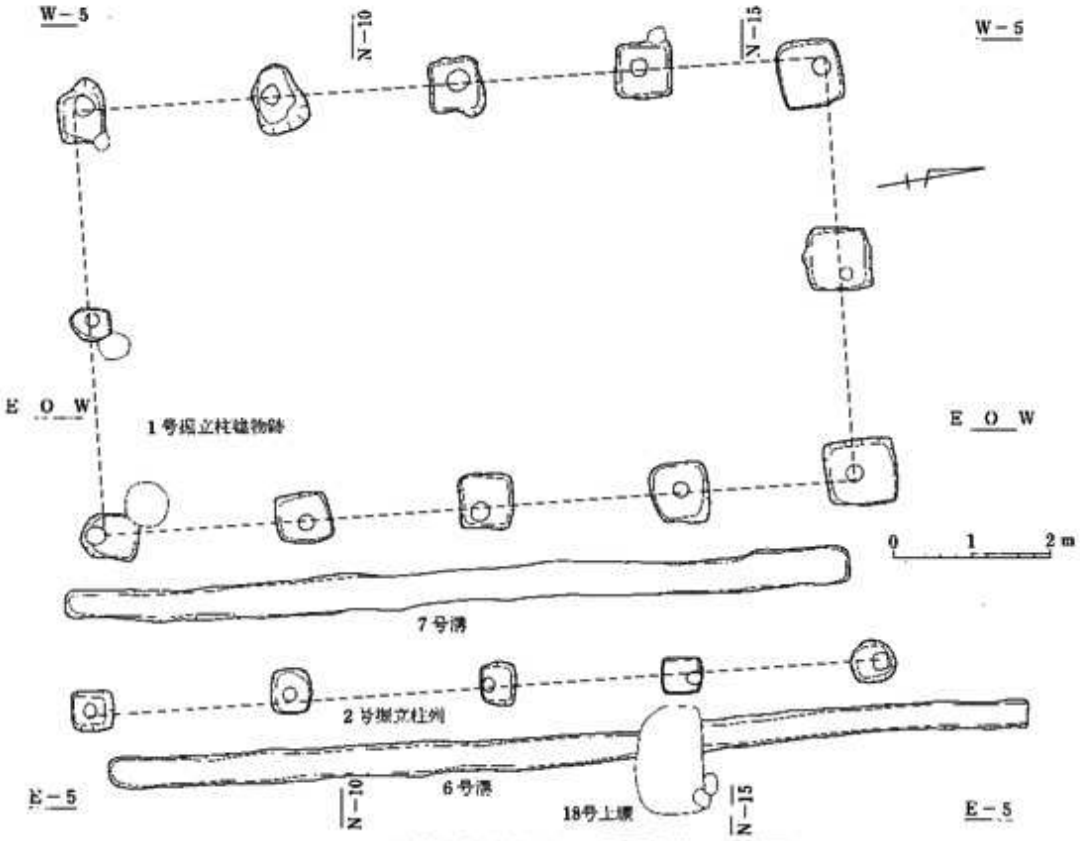
第4図　調査区セクション図

Ⅳ. 発 見 遺 構

1．掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は24棟確認されたが、柱穴は調査区全域で約1200を数え、さらに多くの建物が存在していたことが考えられるが、あまりに密集して検出された為、柱穴の相互関係が明らかでなく、明確な建物跡として確認されるに至らなかった。柱穴からの出土遺物は殆んどなく、時代の確定はできないが、他の遺構との重複関係からみて、1号・2号建物跡を除いては中世から近世にわたるものと考えられる。柱穴の大きさは一辺が20～50cm程の円形もしくは不整方形で、柱痕跡は検出されたもので直径10～15cm程である。

1号掘立柱建物跡　桁行4間、梁行2間の南北棟建物跡で、柱間寸法は桁で240cm（8尺）等間、梁で270cm（9尺）等間である。建物方向は南北柱列でN－8°－Eである。柱穴は一辺60～80cmの隅丸方形ないしは不整方形の掘り方を有し、柱痕跡は直径20～25cm程で、深さは30～65cmである。柱穴埋土は黄褐色土をブロック状に含む黒褐色土である。柱穴の大きさや建物全体の規模・規格性からみて古代の建物跡と考えられる。また、建物の東側には柱列から80～90cm隔てて、幅40cm、深さ5～10cmの雨落ち溝と考えられる7号溝が検出された。



第5図　1号掘立柱建物跡・2号掘立柱列実測図

2号掘立柱列　1号建物跡の東側に平行して検出された一本柱列で南北4間、柱間寸法は255cm（8.5尺）等間である。北側にさらにのびていく可能性もあるが、2号溝の為、不明である。柱列方向は1号建物跡と同じN－8°－Eである。柱穴は一辺50cm程の隅丸方形の掘り方を有し、柱痕跡は直径16～20cm程で、深さは25～55cm程である。柱穴埋土は黒褐色土を含む黄褐色土である。また、柱列の東側には60cm程隔てて、幅30～40cm、深さ10cm程の6号溝が平行して検出された。

3号掘立柱建物跡　桁行3間、梁行2間の南北棟である。南北柱列はN－8°－E、柱間寸法は梁で190～220cm、桁で192～216cm、桁行総長624cm、梁行総長480cmである。掘り方は隅丸方形で一辺32cm、柱痕跡は直径12cmである。

4号掘立柱建物跡　東西2間以上、南北2間で方向は不明である。南北柱列はN－8°－E、柱間寸法は東西128cm、南北204～232cm、東西総長128cm以上、南北総長432cmである。掘り方は楕円形で18×24cm内外、柱痕跡は15cm内外である。

5号掘立柱建物跡　桁行3間以上、梁行2間の東西棟と考えられるが、16号井戸に切られ不明である。南北柱列はN－4°－W、柱間寸法は桁で168～228cm、桁行総長408cm以上、梁行総長448cmである。掘り方は方形で一辺24～36cm、柱痕跡は直径16cmである。

6号掘立柱建物跡　東西2間、南北2間の方形棟である。南北柱列はN－8°－E、柱間寸法は東西176～220cm、南北平均172cm、東西総長400cm、南北総長360cmである。掘り方は比較的大きな円形で直径44～56cm、柱痕跡は12～20cmである。

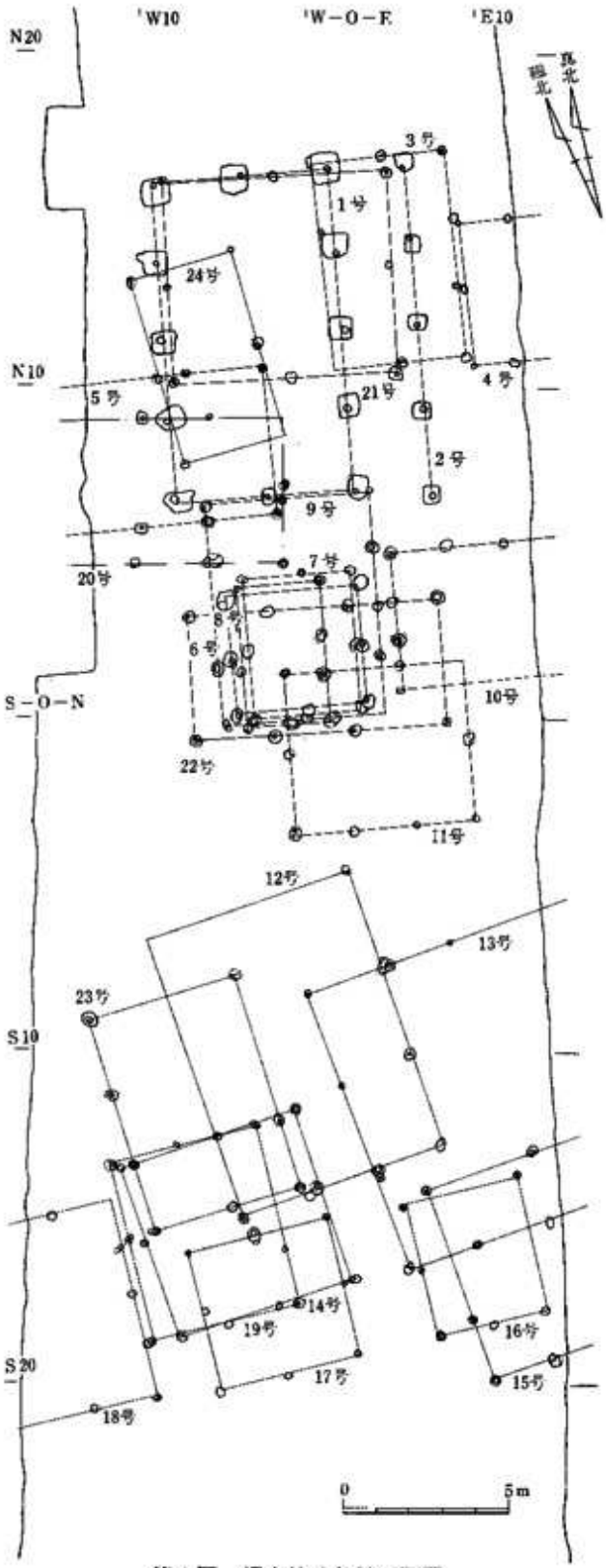
7号掘立柱建物跡　東西2間、南北2間の方形棟である。南北柱列はN－8°－E、柱間寸法は東西148～180cm、南北192～224cm、東西総長328cm、南北総長420cmである。掘り方は楕円形で長軸32～44cm、短軸30cm弱、柱痕跡は検出されなかった。

8号掘立柱建物跡　桁行3間、梁行2間と考えられるが21号溝に切られ不明の南北棟である。南北柱列はN－8°－E、柱間寸法は桁で116～172cm、梁で128～136cm、桁行総長422cm、梁行総長256cmである。掘り方は楕円形で32～44cm、柱痕跡は直径16cmである。

9号掘立柱建物跡　桁行4間、梁行2間の南北棟である。南北柱列はN－8°－E、柱間寸法は桁で140～192cm、梁で240～252cm、桁行総長672cm、梁行総長488cmである。掘り方は円形ないしは楕円形で直径24～32cm、22×40cm、柱痕跡は直径12～28cmである。

10号掘立柱建物跡　桁行3間以上、梁行3間の東西棟と考えられる。南北柱列はN－8°－E、柱間寸法は桁で172cm、梁で124～148cm、桁行総長344cm以上、梁行総長412cmである。掘り方はほぼ円形で直径36cm、柱痕跡は直径20cmである。

11号掘立柱建物跡　桁行3間、梁行2間の東西棟である。南北柱列はN－8°－E、柱間寸法は桁で156～184cm、梁で244～248cm、桁行総長536cm、梁行総長448cmである。掘り方は



第6図　掘立柱建物跡平面図

ほぼ円形で直径20～32cm、柱痕跡は検出されない。

12号掘立柱建物跡　桁行3間、梁行3間の南北棟である。南北柱列はN－7°－W、柱間寸法は桁で264～296cm、梁で204～220cm、桁行総長860cm、梁行総長632cmである。掘り方はほぼ円形で直径32cm、柱痕跡は直径8cmである。

13号掘立柱建物跡　東西3間以上、南北3間で方向は不明である。南北柱列はN－7°－W、柱間寸法は東西204～248cm、南北288～300cm、東西総長488cm以上、南北総長876cmである。掘り方はほぼ円形で直径36cm、柱痕跡は直径16cmである。

14号掘立柱建物跡　東西3間、南北2間の方形棟である。南北柱列はN－7°－W、柱間寸法は東西120～304cm、南北236～292cm、東西総長550cm、南北総長540cmである。掘り方はほぼ円形で直径26cm、柱痕跡は直径22cmである。

15号掘立柱建物跡　東西3間以上、南北3間と考えられるが15号溝に切られ不明である。南北柱列はN－7°－W、柱間寸法は東西152～172cm、南北平均196cmである。東西総長340cm以上、南北総長604cmである。掘り方はほぼ円形で直径平均32cm、柱痕跡は直径12～24cmである。

16号掘立柱建物跡　東西2間、南

北２間の方形棟である。南北柱列はN－１°－W、柱間寸法は東西平均164㎝、南北平均200㎝、東西総長328㎝、南北総長420㎝である。掘り方はほぼ円形で直径平均22㎝、柱痕跡は直径８～20㎝である。

17号掘立柱建物跡　東西２間、南北２間の方形棟である。南北柱列はN－１°－W、柱間寸法は東西196～248㎝、南北208～224㎝、東西総長434㎝、南北総長444㎝である。掘り方は隅丸方形で一辺34㎝内外、柱痕跡は直径12㎝である。

18号掘立柱建物跡　桁行４間以上、梁行２間以上の南北棟と考えられるが12号溝に切られ不明。南北柱列はN－１°－W、柱間寸法は桁で144～168㎝、梁で192㎝、桁行総長468㎝以上、梁行総長192㎝以上である。掘り方はほぼ円形で直径20㎝、柱痕跡は直径10㎝である。

19号掘立柱建物跡　桁行３間、梁行２間の南北棟である。南北柱列はN－１°－W、柱間寸法は桁で124～232㎝、梁で204～240㎝、桁行総長552㎝、梁行総長456㎝、掘り方はほぼ円形で直径平均24㎝、柱痕跡は直径12～20㎝である。

20号掘立柱建物跡　桁行３間以上、梁行２間と考えられるが20号井戸跡と５号井戸跡とに切られ不明の東西棟である。南北柱列はN－４°－W、柱間寸法は桁で204～232㎝、梁で228㎝、桁行総長440㎝以上、梁行総長228㎝以上である。掘り方はほぼ円形で直径16㎝、柱痕跡は直径12㎝である。

21号掘立柱建物跡　桁行２間、梁行２間の東西棟である。南北柱列はN－10°－E、柱間寸法は桁で320～350㎝、梁で280～320㎝、桁行総長680㎝、梁行総長610㎝である。掘り方はほぼ円形で直径は約30㎝、柱痕跡は直径10～16㎝である。

22号掘立柱建物跡　桁行３間、梁行１間の東西棟である。南北柱列はN－８°－E、柱間寸法は桁で230～270㎝、梁で370㎝、桁行総長750㎝、梁行総長370㎝である。掘り方はほぼ円形で直径30～40㎝、柱痕跡は直径12㎝程である。

23号掘立柱建物跡　桁行３間、梁行２間の南北棟である。南北柱列はN－４°－W、柱間寸法は桁で210～240㎝、梁で210～260㎝、桁行総長670㎝、梁行総長460㎝である。掘り方は円形もしくは楕円形で直径25㎝から20×40㎝程、柱痕跡は直径15～18㎝である。

24号掘立柱建物跡　桁行２間、梁行１間の南北棟である。南北柱列はN－４°－W、柱間寸法は桁で270～300㎝、梁で300㎝、桁行総長570㎝、梁行総長は300㎝である。掘り方は円形で25～35㎝、柱痕跡は直径15～18㎝である。

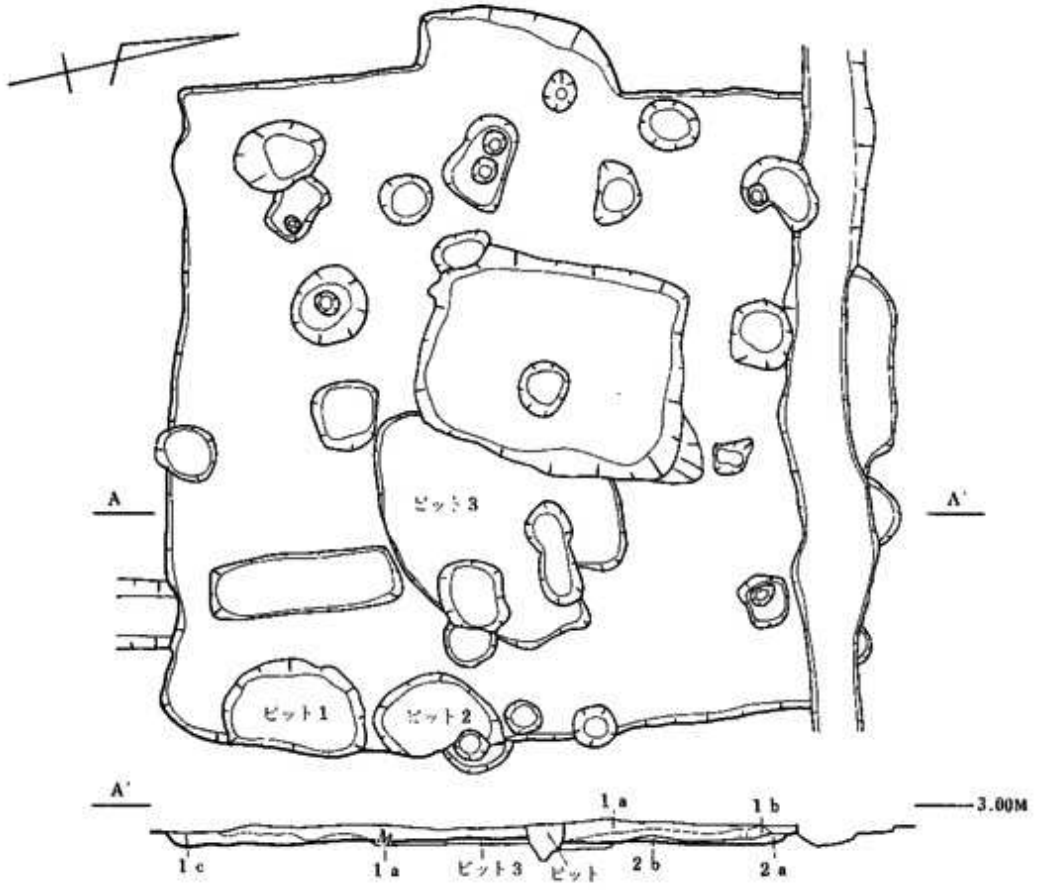
柱穴総長は約1200を数え、これらの建物跡の他にも建物跡の存在が十分に考えられるが、柱穴の重複があまりに著るしく、建物方向や柱間寸法も一定でないことなどから、建物跡として把握するに至らなかった。今後さらに検討を要する。

建物跡の年代も１号・２号は関連する溝等より出土の遺物から平安時代の建物跡と考えられ

るが、その他の建物跡は古代から近世までの中で時期的位置づけは明確でない。

2．竪穴遺構

調査区北寄り中央で検出された唯一のもので1号竪穴遺構とした。北辺と東辺がそれぞれ4号溝と8号溝によって削平されている。また中央部が21号土壙により壊され、床面も多数のピットにより撹乱されている。平面形は方形を呈すると考えられ、現存する南壁では長さ320cmを計り、他の3辺も320～340cm程度と考えられる。掘り方は浅く、残存する壁の高さは5～10cm程である。床はほぼ平坦で、1～3のピットが検出された。ピット1・2は深さ5～10cmで、焼土を多く含む黒褐色シルトが堆積する。ピット3は明黄褐色土を混える暗褐色シルトが



層位	土色	土性	その他
1a	10YR3/3黒褐色	シルト	黄橙色土をブロック状に含む
1b	10YR3/3黒褐色	シルト	遺物含む
1c	10YR4/4にぶい黄橙	シルト	しまりなし
2a	10YR3/3黒褐色	シルト	
2b	10YR3/3黒褐色	シルト	

ピットNo.	土色	土性	その他
1	10YR3/3黒褐色	シルト	焼土を多く含む
2	10YR3/2黒褐色	シルト	焼土を多く含む
3	10YR3/3暗褐色	シルト	明黄褐色土を混入

0　1　2m

第7.図　1号竪穴遺構実測図

堆積する。

出土遺物は堆積土層中から土師器片が出土した。ロクロを使用した破片はみられず、折り返し口縁の破片等が含まれている。

3．井　戸　跡

調査区全域から総数で18基の井戸跡が検出された。形態的にみて大別すると6つの型式に分類される。

Aタイプ…楕円形の掘り方に角材・板材を用いて井側を組んでいるもの。

Bタイプ…円形の掘り方に桶を用いているもの。

Cタイプ…楕円形・円形の掘り方で底に近づくに従って段々にすぼまっていく素掘りのもの。

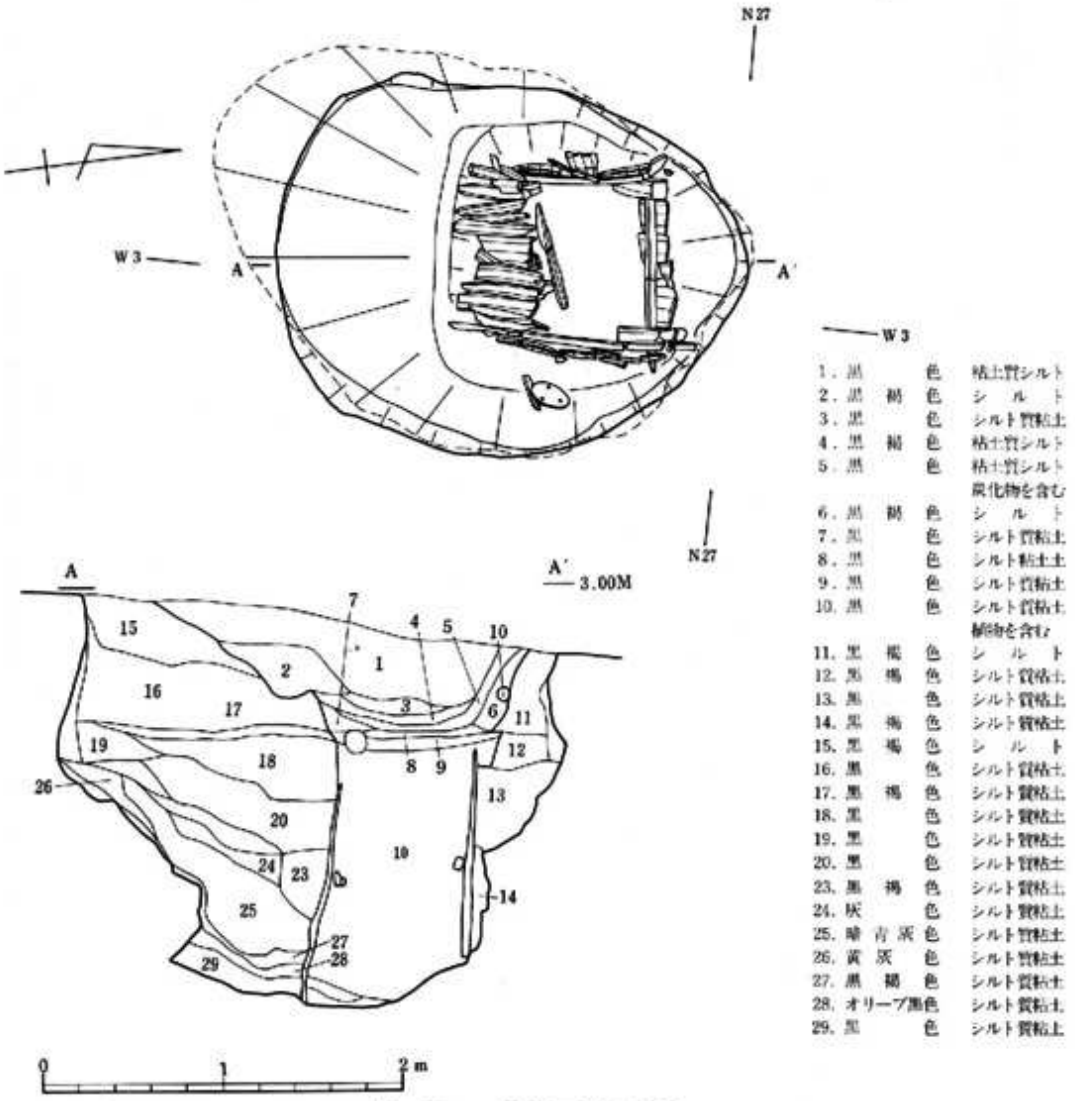
Dタイプ…円形の掘り方の中にさらに円形の素掘りのもの。

Eタイプ…円筒形の素掘りのもので、大形のものをE－1、小形のものをE－2。

Fタイプ…楕円形の掘り方で円筒形の素掘りのもの。

Aタイプ　2号井戸跡1基である。2号井戸跡は226×264cmの不整楕円形の掘り方に1辺1m程の井側を有するもので、井側は上部が消失している。地上部分の井桁は不明であるが基底から1.3m程の残存部分の観察によれば、四隅にやゝ縦長の6cm内外の枘穴を1つづつ切った1辺10cm内外の角材ないしは厚板材を立てている。北側と南側はこの枘穴に1辺4～5cmの角材を横木として差し通し、東側と西側では横木は枘穴を使用せず、四隅角材の外側に位置し、北側・南側横木の突出部にのせる様にしてある。井側板材は横木の外側に立てかける様に並べてあり、東側6枚、西側6枚、北側4枚、南側11枚の合計27枚の板材を使用している。北側はほぼ旧状をとどめる如くに整然と並んでいるが、東・西側はやゝ乱れており、南側は土圧により、横木が中央から折れ、板材も井戸内側にやゝ倒れ込む様な状態であった。板材の上端は消失しており、板の全長は不明であるが、現存長で長いものは135cmを計り、幅は10cmに満たないものから40cmに及ぶものまであり、まちまちである。厚さは平均3～4cmであるが、部分的に5cmを超えるものもあり、これも均一でない。また板材下端部は面取りを行いやゝ斜めに切ってある。掘り方埋土は上層が黒褐色系のシルト・粘質シルトで、下層は灰色系のシルト質粘土である。井戸内埋土は黒色系のシルト質粘土である。井戸東側の掘り方底部より下駄片1点、井戸内より土師器・須恵器片の他、10層下部より漆器小皿1点が出土している。

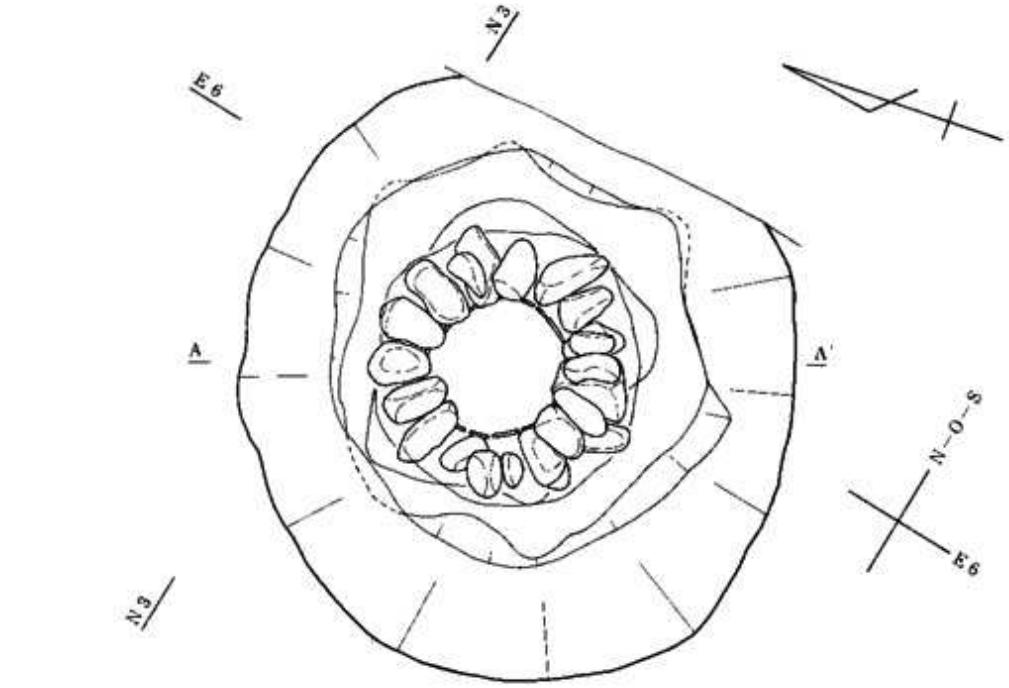
Bタイプ　10号井戸跡1基である。10号井戸跡は310×286cmのほぼ円形の掘り方内に直径140cm程の井戸穴があり、深さ1.20m程の井戸穴底面にやゝ縦長の河原石を底部周縁に方射状に配して円形の石敷を造り、その内側下方に上端直径70cm、下端直径85cm、高さ150cmの桶組を有するものである。掘り方は2段階に分けて掘られており、深さ1.60cm程で段を有し、その下にさらに桶組を入れる直径1.10m程の円形の掘り方2段目が観察される。桶組上端の円形配

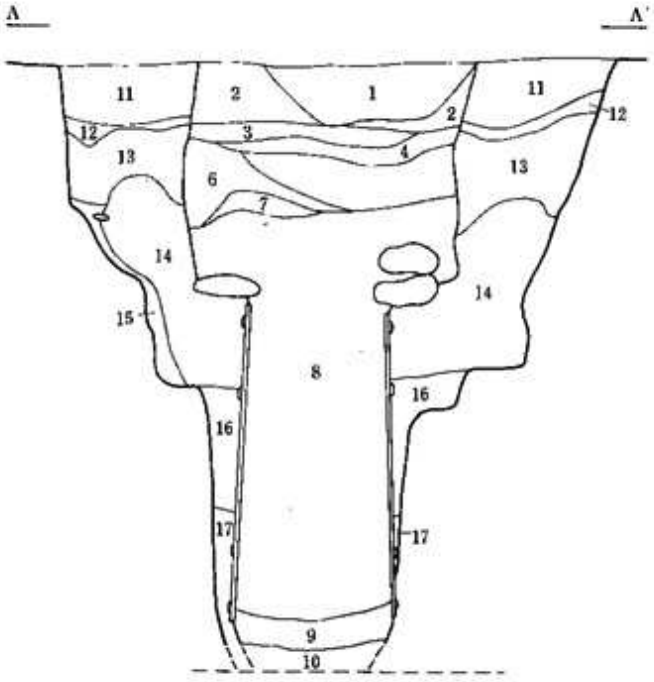


第8図　2号井戸跡実測図

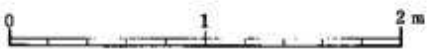
石は長さ30～40cm、幅15～20cm程の河原石を22個を使用して造られており、この上部にさらに何らかの井側施設があったことも考えられるが、板材その他の施設は検出されなかった。掘り方検出面から桶組下端まで2.85mを計り、井戸内でさらに20cm以上の掘り下げ穴が確認されたが、湧水が激しく、井戸基底面を検出するに至らなかった。桶組は17枚の板材を使用し、4段の箍で組まれている。板材は長さ150～153cm、厚さ3cm、幅9～22cmである。

出土遺物は近世もしくは明治期のものと考えられる陶器・磁器類で、古代・中世の遺物は含まれておらず、38号井戸・44号土壙、その他の柱穴等の全ての遺構を切って造られていることから、今回の調査で検出された遺構の中で最も新しい時期のグループに属している。

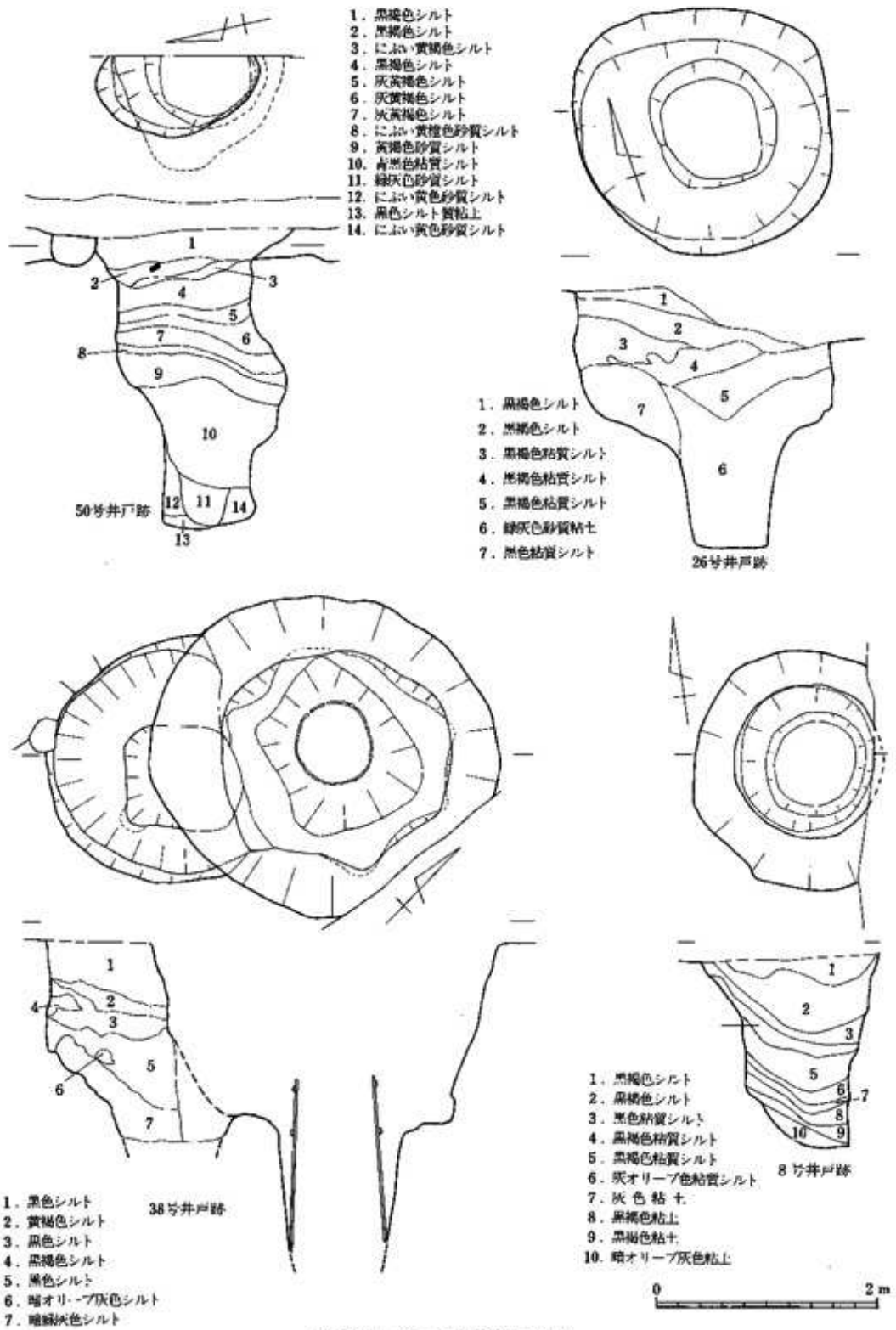




1	黒	褐	色	シルト
2	暗	褐	色	シルト
3	褐	灰	色	シルト質粘土
4	にぶい黄褐色			シルト質粘土
5	灰	黄	褐	色	シルト質粘土
6	灰	黄	褐	色	粘質シルト
7	黒			色	シルト質粘土
8	黒	褐	色	粘質シルト
9	明	青	灰	色	砂
10	青	黒	色	粘土
11	黒	褐	色	シルト質粘土
12	暗	褐	色	シルト
13	黒			色	粘土質シルト
14	黒			色	シルト質粘土
15	黒	褐	色	粘土質シルト
16	黒			色	粘土
17	黒			色	粘土



第9図　10号井戸跡実測図



第10図　井戸跡実測図(1)

第1表 井戸跡一覧表

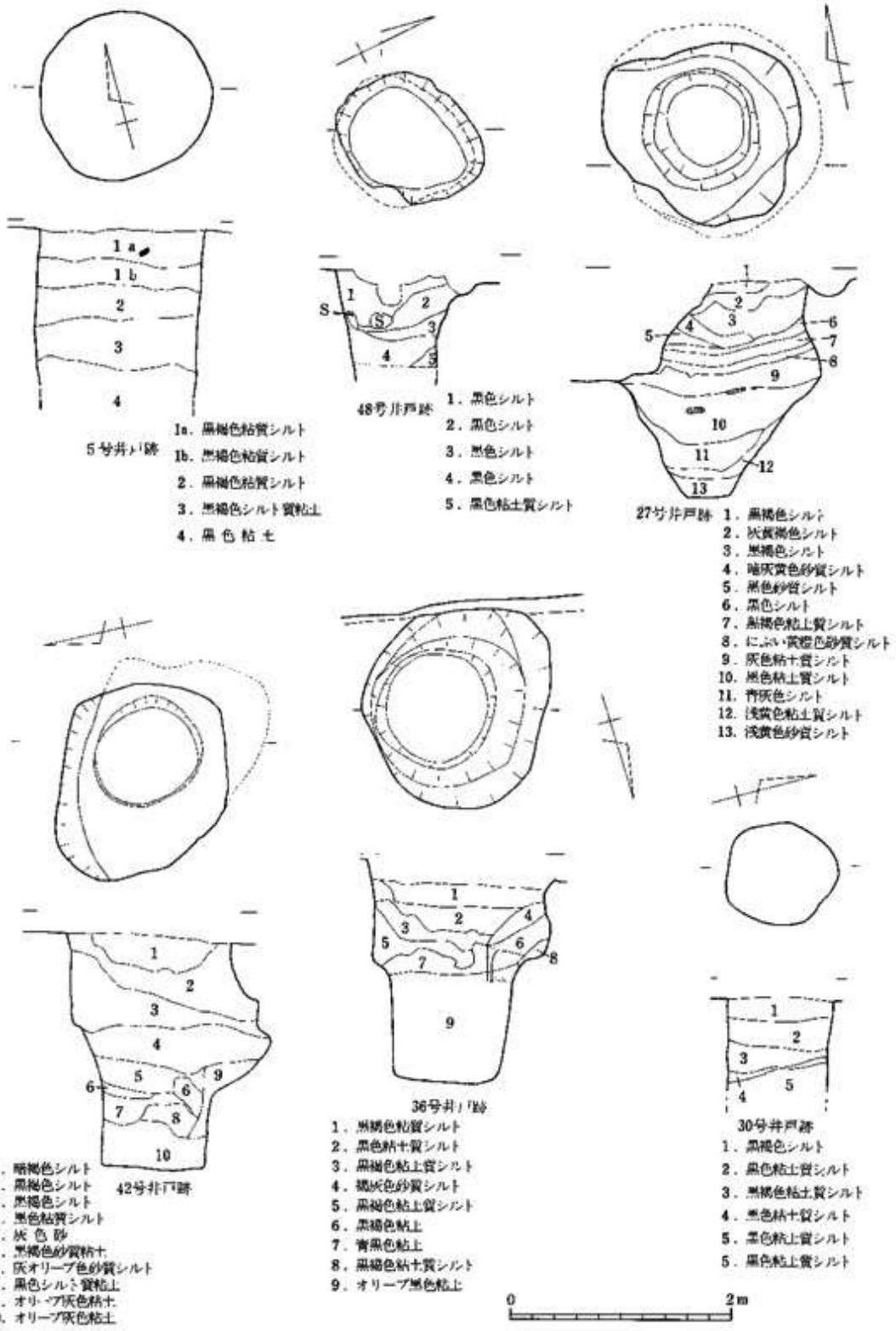
No.	平面形	タイプ	大きさ	深さ	出土遺物・他
2号井戸	楕円形	A	264×226	220	土師器・須恵器・青磁・下駄・漆塗り小皿、1号土壙に切られている。
5号井戸	円形	E-1	154	150以上	
8号井戸	円形	D	212×160以上	225	砥石、ピットに切られている。
10号井戸	円形	B	310×286	304以上	陶磁器、38号井戸、44号土壙を切っている。
16号井戸	円形	D	210×200以上	181以上	5号井戸に切られ9号溝を切っている。
20号井戸	円形	-	-	-	曲物、19号土壙を切っている。
26号井戸	円形	D	228×222	230以上	陶磁器、13号土壙を切り、29号土壙に切られている。
27号井戸	楕円形	C	154	192	中世陶器、曲物、24号土壙に切られている。
30号井戸	円形	E-2	100×92	80以上	14号溝を切っている。 土錘
33号井戸	円形	E-2	98×94	116以上	24号溝を切っている。
34号井戸	円形	E-2	126×122	126以上	
35号井戸	円形	C	142×122	110以上	24号土壙に切られている。
36号井戸	円形	D	180	202	中世陶器、石臼・火鉢
38号井戸	円形	D	220×176以上	180以上	須恵器、10号井戸に切られ44号土壙を切る。
40号井戸	円形	E-2	100×90	94以上	22号溝に切られている。
42号井戸	楕円形	D(?)	176×148	214	29号土壙、28号井戸に切られている。
48号井戸	楕円形	E-2	140×110	90以上	44・45号土壙を切っている。
50号井戸	楕円形	F	148×76以上	244	中世陶器、ピットに切られている。

(単位cm)

Cタイプ 27号井戸跡と35号井戸跡の2基である。27号井戸跡は直径150cm程の不整円形の歪んだ掘り方で、壁面が崩落した為、えぐられた状態になっていたが、底に近づくに従って除々にすぼまっていく形状を示し、底面直径は70cm程になる。深さは192cmを計る。底面で曲物(E 103)が1個出土した他、埋土中より中世陶器片が出土している。24号土壙に切られている。35号井戸跡は上部を24号土壙に完全に切られ、土壙底面で検出された為、詳細は不明であるが、底に近づくに従って除々にすぼっていく形状を示している。

Dタイプ 8号・16号・26号・36号・38号の5基の井戸跡である。掘り方は円形もしくはやや歪んだ円形で、直径は2m前後と大形である。深さ1～1.5mでゆるやかな段を有し、さらに直径 0.8～1.0mの円筒形の素掘りの竪抗が続くもので、上面から深さは底面が検出された8号で225cmを計るが、16号・26号・38号は湧水が激しく底面を検出するに至らなかった。出土遺物は8号から砥石、26号から中世陶器片、36号から中世陶器片・石臼・火鉢、38号から須恵器片などがある。

Eタイプ 円筒形の素掘りの井戸であるが、大きさにより2つに細分される。E－1は直径が1.5mを超えるもので5号井戸跡1基である。E－2は直径が1m前後のもので30・33号・34号・40号・48号井戸跡の5基である。湧水等の為、いづれも底面まで検出できなかったが、上面からの深さは5号で1.5m以上、E－2タイプで0.9～1.2m以上である。30号から土錘



第11図　井戸跡実測図(2)

が出土している他は出土遺物が殆んどみられない。

Fタイプ　50号井戸跡1基である。Dタイプに類似した形態を示しているが、掘り方が楕円形であり、下に続く円筒形の竪抗が掘り方の中に一方に片寄っている点で区別される。掘り方上端長径は1.48mを計るが、短径は調査区外の為不明である。中段までの深さは1.1mで円筒竪抗部分の直径は0.8m、底面までの深さは2.44mである。

出土遺物や他の遺構との重複関係などからみて、Aタイプの井側組の井戸は古代のものと考えられ、Bタイプの桶組の井戸は近世末から明治期のものと考えられる。Cタイプは中世陶器の出土や他の中世の遺構に切られていることから中世の井戸を考えられ、Dタイプも近世以降の遺構に切られていることから同じく中世の井戸と考えられる。E・Fタイプは中世その他の遺構を切っていることから、中世ないしは近世の井戸と考えられる。

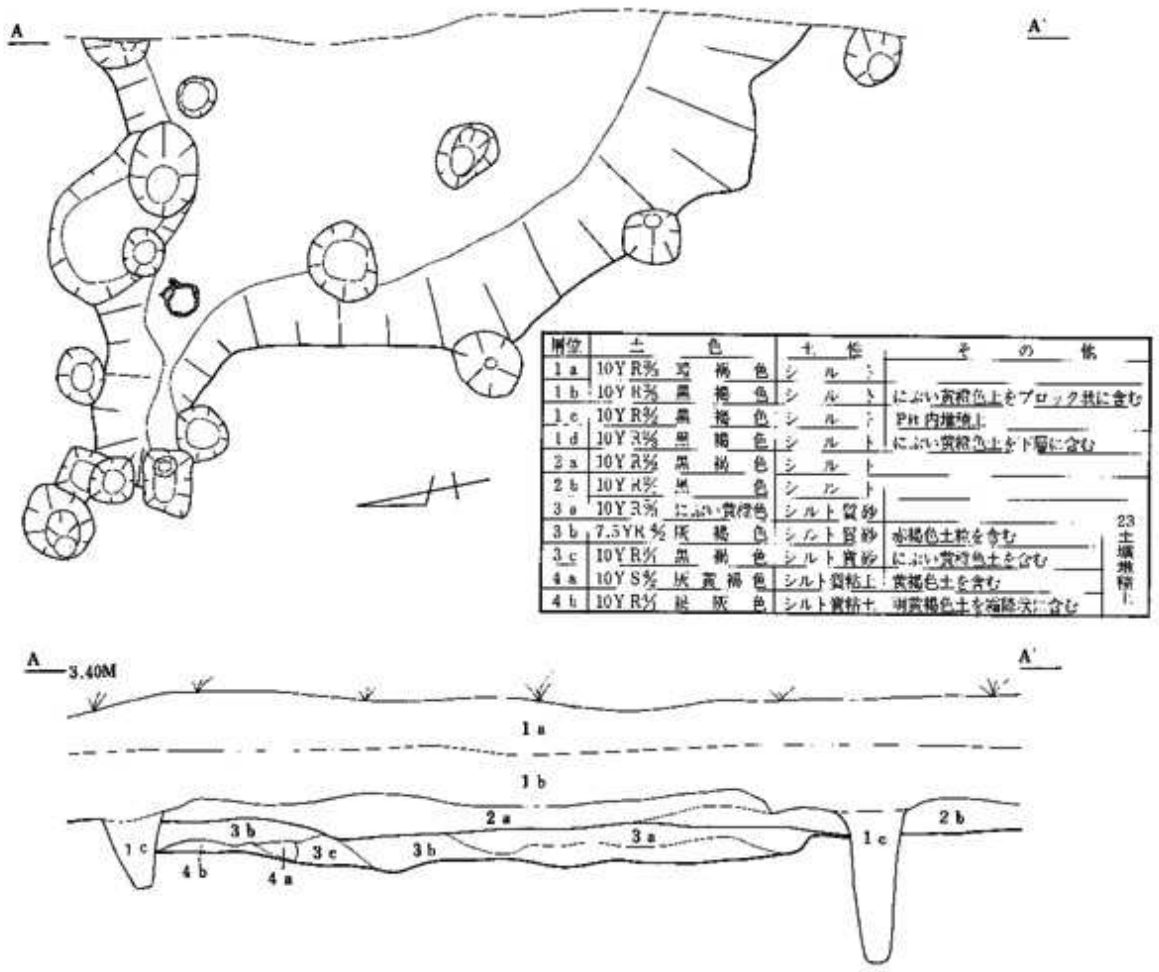
4．土　　壙

調査区全域より総数35基の土壙が検出された。時期別に見ると弥生時代・古墳時代、中・近世のものがある。

23号土壙　調査区北寄りに検出され、東側半分は調査区外に延びている。土壙およびピットにより床と壁の一部が壊されている。平面形は不整円形又は不整楕円形と考えられ、大きさは上面で南北265cm、東西110cmを計る。深さは確認面より5～15cmである。北西部に幅40cm、長さ60cm程の溝状の張り出しをもつ。断面形は緩やかな立ち上がりの舟底形を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。床面は平坦でなく、大小の凹凸がある。堆積土はベルト位置で5層に分けられるが、基本的には土壙床面北寄りに部分的にあるシルト質粘土層と堆積土の大部分を占めるシルト質砂層の2層からなる。

出土遺物は全て弥生土器で堆積土中より出土している。甕（A006）は土壙と溝状張り出し部の接続部分の3C層中より横転した状態で出土した。他に底部片（A002）と体部片（A009）等が出土している。

19号土壙　調査区の北側、2号溝の南側に近接して検出された。西側が調査区外に延びていたので一部拡張して調査した。北寄りの上面が3号溝により削平され、南西隅も20号井戸跡により一部削られている。平面形は長方形を呈し、これに北西隅より同方向に延びる溝が付き、調査区外に延びる。掘り方は西側で2段となり、上段が6cm、下段が10～15cmの段となり、溝部は下段の掘り方に接続する。土壙の大きさは長軸上段で240cm、下段で195cm、短軸100cm、溝の接続部で幅60cm、端部で幅25cmを計る。深さは土壙の西1／3から溝との接続部にかけて深くなっており、確認面から約30cmを計る。溝は西に、土壙は東に寄るに従って浅くなる。断面は長軸方向では舟底形、短軸方向と溝部は凹形に近い。堆積土はベルト位置で8層に分けられる。2・5層は炭化物を多く含む黒色の強い層で、この2・5層と底面に薄い樸に類する植



層位	土色		土性	その他	
1a	10YR3/2	黒褐色	シルト		
1b	10YR3/2	黒褐色	シルト	にぶい黄橙色土をブロック状に含む	
1c	10YR3/2	黒褐色	シルト	Pit 内堆積土	
1d	10YR3/2	黒褐色	シルト	にぶい黄橙色土を下層に含む	
2a	10YR3/2	黒褐色	シルト		
2b	10YR2/1	黒色	シルト		
3a	10YR3/3	にぶい黄橙色	シルト質砂		
3b	7.5YR4/6	褐色	シルト質砂	赤褐色土粒を含む	23土壙堆積土
3c	10YR3/1	黒褐色	シルト質砂	にぶい黄橙色土を含む	
4a	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質粘土	黄褐色土を含む	
4b	10YR5/1	褐灰色	シルト質粘土	明黄褐色土を極部状に含む	

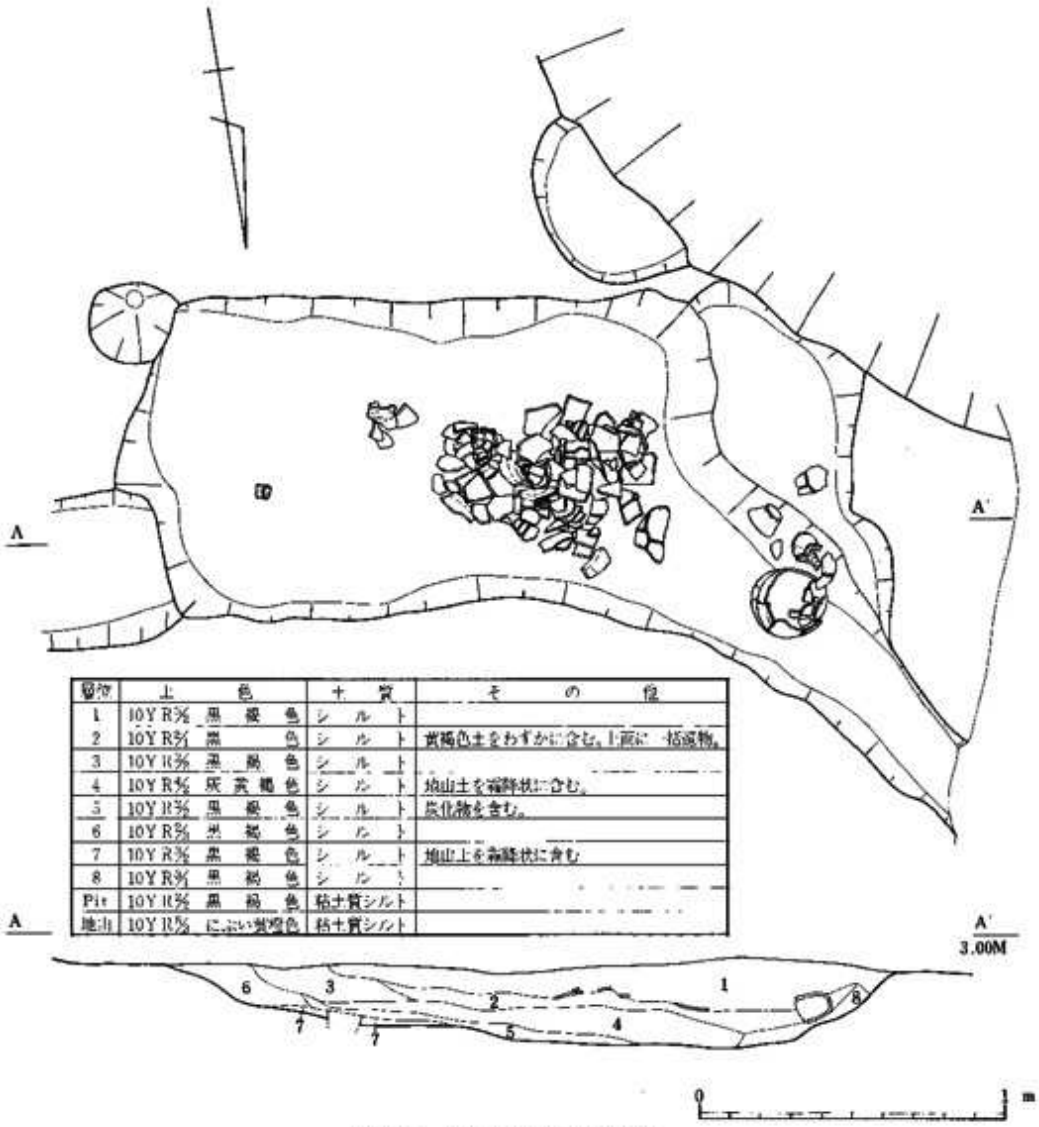
第12図　23号土壙実測図

物を炭化物層が観察された。

遺物は各層に土師器片が散在するが、特に2層上面及び2層中に入った状況で一括して検出された。第13図は遺物出土状況を示したものである。土師器A 102とA 104は倒立の状態、A 101は直立の状態で出土した。出土遺物には土師器と土玉（B 001）がある。図化した土師器は12点で壺（A 101・A 104）、台付甕（A 102・113・114）、甕（A 103・116・118・119）、器台（A 108）、坏形土器（A 105）、高坏（A 121）がある。

この土壙は古墳時代前期に位置づけられる。その他古墳時代に属する土壙は43号・51号・52号土壙がある。43号土壙は平面形が長方形で断面形は凹形を呈し、土師器・器台（A 117）を出土した。51号土壙は平面形が楕円形、断面形が舟底形を呈し、坩（A 106・109・110）を出土した。52号土壙は長楕円形を呈し、断面形は舟底形で土師器壺・高坏を出土した。

中・近世の土壙は時期不明なものも含めると31基検出され、その形態より6つのタイプに分類される。



層位	上色	土質	その他
1	10YR3/1 黒褐色	シルト	
2	10YR3/1 黒色	シルト	黄褐色土をわずかに含む。上面に一括遺物。
3	10YR3/2 黒褐色	シルト	
4	10YR5/6 灰黄褐色	シルト	焼山土を縞状に含む。
5	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭化物を含む。
6	10YR3/1 黒褐色	シルト	
7	10YR3/1 黒褐色	シルト	焼山土を縞状に含む
8	10YR3/1 黒褐色	シルト	
Pit	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	
地山	10YR5/6 にぶい黄褐色	粘土質シルト	

第13図　19号土壙実測図

Aタイプ…一辺5m前後の隅丸方形のもので深さ1m位のもの

Bタイプ…一辺3m弱の隅丸方形のもので深さ30cm以下のもの

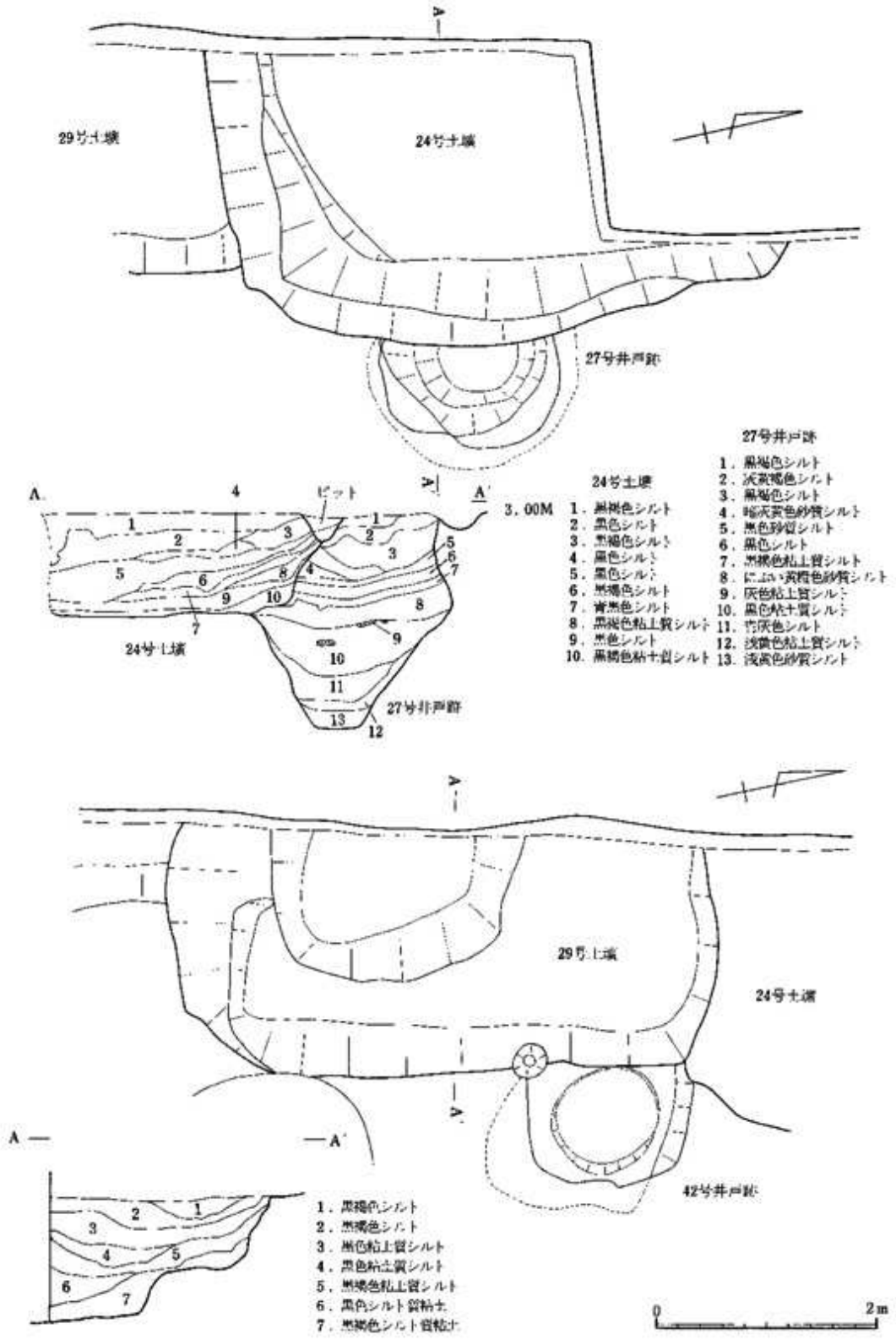
Cタイプ…平面形は楕円形を呈し、断面擂鉢状のもの

Dタイプ…平面形が長楕円形のもの

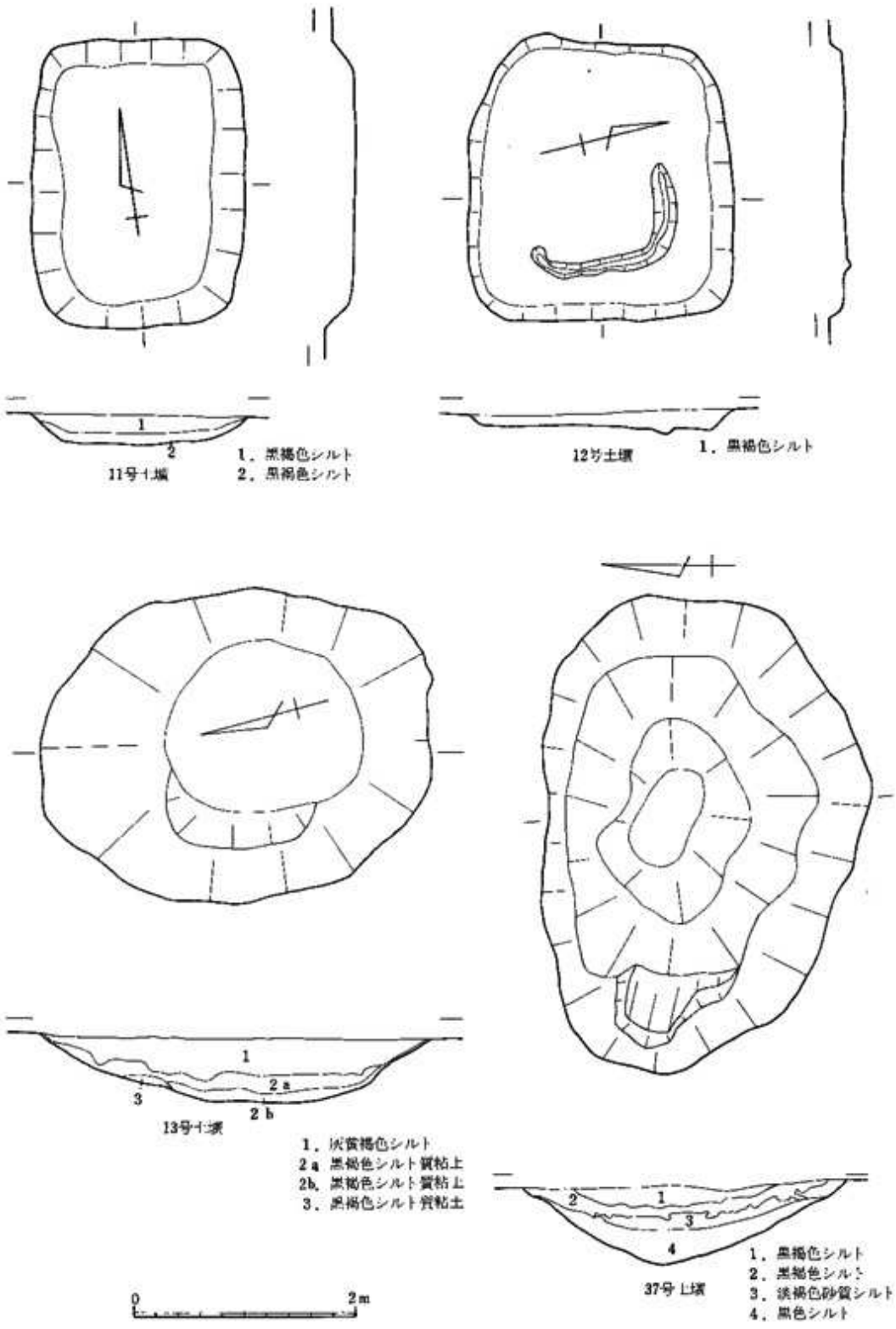
Eタイプ…小規模で円形のもの

Fタイプ…小規模で方形のもの

Aタイプ　24号・29号土壙の2基である。いずれも調査区中央部西端に位置し、西側半分が調査区外にある。24号は29号土壙、27号・35号井戸跡を切っており、平面形は隅丸方形と考えられるが西壁・北壁は調査区外にある。規模は南北5m、東西2.6m以上を計る。底面は平坦



第14図　24号、29号土壙実測図


1
2
1．黒褐色シルト
2．黒褐色シルト
11号土壙
1．黒褐色シルト
12号土壙
1
2a
2b
3
13号土壙
1．灰黄褐色シルト
2a．黒褐色シルト質粘土
2b．黒褐色シルト質粘土
3．黒褐色シルト質粘土
1
2
3
4
1．黒褐色シルト
2．黒褐色シルト
3．淡褐色砂質シルト
4．黒色シルト
37号土壙
0
2m

第15図　土　壙　実　測　図

第2表 土 壙 一 覧 表

No.	平面図	断面図	大きさ(cm)	深さ(cm)	備 考
1	長 方 形	逆台形	132×70	20	2号井戸を切る。
3	円 形	逆台形	86×86	16	4号土壙を切る。
4	隅丸方形	舟底形	125以上×125	16	3号土壙に切られる。
6	長 方 形	逆台形	170×98	22	1号掘立柱建物跡を切る。
7	隅丸方形	逆台形	166×160	16	1号掘立柱建物跡を切る。土師器 A 124。
9	楕 円 形	逆台形	98×88	5	須恵器A312
11	隅丸長方形	逆台形	260×170	25	ピット24号溝、44号土壙を切る。
12	隅丸方形	逆台形	250×240	17	13号土壙、ピットを切る。
13	楕 円 形	擂鉢形	348×284	67	12号土壙に切られ、26号井戸を切る。青磁（A502、A503）陶器（A615、A603）古銭（C214）
14	不整方形	舟底形	130×98	40	1号掘立柱建物跡、53号土壙を切る。
15	不整楕円形	舟底形	108×58	6	
17	方 形	逆台形	98×96	9	
18	隅丸長方形	逆台形	138×87	13	6号溝、23号土壙を切る。
19	長 方 形	舟底形	240×100	30	3号溝、20号井戸に切られる。土玉（B001）土師器（A101、102、114、113、103、116、118、119、104、115、121）
21	長 方 形	長方形	130×108	46	1号竪穴を切り、ピットに切られる。
22	円 形	逆台形	70×62	38	
23	不整円形	舟台形	265×110	15	弥生土器
24	隅丸方形	逆台形	500×260以上	94	27号井戸、29号土壙を切る。貿瀬戸（A502）板状鉄製品（C002）須恵器（A 305）、中世陶器（A 408、412）、古銭（C 201、205、215）
25	隅丸方形	逆台形	214×180	16	釘（C 003） 陶器（A 601）
28	長 方 形	逆台形	146×98	26	13号土壙に切られ、42号井戸を切る。
29	隅丸方形	逆台形	496×220	70	24号土壙、26号井戸に切られ、42号井戸、12号溝を切る。銅製筒金具（C 101）中世陶器（A 406、401、405）古銭（C 202、204、206、207、209） 砥石（D 101）
31	楕 円 形	逆台形	98×68	10	須恵器（A 306）
32	隅丸方形	舟底形	124×116	20	ピットに切られる。
37	楕 円 形	擂鉢形	430×300	72	16号溝を切る。
39	楕 円 形	逆台形	112×94	62	41号土壙、ピットに切られる。
41	円 形	舟底形	80×80	14	39号土壙、ピットに切られる。
43	長 方 形	逆台形	170×54	36	土師器（A 117） 土錘（B 114）
44	長楕円形	舟底形	1280×184	30	11号土壙、38、10号井戸ピットに切られる。須恵器（A 304、313、310）土錘（B 117）弥生土器（A 007）
46	隅丸方形	逆台形	168×134	18	11号土壙、ピットに切られる。
47	隅丸長方形	舟底形	94×48	20	ピットに切られる。
49	楕 円 形	逆台形	116×70	100	ピットに切られる。
51	楕 円 形	舟底形	148×106	18	ピットに切られる。土師器（A 106、109、110）
52	長楕円形	逆台形	240×60	20	13、14号溝、ピットに切られる。土師器（A 105、107）
53	長 方 形	逆台形	98×168	39	14号土壙、ピットに切られる。
54	長 方 形	逆台形	154×104	74	ピットに切られ、S号溝にわずかに切られる。

でやわらかい。断面形は逆台形で深さ94cmを計る。壁の立ち上がりは東壁で垂直に近く、南壁でやや緩い傾斜をもつ。遺物は堆積土中より中世陶器、須恵器、北宋銭等が出土した。29号は24号土壙に北壁を切られ、西壁は調査区外にある。平面形、断面形、底面、壁の立ち上がりは24号土壙と同じである。規模は南北4.96m、東西2.2m、深さ70cmを計る。底面の南側に南北2.2mの隅丸方形のピットがあり、深さ44cmを計る。遺物は堆積土中より中世陶器、金銅製飾金具、堆積土上面より北宋銭等が出土した。

Bタイプ　11号、12号、25号・46号土壙の4基である。11号は東西170cm、南北260cmの隅丸方形で深さ25cmを計る。断面形は逆台形を呈し、壁の立ち上がりは緩やかである。12号・25号・46号も同様の形状を示し、12号は250×240×17cm(東西×南北×深さ)、25号は180×214×16cm(同)、46号は134×178×18cm(同)である。遺物は近世の陶磁器等が出土した。

Cタイプ　13号・37号土壙の2基である。13号は東西284cm、南北348cm、深さ67cmを計る。出土遺物は近世の陶磁器、中国製の青磁が出土した。37号は16号溝を切って造られたもので東西430cm、南北300cm、深さ72cmを計る。西壁面に沿って朱塗りの木製椀、小皿、蓋が9個出土した。その他石臼、砥石、中世陶器、焼米等も出土した。

Dタイプ　44号土壙1基で南北1280cm、東西184cm、深さ30cmを計る。断面形は舟底形を呈し、底面も北が高くなっている。遺物は土師器、須恵器、中世陶器が出土している。

Eタイプ　3号・9号・22号・31号・39号・41号・49号土壙の7基で、形状は円形ないし楕円形を呈するもので、規模も120cm以下のものである。断面形は逆台形を呈すものが多い。

Fタイプ　1号・4号・6号・7号・14号・17号・18号・21号・28号・32号・53号・54号土壙の12基がある。形状は隅丸方形、長方形を呈し、大きさは色々である。

各タイプの時期は出土遺物、重複関係より、Aタイプの中世、Bタイプは近世、Cタイプは中世から近世、Dタイプは中世（もしくは古代）、E、Fタイプは中世から近世の間に位置づけられる。

5．溝　　跡

溝跡は調査区内より合計25条検出され、その規模から大別して3つに分類されるが、他遺構との重複ないしは調査区外にのびており、全体を知り得るものは殆んどない。

Aタイプ…上端幅が2mを超える大形のもの

Bタイプ……〃　が1m内外の中形のもの

Cタイプ……〃　が1m以下の小形のもの

Aタイプ　1a、1b、2号、16号、22号の5条である。いづれも東西方向にのびる溝であるが、1b溝のみ屈曲して北にのびている。1a溝は上端幅が14m以上、深さ2m以上と特に大形で溝というよりむしろ堀といえる。1b溝は上端幅0.7～1m、深さ1m程で、1a溝を

切っている。断面形は逆台形で、底幅は調査区東端で0.6ｍである。２号溝は上端幅が４～６ｍ、深さ1.7ｍ、底幅0.6ｍ程で、南側は約45°の傾斜で壁が立ちあがっているが、北側は深さ0.9ｍで幅0.7ｍの平坦な段を有しながら、ほぼ同角度で立ちあがっている。16号溝は上端幅４ｍ程であったが、東端部の断面観察によれば、方向を同じくする３条の溝の重複が観察される。16ａは上端幅2.4ｍ、底幅0.4ｍ、深さ0.7ｍで断面逆台形、16ｂは上端幅推定1.1ｍ、底幅0.5ｍ、深さ0.5ｍで断面逆台形、16ｃは上端幅推定2.6ｍ、底幅0.5ｍ、深さ1.15ｍ、南側に深さ0.8ｍで、幅0.7ｍ程の平坦な段を有している。しかし、西端の断面観察によれば、上端幅推定3.9ｍ、底幅2.2ｍ、深さ1.2ｍの断面逆台形の１条の溝となっており、さらに調査区西端では北側に地山の張り出し部があり、上端幅2.4ｍ、底幅１ｍと急激に規模を縮少している。22号は16号溝から2.5ｍ程へだてて平行して検出されたが、南側は調査区外の為、全体の規模は判然としない。底幅は0.5ｍ、深さ0.8ｍを計り、深さ0.6ｍ程の部分でわずかに平坦な段を有している。

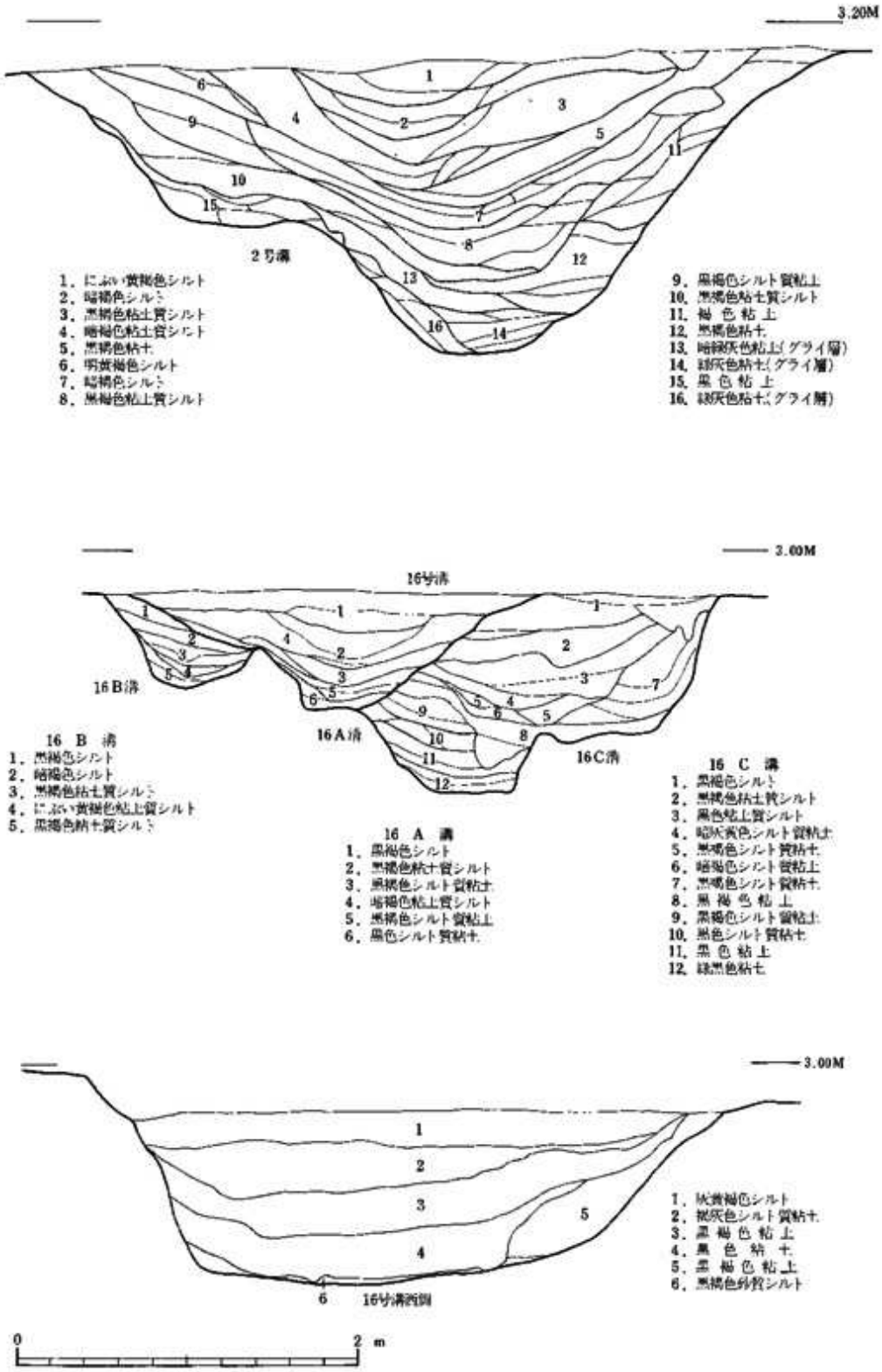
１ａ溝と２号溝、16号溝と22号溝はほぼ平行であり、前者の間隔は約４ｍ、後者は2.5ｍで、この溝間のベルト状の部分では表土下に地山面が検出され、他の遺構検出面とくらべて、やゝ土塁状の高まりを成している。

出土遺物からみて、１ｂ溝を除く４条の溝は中世陶器の出土や近世以降の比較的新しい遺物を含んでいないことから中世から近世のものと考えられ、１ｂ溝は近世もしくはそれ以降のものと考えられる。

Ｂタイプ　12号・17号・23号の３条であり、いづれもほぼ南北方向に平行して検出された。12号溝は上端幅1.1～1.2ｍ、底幅0.5～0.6ｍ、深さ0.5ｍ程で断面逆台形を呈する。17号溝は深さ0.7ｍ、23号溝は深さ0.15ｍ程であるが、その他詳細は不明である。

出土遺物は12号溝から須恵器甕片、17号溝からは中世陶器甕片、擂鉢片などがあり、古代から中世のものと考えられるが、27号溝は不明である。

Ｃタイプ　Ａ・Ｂタイプ以外の小規模の溝で３～11号、13号～15号、19～21号、24・25号溝の17条である。６号・７号溝は１号掘立柱建物跡・２号掘立柱列に伴うと考えられるもので６号溝は幅30～40cm、深さ10～15cm、長さ11.8ｍ以上で、出土遺物は須恵器坏２個体（Ａ307・308）、土師器坏４個体（Ａ201・203・204・209）、土錘（Ｂ106・109）で土錘は時期不明であるが、土師器・須恵器はいづれもロクロ使用のもので、平安時代の土器と考えられる。７号溝は幅40～50cm、深さ０～９cm、長さ10ｍで、出土遺物はないが、他遺構との関連からみてこれも古代のものと考えられる。10号溝は幅40～60cm、深さ10cm、長さ7.2ｍ以上で、中世陶器片を出土している。13号溝は幅25～30cm、深さ10cm、長さ13.2ｍ以上で、古代の布目瓦片を出土している。15号溝は幅70cm、深さ15～30cm、長さ17ｍ以上で、西側でゆるやかに屈曲し



第16図　2号、16号溝セクション図

ている。出土遺物は須恵器坏（A 309）、同甕（A 302）、同長頸壺（A 303）、土師器坏（A 202）同高坏脚部（A 122）などで平安時代のものと考えられる。その他の溝は出土遺物が不明な為、時期が判然としないが、他遺構との関連などからみて、古代から中世にわたるものと考えられる。

V 出 土 土 器

1．土 器

（1）弥生土器 （第17、18図、図版14）

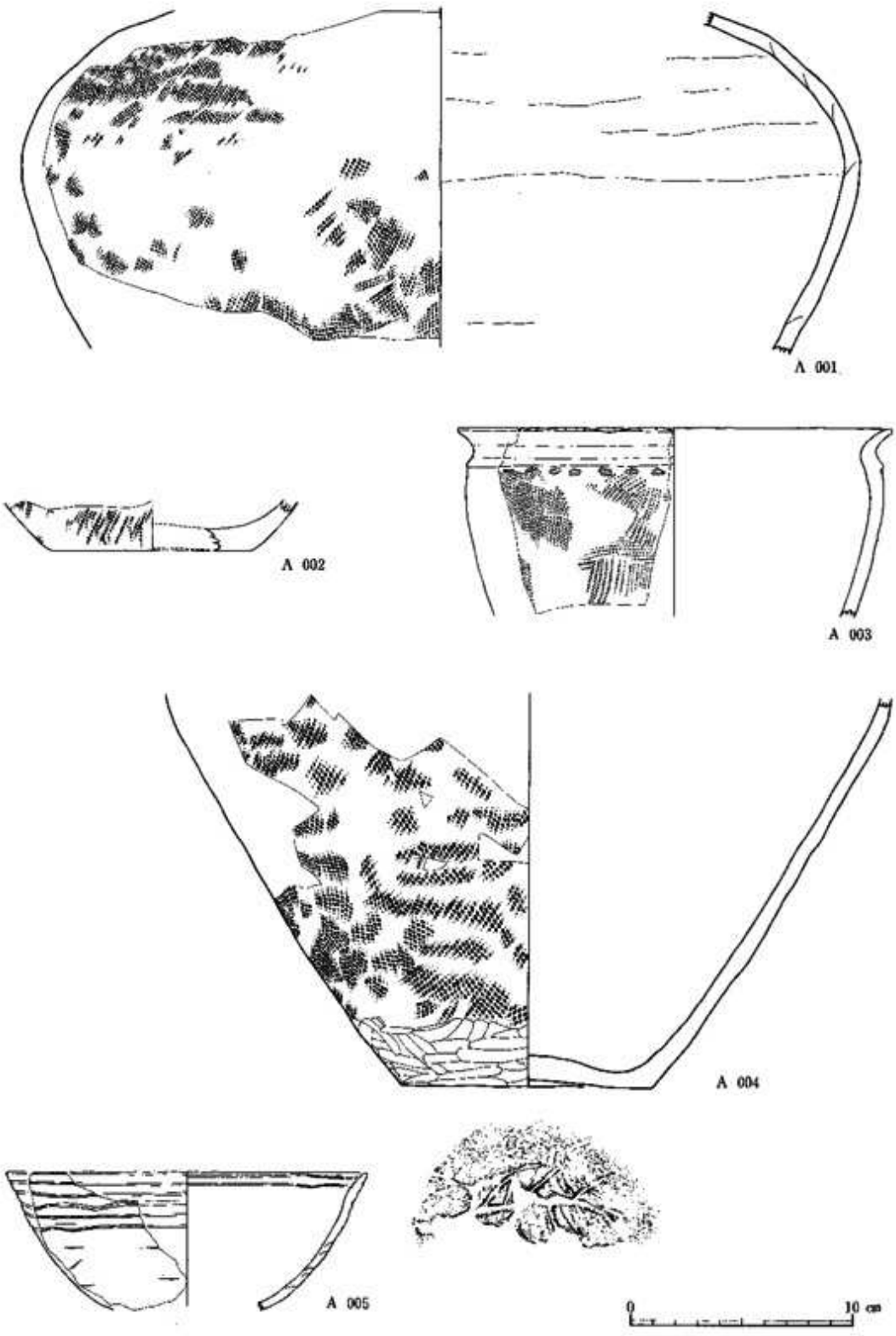
一括土器のA 001 ・ 004 ・ 006 以外は全て破片出土であるが、個体数を算出すると40個体近くなる。これらは第Ⅰ類から第Ⅲ類までの3類にわけられる。

第Ⅰ類

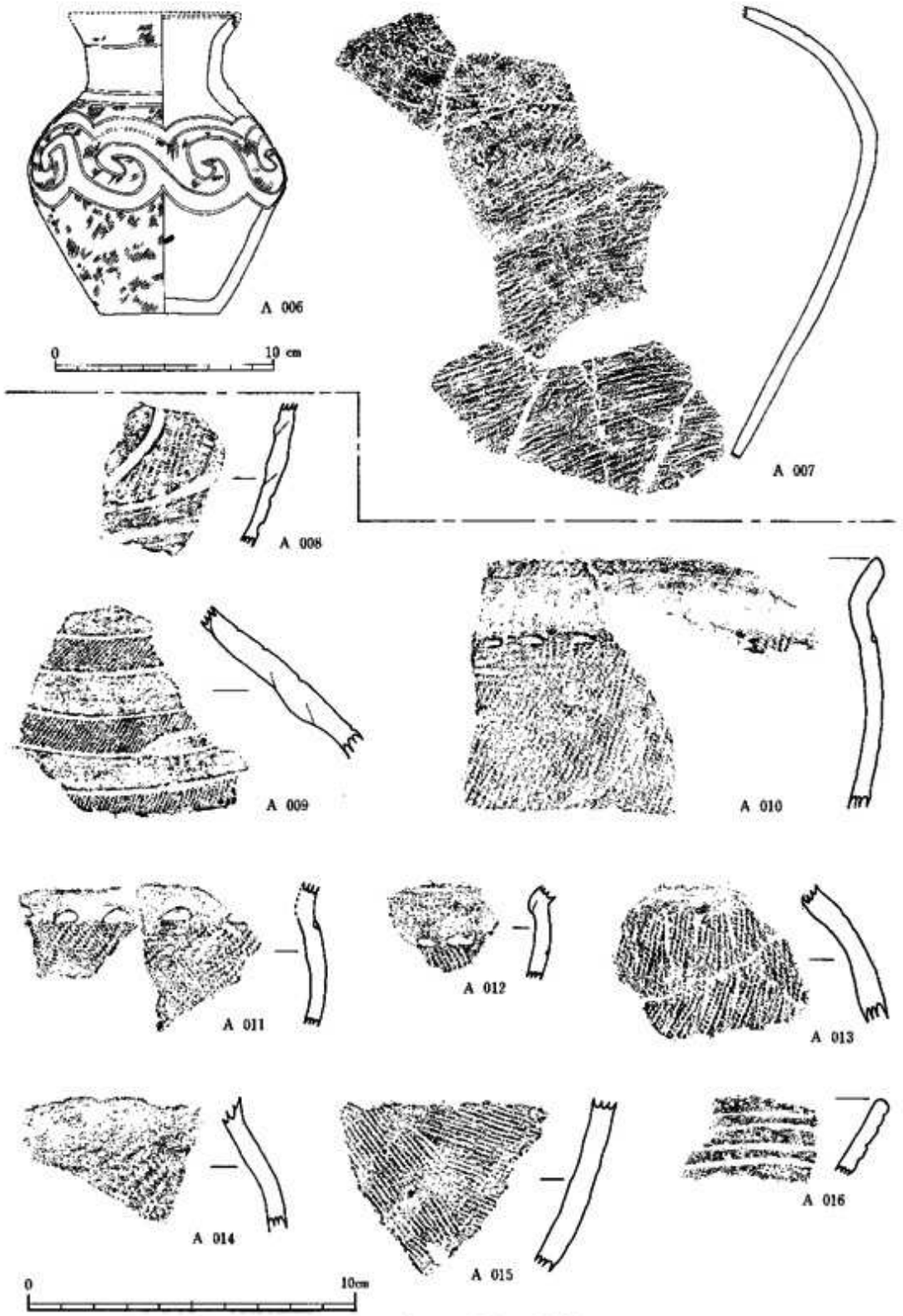
A 008 は小破片の為どのような器形になるか判然としない。太い沈線区画による磨消縄文（単節ＬＲ）を主要文様帯とする。縄文部分も含め外面はていねいに磨かれている。内面には幅約1.5㎝の輪積痕が残る。灰褐色を呈する焼成良好な精製土器である。第Ⅰ類土器は溝より出土したこの一点のみである。

第Ⅱ類

1）壺形土器 器高が20㎝以下の小型のもの（A 006）と、器高が50㎝前後の大型のもの（A 001 ・ 002 ・ 007 ・ 009）がある。小型壺は第23号土壙より1点出土している。口頸部を欠失するが、器体の反面を残す広口壺で、復原器高は約15㎝、最大径は16.8㎝で肩部に位置する。胴部上位から、肩部中位にかけて、細い沈線と充塡縄文手法（註1）による渦状文が8単位めぐる。やや外開きに直立する頸部には上位に1条、下位に2条の細い沈線がめぐり、ゆるやかに外反する。口縁部外面には縄文、内面には1条の細い沈線が施されている。沈線の施文法は全て、左回転で幾度かの引き継ぎがみられ、特に渦状文部においては著しい。縄文は全て細い単節ＬＲ縄文である。頸部外面、渦状文内無文部には特にていねいな磨き（頸部外面は横方向）が施されている。また、口頸部内面にも横方向の磨きがみられる。底部は風化が激しいが布目痕が認められる。器面は内外面とも剝離が著しい。にぶい橙色を呈する焼成良好な精製土器である。以上の他に無文の頸部破片が1点出土している。大型壺は出土したものが全て肩部以下であったが肩部が強く張り、ここに最大径をもつ広口壺と思われる。肩部に細い沈線と充塡縄文手法による同心円文がめぐるもの（A 007 ・ 009）と胴部同様に縄文のみのもの（A 001）がある。A 007 は文様帯より下が異条縄文（L$\left\{\begin{matrix}R\\L\end{matrix}\right.$）であるが、他の土器は全て単節ＬＲ縄文である。肩部内面には横方向の磨きが施こされており、外面同心円文内無文部にも磨きがほどこされて



第17図　弥生土器実測図(1)



第18図　弥生土器実測図(2)

いる。なお、底部に木葉痕が認められるもの（A 002）がある。また、A 001、009の内面には、幅約2cmの輪積痕が残っている。これらの大型壺はにぶい黄褐色を呈するものが多く、半精製ないし粗製の土器である。A 002・009はA 006と同じ土壌より出土した。A 001はピットからの一括出土であり、A 007はピット及び12号溝から出土した。

2）甕形土器　口径が20cm以下の小型のもの（A003・010～012）と、30cm以上になる大型のもの（A 004・013～015）がある。A 003・010は口径と胴部上位の径がほぼ等しく、口頸部が「く」の字状を呈する。口唇部・胴部には、単節ＬＲ縄文が施され、胴部縄文上限部に、押曳き列点文（A 003 右→左方向、A 010 左→右方向）が加えられる。頸部外面にはナデの痕が認められる。A 011も上述のものと同様な器形と思われる。これらはにぶい褐色、橙色を呈する半精製土器である。A 012は胴部上半から頸部にかけての破片で前述の器形に比べ頸部はかるく内湾し、口縁部は強く外反し、最大径が口径部にある器形と思われる。押曳き列点文（右→左方向）下には植物茎回転文[註2]が施され、頸部外面にはかるい磨きがみられる。にぶい赤褐色を呈する粗製土器である。これら小型甕の内面には横方向のていねいな磨きが行われている。A 003、011は第2号、第5号溝から出土し、A 010は第45号土壌から、A 013はピット内から出土した。大型甕は全て頸部以下の破片であるが、口頸部「く」字状を呈する小型の甕とほぼ同様な器形か、あるいは胴部上半が多少膨み、ここに最大径を持つ器形かと思われる。A 013・014は胴部上半から頸部にかけての破片であるが、ともに胴部縄文（単節ＬＲ）上限部に列点文を持たない。A 004は底部から胴部中位まで現存する。外面は単節ＬＲ縄文が施されているが、底部付近では、ていねいな磨きがおこなわれ無文部を形成する。底部には木葉痕が認められる。A 015は胴部破片であるが、外面には植物茎回転文が施されている。これら大形甕の内面には横方向のていねいな磨きがみられ、にぶい褐色（A 004・015）、にぶい赤褐色（A 013）、灰褐色（A 014）を呈する粗製土器である。A 004はピット内から一括出土した。A 015はA 006と同一土壌から、A 013、014はピット、溝から出土した。

3）鉢形土器　A 005は口縁部から胴部下半にかけての破片で、口縁部がわずかに外反し、椀形に近い器形で、高坏の坏部の可能性もあるが、一応鉢とした。胴部上半から口縁部にかけての外面には5条、口縁部の内面には2条の平行沈線（外面中間線は波状の可能性もある。）がめぐっている。これら沈線は先端が鋭い施文具の為か断面形が「Ｖ」字状を呈す。口唇部には単節ＬＲ縄文が施されている。内外面とも磨かれているが、外面に1cm前後の輪積痕が部分的に残っている。灰褐色を呈する粗製土器で、内面はかなり風化している。ピット内から出土した。これ以外に小破片が数点出土しているが、器形を推し測れるものはない。

第Ⅲ類

A 016は口縁部がやや内湾する口径10cm前後の鉢か壺の口縁部破片かと思われる。外面には

半截竹管状施文具による4条の平行沈線がめぐる。内外面とも風化が著しい。灰白色を呈する精製土器である。土壙内より出土した。第Ⅲ類土器はこれ1点のみである。

まとめ

今回出土した土器の大半は第Ⅱ類である、第Ⅰ類・第Ⅲ類はわずか各1点である。第Ⅱ類を器種別にみると、大型壺・甕形土器が占める割合がほとんどである。これら第Ⅰ類から第Ⅲ類の器形・施文等の特徴より、第Ⅰ類は大泉式、第Ⅱ類は栃形囲式、第Ⅲ類は十三塚式に比定されよう。

註1　鈴木公雄　1969　「安行系粗製土器における文様施文の順位と工程数」「信濃」21－4

註2　須藤　隆　1973　「土器組成論」「考古学研究」第19巻　第4号

（2）　土師器（第19～21図、図版15・16）

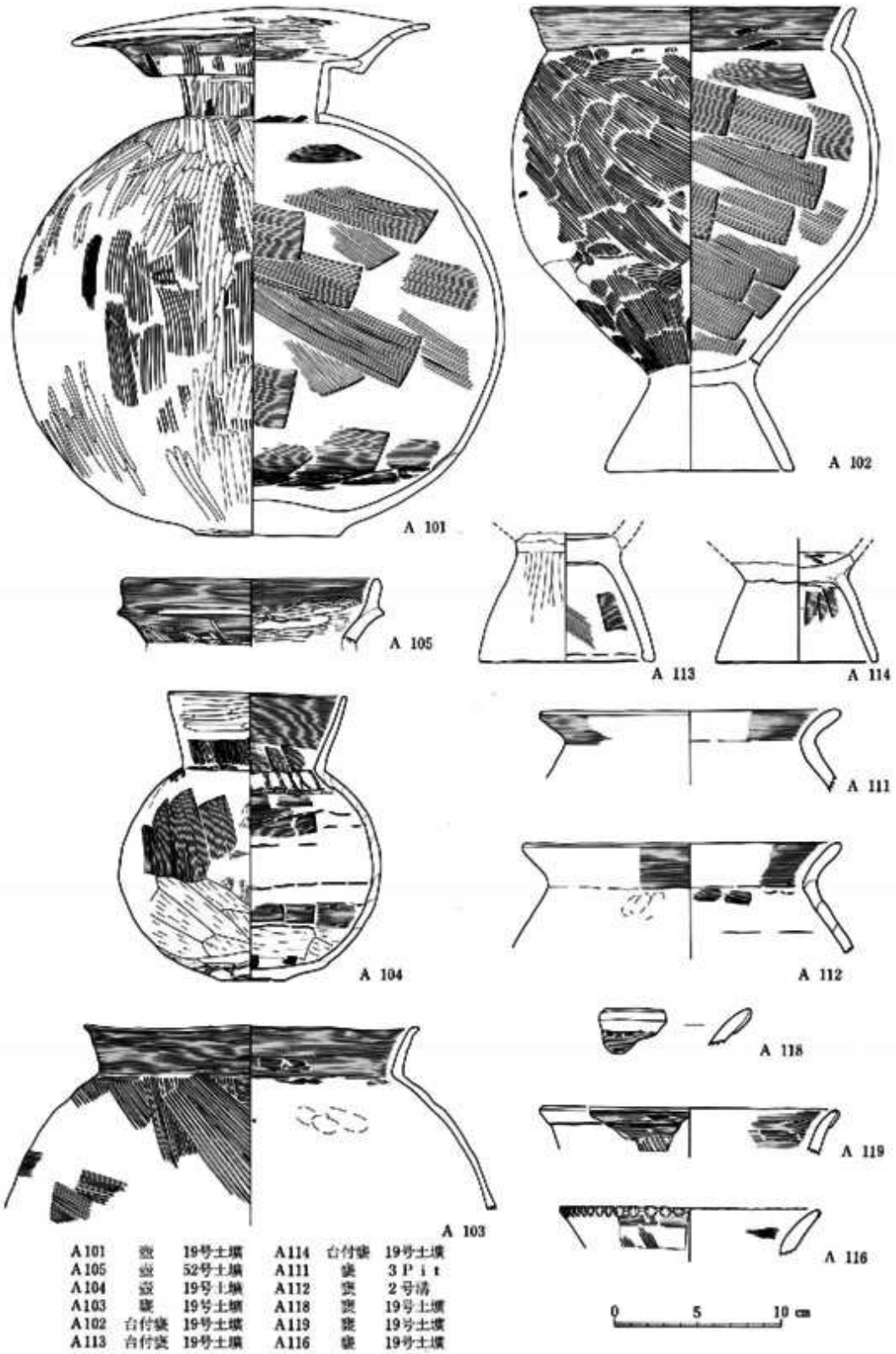
○ロクロ使用以前の土師器

ロクロを使用する以前（表杉ノ入式以前）の土師器には、壺、坩、甕、台付甕、高坏、器台、坏形土器、ミニチュア土器（坏形）の各器形がある。

1）　壺　図化したものは3点ある。A 101はやや扁平な球形の胴部から頸部が直立し、強く外反する有段口縁がつく。器面調整は外面の体部・頸部がハケメ後縦位のヘラミガキ、口縁部がハケメ後ヨコナデ、内面の口縁部が横位のヘラミガキ、体部がヘラナデである。A 105は口縁部の破片である。頸から外反する口縁に、さらに直立の口縁がつき、接合部外面に強い稜をもつ。器面調整は稜より上は内外面ともヨコナデ、下はヘラミガキである。A 104は球形に近い体部にわずかに外反する体部高の1／3程のやや長い口縁がつく。器面調整は外面の口縁部上半がヘラミがキ、口縁部下半と体部上半がハケメ、体部下半がヘラケズリである。内面の口縁部上半はヨコナデ、口縁部下半から体部はヘラナデである。体部上半にはオサエの痕跡が認められる。

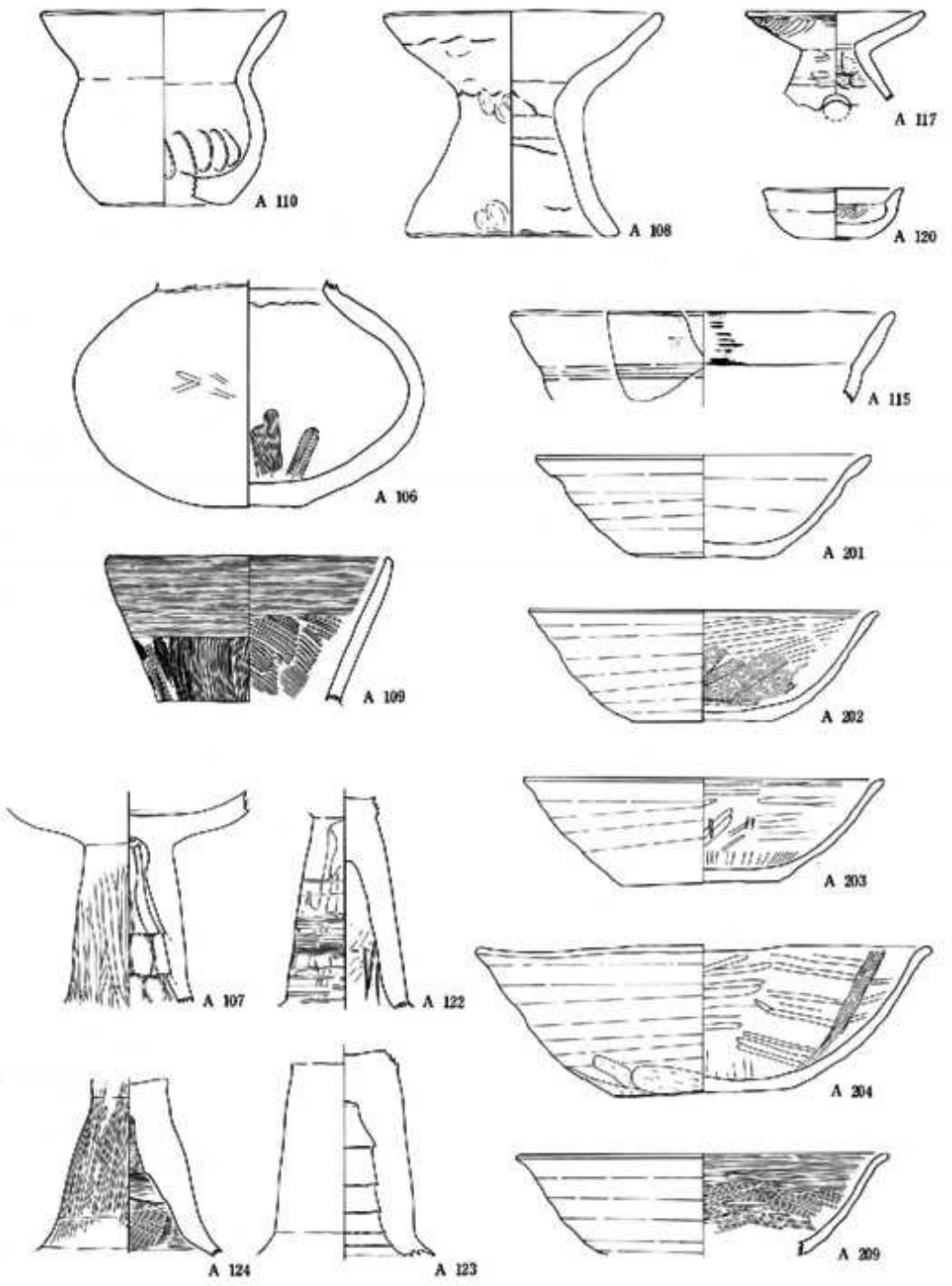
2）　坩　図化したものは3点ある。A 106、109は壺に含めることも可能であるが、本書では坩として扱う。A 101は小形の坩で、扁平な球形の体部に外反する口縁がつく。最大径は口縁にあり、体部径よりわずかに大きい。摩滅が著しく器面調整は体部内面のナデツケ痕が観察できるだけである。A 106は大形坩の体部である。扁平な球形で、器面調整は外面がヘラミガキ、内面がヘラナデである。A 109はわずかに外反して立ち上がる口縁部の破片で、端部がわずかに内湾する。器面調整は外面上半がヨコナデ、下半がハケメ、内面上半がヨコナデ、下半がハケメである。

3）　甕　図化したものは6点ある。A 116、118、119は甕以外の器形の口縁とも考えられるが、甕として扱う。A 103は体部上半から口縁部の破片で、丸味のある体部に外反する口縁がつく。体部と口縁部の境の内側には明瞭な稜が認められる。器面調整は口縁部内外面がヨ



A101	壺	19号土壙	A114	台付甕	19号土壙
A105	壺	52号土壙	A111	甕	3 P i t
A104	壺	19号土壙	A112	甕	2号溝
A103	甕	19号土壙	A118	甕	19号土壙
A102	台付甕	19号土壙	A119	甕	19号土壙
A113	台付甕	19号土壙	A116	甕	19号土壙

第19図　土師器実測図(1)



A−110	甕	51号土壙	A−117	器台	43号土壙
A−106	甕	51号土壙	A−120	ミニチュア(杯)	表　土
A−109	甕	51号土壙	A−115	杯	19号土壙
A−107	高杯	52号土壙	A−201	杯	6 号 溝
A−122	高杯	15 号 溝	A−202	杯	15 号 溝
A−123	高杯	表　土	A−203	杯	6 号 溝
A−124	高杯	7号土壙	A−204	杯	6 号 溝
A−121	高杯	19号土壙	A−209	杯	6 号 溝
A−108	器台	19号土壙			

第20図　土師器実測図(2)

コナデ、体部外面がハケメ、体部内面がナデである。A 111 は体部から口縁部にかけての破片で、厚みのある口縁部が強く外反する。内面の口縁部と体部の境は丸くなり、不明瞭である。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部外面がナデ、体部内面がヘラナデである。A 112 は A 111 と類似する。A 118 ・ 119 は折り返しのみられる口縁部片であり、A 116 は棒状工具の腹縁の押圧による波状口縁の破片である。

4） 台付甕　図化したものは3点ある。いずれも19号土壙から出土した。A 102 は底部（脚部）を欠損するが、体部下半の形状により台付甕と判断される。器形は底部から直線的に広がりながら立ち上がり、丸味をもって外反する口縁部に至る。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部外面がハケメ、体部内面がヘラナデである。A 113 、114 は脚部の破片で、二次的な酸化を受けて赤褐色～橙色に焼けている。

5） 高坏　図化したものは5点ある。いずれも脚筒部の破片である。脚筒部の全形がわかる A 107 、122 、123 、124 は、長円錐台状を呈する。外面の器面調整は、A 123 がナデ、A 107 、121 が縦位のヘラミガキ、A 122 が横位のヘラミガキ、A 124 がハケメである。

6） 器台　2点出土している。A 108 は受部径が脚部の底部径より大きな鼓形の器台である。内外面ともナデにより器面調整されるが、作りは粗雑である。A 117 は小振りの受部に脚

第3表　土師器一覧表

遺物番号	器形	出土遺構	型式名
A－101	甕	19号土壙	塩釜
102	台付甕	19号土壙	塩釜
103	甕	19号土壙	塩釜
104	甕	19号土壙	塩釜
105	甕	52号土壙	塩釜
106	壺	51号土壙	南小泉
107	高坏	52号土壙	南小泉
108	器台	19号土壙	塩釜
109	壺	51号土壙	南小泉
110	壺	51号土壙	南小泉
111	甕	Pit 3	南小泉
112	甕	2 号溝	南小泉
113	台付甕	19号土壙	塩釜
114	台付甕	19号土壙	塩釜
115	坏	19号土壙	塩釜
116	甕	19号土壙	塩釜
117	器台	43号土壙	塩釜
118	甕	19号土壙	塩釜
119	甕	19号土壙	塩釜
120	ミニチュア(坏)	表土	南小泉
121	高坏	19号土壙	塩釜
122	高坏	15 号溝	南小泉
123	高坏	表土	南小泉
124	高坏	7号土壙	南小泉

遺物番号	器形	出土遺構	型式名
A 201	坏	6 号溝	表杉ノ入
202	坏	15 号溝	〃
203	坏	6 号溝	〃
204	坏	6 号溝	〃
205	脚	2 号溝	〃
206	甕	55 号土壙	〃
207	甕	18 号溝	〃
208	甕	表土	〃
209	甕	6 号溝	〃
210	欠番		
211	甕	Pit 183	〃

部がつく。脚部には3ヶ所に透孔が穿たれている。器面調整は外面受部がヨコナデ後ヘラミガキ、脚部の外面はヘラミガキ、脚部の内面はヘラケズリである。

7） 坏形土器　口縁部から体部にかけての小破片が1点出土している。口縁部と体部の境の外面には沈線様の軽い段をもち、これに対応する内面には稜をもつ。口縁部の内外面には朱塗りの痕跡がある。

8） ミニチュア土器(坏形)　A 120は上げ底風の底部から緩やかに立ち上がり、口縁部が外反する。口縁部の内側下端には顕著な稜を形成する。比較的精巧な作りのものである。

○ロクロ使用後の土師器

ロクロを使用した土師器には、甕・坏および器形不明の脚部片が出土している。

1） 甕　図化したものは4点ある。A 207は長胴甕で、口縁部が一度外反した後に端部が直立に近く立つものである。器面調整は体部上半から口縁部にかけてが内外面ともロクロナデ、体部下半の外面がヘラケズリ、内面がナデである。A 208はA 207と同様である。A 211は直立に近い体部からそのまま直立の口縁部へと続く。口縁部外面は幅2cm程わずかに高くなっている。

2） 坏形土器　図化したものは5点あり、そのうち4点が6号溝から出土した。器形はおおむね須恵器の坏と類似し、底部から緩やかに立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。

3） 器形不明の脚部片　A 205は形状から脚部と考えられるが、どのような器形に付属するものであるかは不明である。全体がロクロナデ調整され、外面の一部にヘラケズリの痕跡が観察される。

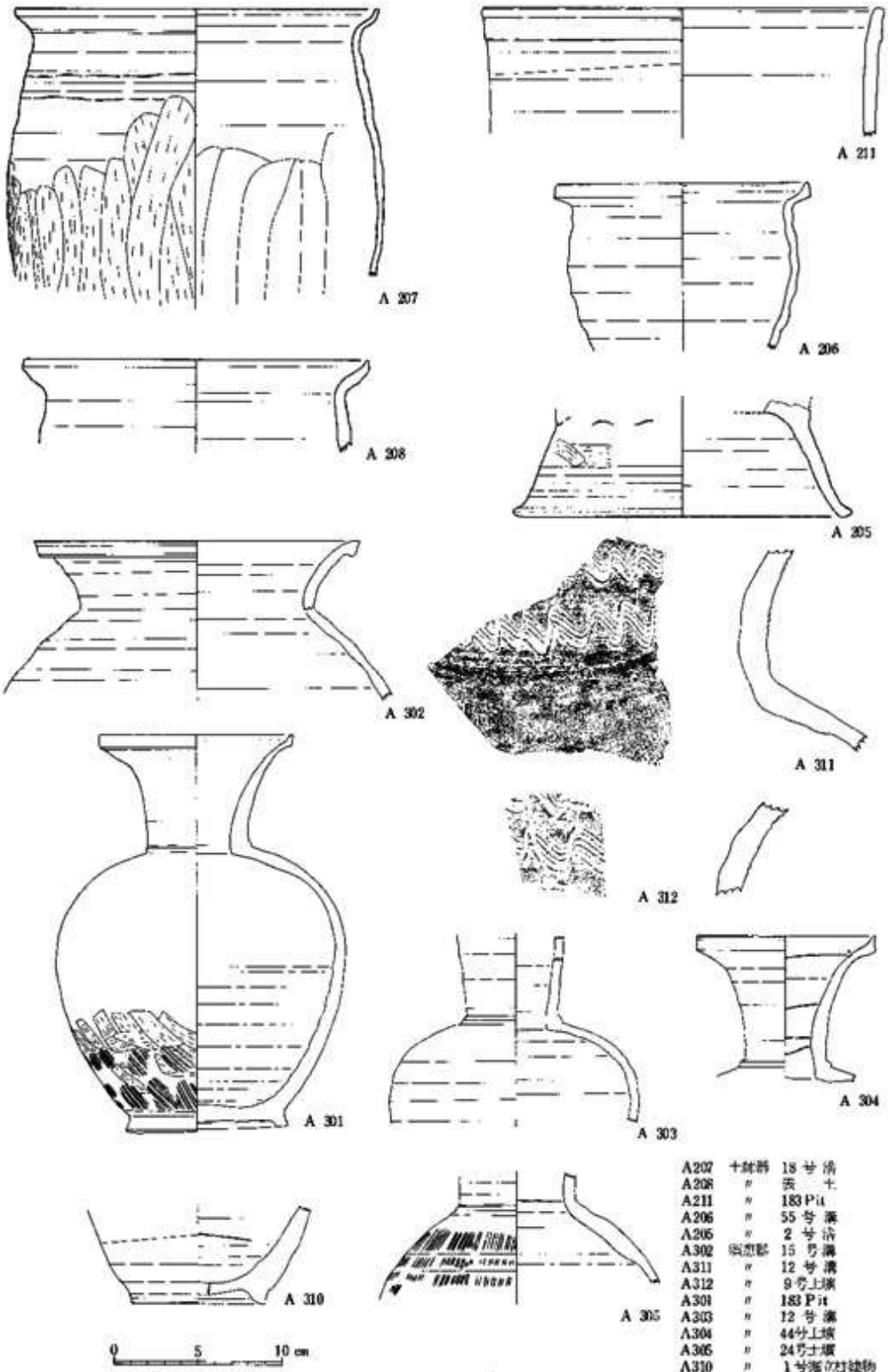
第4表　土師器坏一覧表

遺物番号	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	底部	調整 外面	調整 内面	出土地
A−201	4.3	13.8	5.3	回転糸切り	ロクロナデ・下端手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ	6号溝上部
A−202	4.7	14.5	5.8	回転糸切り	ロクロナデ	ヘラミガキ→ナデ(黒色処理)	15号溝上層
A−203	4.5	14.8	6.5	回転糸切り	ロクロナデ	ヘラミガキ(黒色処理)	6号溝上部
A−204	6.2	18.7	7.4	手持ちヘラケズリ	ロクロナデ・下端手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ(黒色処理)	6号溝上部
A−209	−	15.3	−	−	ロクロナデ	ヘラミガキ(黒色処理)	6号溝上部

まとめ

本調査において出土した土師器のうち図化したものは、ロクロ使用以前のもの24点、ロクロ使用後のもの10点の計34個体である。各個体の器形と調整技法の特徴は前述のとおりである。これらを氏家和典氏の土師器編年に位置付けると、塩釜式・南小泉式・表杉ノ入式に相当するものである。図化した各個体の編年的位置と出土遺構の関係を示したのが表−3である。

19号土壙から出土した12点（壺−2・台付甕−3・甕−4・器台−1・坏−1・高坏−1）は一括して塩釜式と考えられるもので、同型式の組み合せを知ることができる。有段口縁のA−



A207	土師器	18号溝
A208	〃	表　土
A211	〃	183Pit
A206	〃	55号溝
A205	〃	2号溝
A302	須恵器	15号溝
A311	〃	12号溝
A312	〃	9号土壙
A301	〃	183Pit
A303	〃	12号溝
A304	〃	44号土壙
A305	〃	24号土壙
A310	〃	1号溝の対岸物

第21図　土師器、須恵器実測図

101は、仙台市内では安久東遺跡の方形周溝墓出土品に類似例がみられる。(註1)また波状口縁の甕A－116は、弥生土器の影響を残しているものと考えられるが、これと類似するものは仙台市大野田の六反田遺跡より出土している。(註2)塩釜式の土器は以上の外に、52号土壙から出土した壺口縁部A－105と、43号土壙から出土した器台A－117がある。

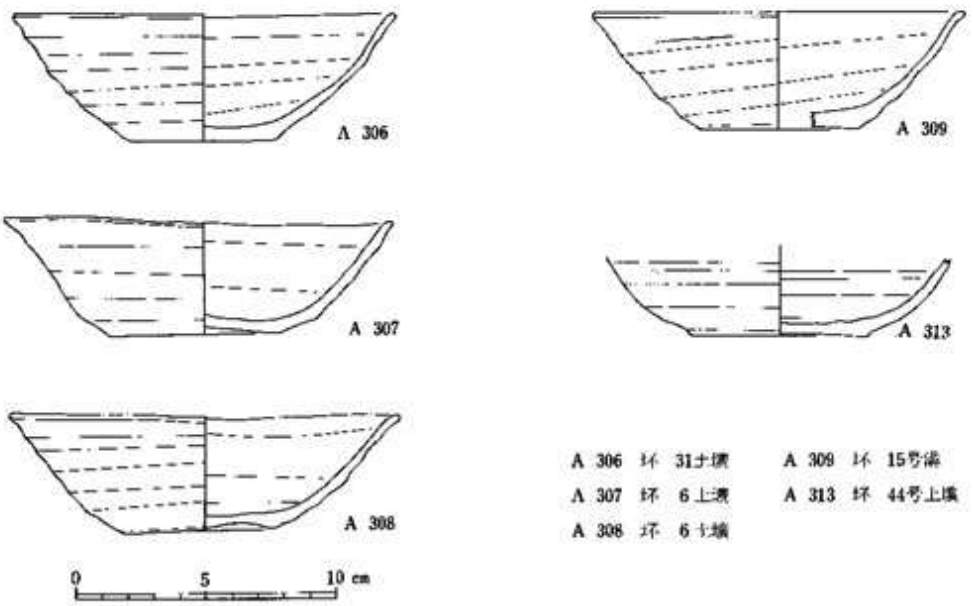
南小泉式と考えられるものは、51号土壙から出土した3点の坩の他に、高坏・甕の破片がある。甕は塩釜式のものに比して口縁部は厚く、端部は丸味をもち、口縁部と体部の境の内面の稜も認められなくなっている。坏形のミニチュア土器A－120は、口縁が外反し、それに対応する内面に強い稜を有する南小泉式の坏を小形化したものと考えられる。

ロクロ使用後の土師器は全て表杉ノ入式と考えられる。6号溝から出土した4点の坏は回転糸切り底のもの、回転糸切りの後に体部下端を手持ちヘラケズリするもの、底部と体部下端を手持ちヘラケズリしたものが共伴して出土した。

今回の調査において出土した土師器は以上の3型式が確認されたが、引用式以降、国分寺下層式までの4型式の土師器については出土が確認されていない。

註－1　宮城県教育委員会「宮城県文化財発掘調査略報－安久東遺跡－」　宮城県文化財調査報告書第53集　1978

註－2　仙台市教育委員会「六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし」仙台市文化財調査報告書第16集　1979



第22図　須恵器実測図

第5表　須恵器坏一覧表

遺物番号	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	底部切り離し方法	出土遺構
A 306	14.4	5.6	4.9	回転糸切り	31号土壙
307	14.7	6.5	4.3	〃	6号溝
308	14.7	5.5	4.6	〃	6号溝
309	13.9	6.0	4.6	〃	15号溝1層
313	−	6.9	−	〃	44号土壙1層

（3）　須恵器　（第21・22図、図版17）

本調査において出土した須恵器には、甕・長頸壺・坏がある。

1）　甕　図化したものは3点ある。全て破片であり、全形のわかるものはない。大形と中形のものがあり、大形のものには5条の波状沈線文が2段みられる頸部片2点(A 311・312)がある。中形の甕A 302は肩部から口縁部までロクロナデ調整される。

2）　長頸壺　図化したものは5点ある。全形のわかるのはA 301だけである。各個体には共通点と相違点が認められる。共通点としては、底部のある2点（A 301・310）は高台がつき、体部と頸部の境がわかる4点（A301、303、304、305）はいずれも境界に降線がめぐる。また、口縁のある2点（A301、304）は、外反して広がる頸部に続く口縁端部が直立してつく。これに対し、相違点は器面調整に認められ、体部上半がロクロナデ調整のみによるA301、303と、タタキ後ロクロナデ調整されるA 305とがある。

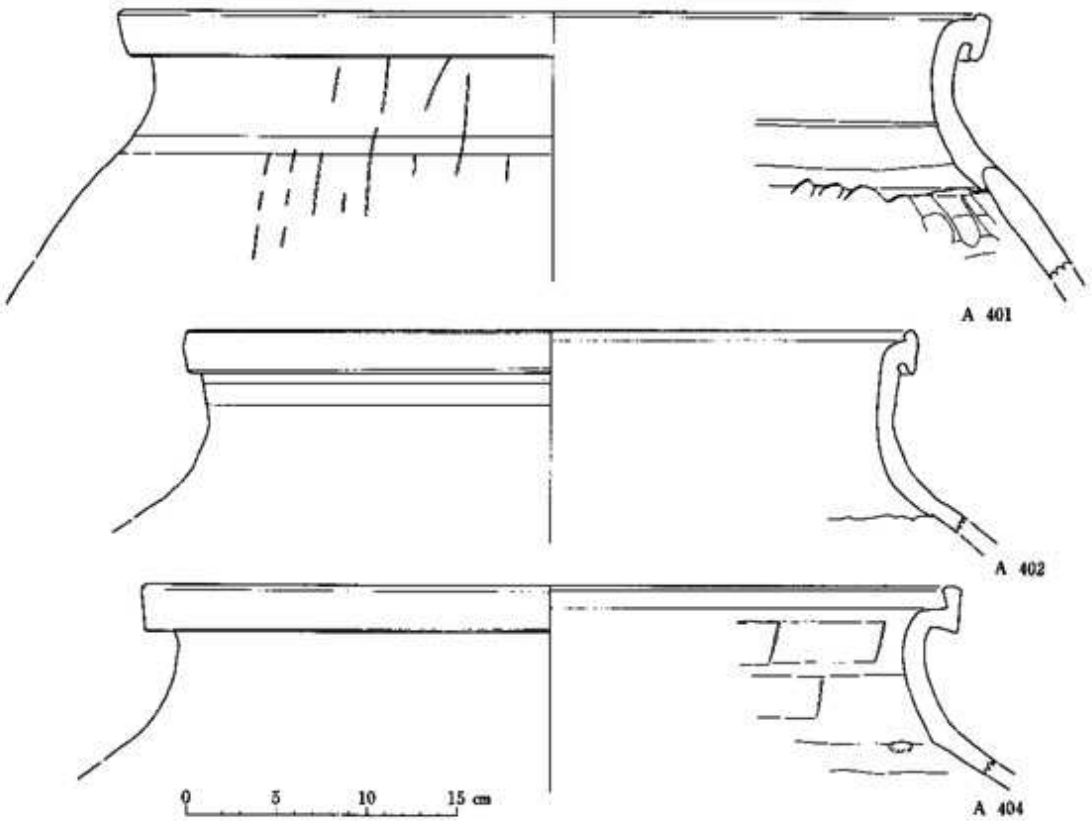
3）　坏　図化したものは5点ある。全て回転糸切り底で、底部から緩やかに立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。体部の内外面にロクロナデによる凹凸が顕著にみられる。色調はいずれも明るい灰白色を呈している。大きさは器高が4.5～4.9cm、口径が13.7～14.7cm、底径が5.5～6.5cmと平均的で類似する。

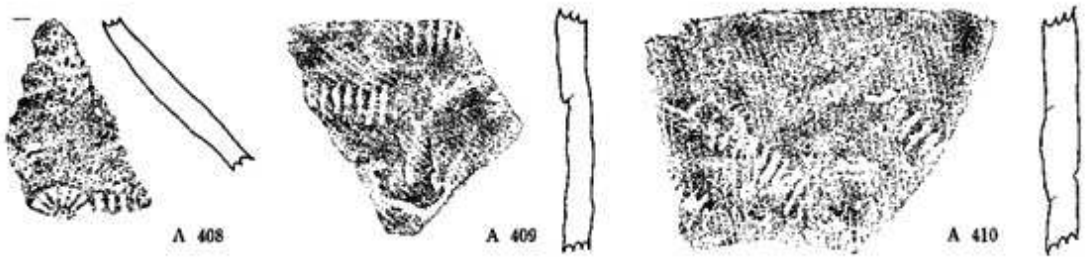
須恵器の年代は、器形および成作技法の特徴によって9世紀以降11世紀までと考えられる。

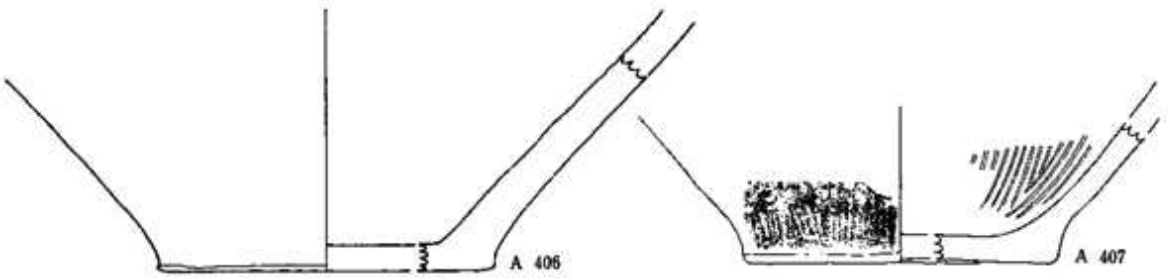
（4）　中世陶器　（第23・24図、図版18）

調査によって出土した中世の陶器には無釉の日常雑器類の甕・擂鉢と釉薬をかけた施釉陶器とがある。すべて破片であり、前者が109点、後者が2点出土した。これらは主に24号・29号土壙、27号・36号・50号井戸跡、2号・16号溝等より出土した。

甕　破片が多く出土したが図化できたものは3点である。A 401は29号土壙出土の口縁部片で、口径47cmを計る。口縁部外面に幅2.6cmの口縁帯が形成され、断面はN字形に折り返される。端部は比較的厚く丸味をもつ。内面の接続部分は指による圧痕が見られる。A 402は24号土壙出土で、口径39cmを計る。これも口縁部外面に幅2.6cmの口縁帯を形成し、断面はN字形を呈す。端部はA 401よりも鋭く、口縁部外面の口縁帯内側に1条の凹みがめぐる。調整はいずれも内外面ヨコナデされ、色調は暗赤褐色で外面に自然釉がついている。







第23図　中世陶器実測図

A 404は50号井戸跡出土の口縁部片で、口径45cmを計る。体部より八の字状に立ち上がり、口縁部はほぼ水平にひらいて上方へ折り返している。端部は丸味をもつ。口縁部外面に幅2.6cmの口縁帯を形成する。色調は明赤褐色を呈し、焼成は良好である。外面は自然釉のためオリーブ灰色を呈し、窯体の一部が付着している。

A 403は2号溝出土の口縁部片で内面にかるい段を有する受口状の口縁である。全体として厚みをもち、口縁部は上方にのびて端部は丸味をもつ。A 405も受口状の口縁部でA 403と同様のものである。色調は共に暗赤褐色で、調整も内外面ヨコナデされている。

A 409と410は甕体部片で外面にカキ目状の痕跡を有し、その後部分的に叩き目がある。A 408は外面に押印文様のある体部片で24号土壙より出土した。

擂鉢　A 406は29号土壙出土で底径12.9cmを計る。内面はよくすり減っているが櫛目は見られない。焼成は良好で明赤褐色を呈す。A 407は2号溝出土で底径12cmを計る。内面はよくすり減り、櫛目がわずかに残存する。A 414と415は同一個体を考えられるもので37号土壙より出土した。415は底径11cmを計り、内面に5～6本が1単位の櫛目が底に十字、体部全体に施されている。焼成は還元炎焼成で良好である。A 413は17号溝出土の口縁部片である。

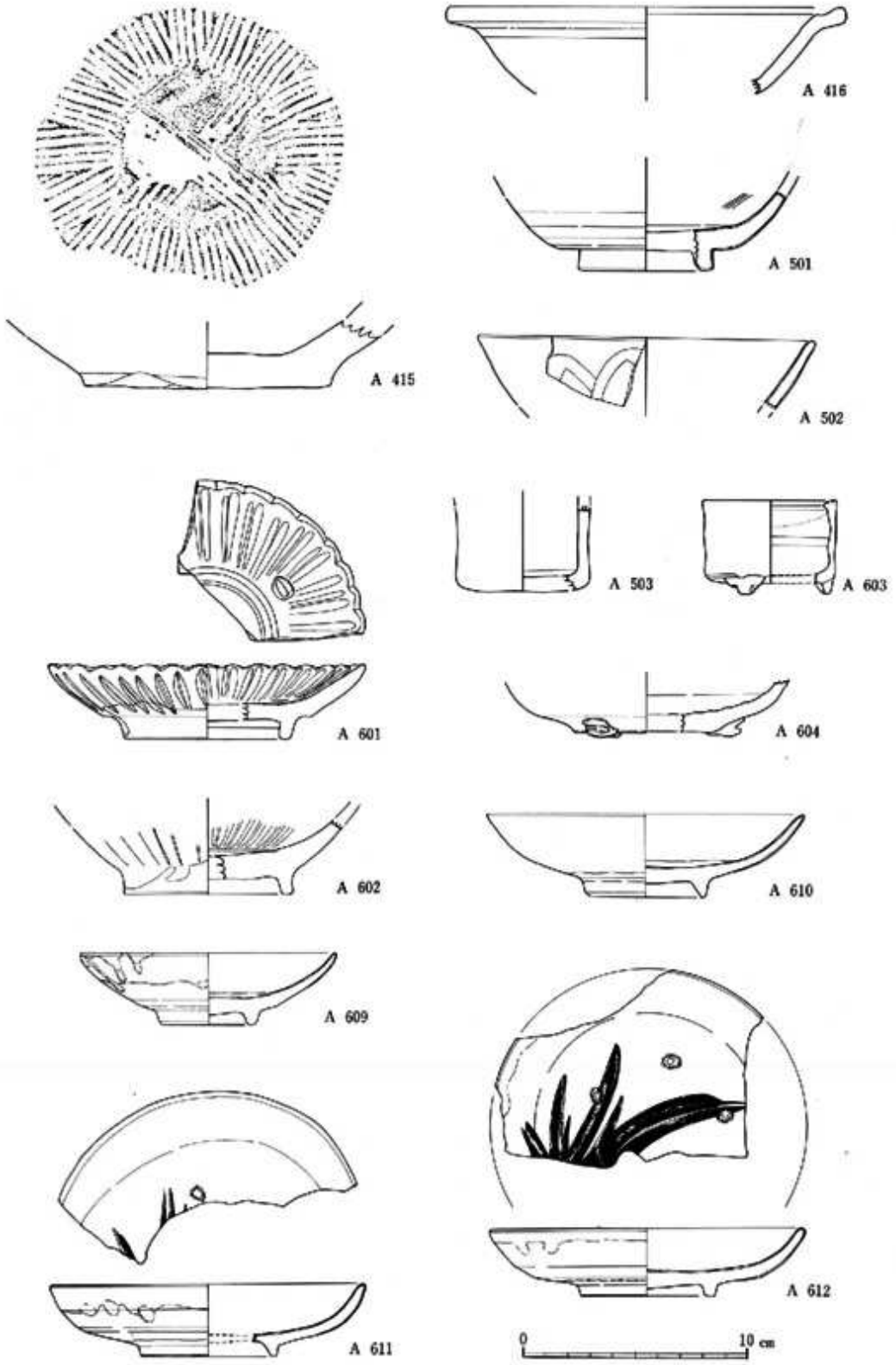
これらのA 401、402、404は常滑焼に類似するものであり、常滑の製品であろう。また、A 403・405は宮城県内の東北窯跡で焼成されたものに似ており、県内で焼成されたものである。

施釉陶器は2点でA 416は皿形で口径17.4cm、残存高3.8cmを計る。体部は外方へ直線的に立ち上がり、口縁部は強く外反して内面に段を形成する。内外面にうすい緑っぽい灰色の釉がうすくかけられ光沢をもつ。他の1点は壺もしくは瓶の小破片で、外面に櫛状工具による5条の沈線が施され、オリーブ灰色の釉がかけられている。貫入があり、光沢をもつ。24号土壙より出土した。これらは古瀬戸（？）と考えられる。

A 701は36号井戸跡出土の火鉢で口径43cm、残存高10.8cmを計る。外面に2個づつ押印文様がある。脚が付いていたが、欠損している。四脚と考えられる。

（5）　青　磁（第24図）

中国製青磁は7点出土したがすべて小破片である。器形は塊・香炉(?)がある。A501は15号溝出土の塊で残存高3cm、底径7.8cm、高台径6cmを計る。全体にオリーブ灰色の釉がうすくかけられ、光沢をもつ。底部内面には浅い1条の沈線がめぐり、体部に櫛状工具による陰刻文様がわずかに描かれている。A502は13号土壙出土の塊で口径14.8cmを計る。口縁部は体部よりまっすぐ外側にひらき、端部は丸い。全体にオリーブ灰色の釉がうすくかけられ、貫入・光沢がある。体部外面には葉先の尖った鏑葉文がある。A503は13号土壙出土の香炉(?)で最大幅6cmを計る。体部はほぼ垂直に立ち上がる。外面に明オリーブ灰色の釉がうすくかけられ、光沢をもつ。その他には小破片であるが陰刻文様と鏑葉文のものがある。これらの青磁の年代は13～14世紀のものと考えられる。



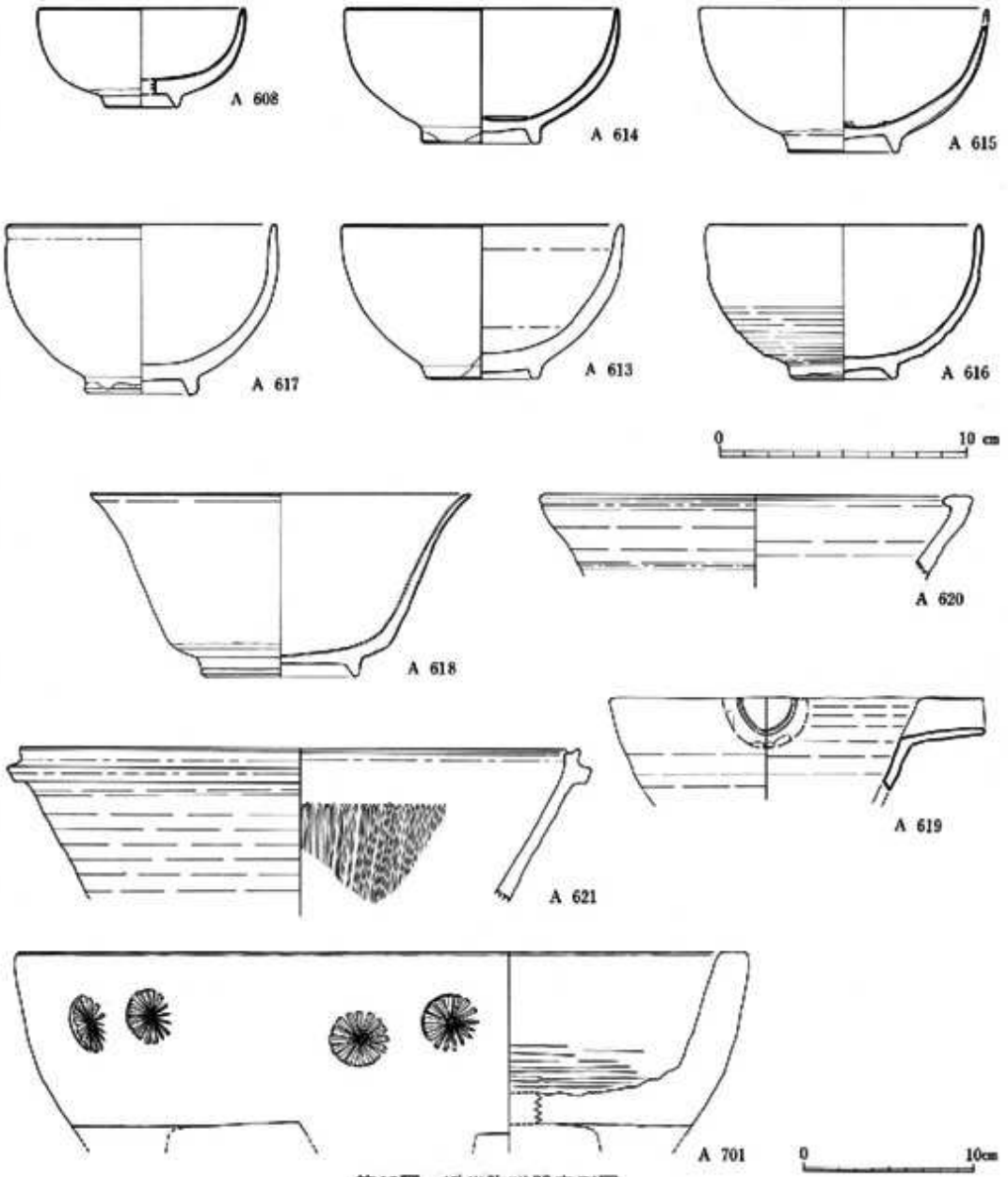
第24図　中世陶器、青磁、近世陶器実測図

（6） 近世陶磁器 （24・25図、図版19）

量としては土師器の次に多く、主に1b溝、13号土壙等により出土している。24号土壙より出土した美濃焼の小破片（近世初頭？）以外は江戸時代以降に位置づけられる。

A 601は25号土壙出土の菊皿で口径14.1cm、器高3.3cm、高台径7.4cmを計る。体部下半から底部外面以外には淡黄色の釉がかけられている。A 602は24号土壙上面出土の菊皿である。この菊皿は美濃の黄瀬戸であり、江戸時代のものと考えられる。

その他の陶磁器類には塊・皿・鉢・香炉等があり、香炉以外は1b溝より多く出土した。塊は



第25図 近世陶磁器実測図

大小二種類あり、A 608は小形の埦で、器高4cm、口径8.4cmを計る。内外面に緑色及びトルコブルーの釉がかけられている。A 613～617は大形の埦で、器形は底部より弧を描いて立ち上がり、口縁は直立する。高台は高さ5～7mmで直立もしくはわずかに外傾する。全体に釉がかけられ、釉は緑色・灰オリーブ色、透明色があり、貫入・光沢をもつ。

皿も大小二種類あり、A 609は小皿で、器高3.2cmを計る。内外面に緑色の釉がかけられている。大形の皿は口径14cm、器高3～3.7cm・高台高が5～7mmを計り、釉は高台から底部外面を除く内外面に灰オリーブもしくはコバルト色でうすくかけられている。A 611・612は内面に黒色で草文が描かれている。

A 618は鉢で、器高10.8cm、口径22.2cm、底径12.8cmを計り、緑色の釉が全体にかけられ、貫入・光沢をもつ。A 619は片口の鉢である。A 621は擂鉢で内外面に鉄釉がかけられており内面に櫛目が施されている。

A 603は13号土壙出土の香炉で口径6cm、器高4.2cmを計る。底部に三個の脚がつく。器形は底部より垂直に立ち上がり口縁部は内傾する。外面には明緑灰色の釉がかけられ、貫入、光沢がある。

2．土　製　品　（第26図、図版20）

土器以外の土製品としては土玉と土錘がある。

土玉　19号土壙から出土したB 001が1点ある。直径2.9cm程の球形の玉で、直径0.4cmの貫通孔がある。土師質で灰褐色～黒色を呈す。

土錘　これは19点出土した。各土錘の大きさは第6表に示したとおりである。焼成は全て土

第6表　土　錘　一　覧　表

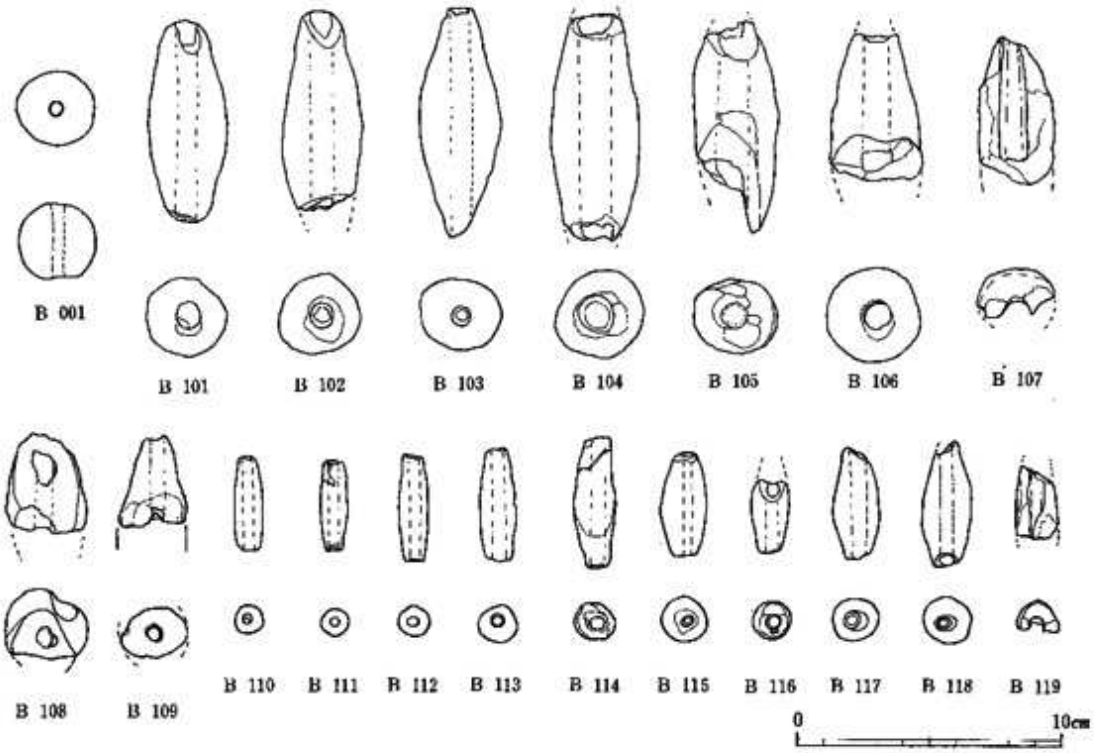
遺物番号	長　さ（cm）	最大幅（cm）	孔径（mm）	重量（g）	出　土　地	分　類
B－101	7.8	3.0	8	56	P i t 33　1層	A
B－102	7.6（残存）	3.2	8	59	表　採	A
B－103	8.8	3.2	8	51	P i t 4	A
B－104	8.7（残存）	2.4	12	71	2号溝上部	A
B－105	8.1（残存）	3.3	9.5～13	60	表　採	A
B－106	5.7（残存）	3.6	10～11	58	6号溝	A
B－107	5.7（残存）	3.0（残存）	11	20	3号溝	A
B－108	2.9（残存）	3.1	6	22	表　採	A
B－109	3.6（残存）	2.6（残存）	5	10	6号溝	A
B－110	3.6	1.1	4.5	2	1号掘立柱建物P14	C
B－111	3.5	1.1	4	2	〃　P12	C
B－112	4.1	1.1	4	2	〃　P12	C
B－113	4.3	1.4	5	5	〃　P12	C
B－114	5.0	1.6	5	7	43号土壙　1層	C
B－115	4.0	1.8	3	11	1　a　溝	B
B－116	2.8（残存）	1.5	4	5	表　採	B
B－117	4.3	1.8	5～6	10	44号土壙	B
B－118	4.7	1.9	5	11	表　採	B
B－119	小破片	－	－	－	－	－

師質の焼けとなっている。

大きさと形状によって3類別される。

土錘
- A類…大形で中央が膨んでいるもの
- B類…小形で中央が膨んでいるもの
- C類…小形で円筒状のもの

分類と時期および遺構との関連は明らかでないが、C類の5点のうち4点が1号掘立柱建物跡の掘り方内から出土（ピット12から3点、ピット14から1点）していることは注意される。



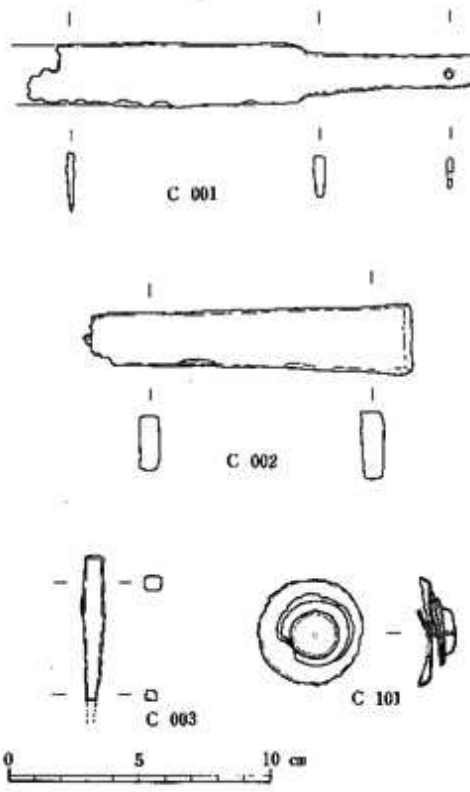
第26図　土　錘　実　測　図

3．金属製品　（第27・28図、図版20・21）

刀・板状鉄製品・鉄釘・飾金具・古銭の5種類計19点の金属製品が発見された。古銭の一部を除き遺構内からの出土である。

刀　（C 001）

16号溝より出土している。平棟平造りの小ぶりの直刀である。刀身前方部が欠損しており刀身長は不明であるが、現存長は17.7cmを計る。全体的に錆化が進み区部等が不明瞭になっているが、身幅は区の付近と刀身部で2.3cm、棟幅は区の付近で3mm、刀身部で2mmを計る。茎は長さ7.1cmを計り、棟幅は4mm、刃部側で2mmである。茎幅は区付近で1.7cm、茎尻付近で1



第27図　金属製品実測図

cmを計り、茎尻にかけて細くなっており丸みを帯びておさまる。茎尻付近に径3mm程の目釘孔が一孔みられる。

板状鉄製品　（C 002）

24号土壙より出土している。一方の端部が欠損しており全長は不明であるが、現存長は12.6cmを計る。断面は長方形を呈しており、現存端部から欠損部にかけてわずかに細くなっている。鍛造品である。

鉄釘　（C 003）

25号土壙より出土している。先端部が欠損しており現存長は5.6cmを計る。釘の頭は平坦で一辺6mm程の方形である。身尻にかけて細くなっている。

飾金具　（C 101）

29号土壙より出土している。円形の盤を重ね合わせ、その中央部に止め金の芯を通したものである。円盤の上部と下部のものには縁の部分を折りまげ厚みをもたせており、その間に二枚の円盤をはさみこんだ四枚重ねの全体的に丸みをもつものである。最大径は4.1cmを計り、上部にかけて径は小さくなり最上部では1.9cmである。高さは1.2cm程で地金の厚さは0.5～0.8

第7表　古　銭　一　覧　表

番号	古銭名	初鋳年			出土遺構	備考
1	淳化元宝	北宋	淳化元年	(990)	24号土壙	C－201
2	景徳元宝	北宋	景徳元年	(1004)	29号土壙	C－202
3	景徳元宝	北宋	景徳元年	(1004)	表　採	C－203
4	天聖元宝	北宋	天聖元年	(1023)	29号土壙	C－204
5	治平元宝	北宋	治平元年	(1068)	24号土壙	C－205
6	元豊通宝	北宋	元豊元年	(1078)	29号土壙	C－206
7	元豊通宝	北宋	元豊元年	(1078)	29号土壙	C－207
8	聖宋元宝	北宋	紹中興国元年	(1101)	ピット	C－208
9	政和通宝	北宋	政和元年	(1111)	29号土壙	C－209
10	不　明				24号土壙	C－210
11	永楽通宝	明	永楽六年	(1408)	1 a 溝	C－211
12	永楽通宝	明	永楽六年	(1408)	1 a 溝	C－212
13	永楽通宝	明	永楽六年	(1408)	2 号 溝	C　213
14	寛永通宝	日本	寛永年間	(1624～1644)	13号土壙	C－214
15	不　明				24号土壙	C－215

C 201

C 202

C 203

C 204

C 205

C 206

C 207

C 208

C 209

C 210

C 211

C 212

C 213

C 214

第28図　古　銭　拓　影

mmである。芯は一部欠損しており長さ等不明であるが、幅3mm、厚さ1mm程の板状のものである。重ね合わさるようにして二本みられ、円盤上部に接合している。地金には銅が使われており全体的に緑青の附着がいちぢるしいが、鍍金を施している部分が観察され金銅製であることがわかる。

古銭　（C 201 ～ 215）

15点出土している。錆の附着がいちぢるしく判読困難なものが多いが、日本銭1点・中国銭（北宋銭・明銭）12点が確認された。

4．石製品（第29図、図版24）

出土した石製品には石製模造品、砥石、石斧、石臼がある。

石製模造品は表土中より出土した有孔円板（D 001）が1点あり、大きさ2.5×1.4cm、厚さ3mm、小孔の大きさ2mmを計る。欠損しているが、単孔のものと考えられる。

砥石は6点出土したがすべて破片である。形状より長方形、短冊形、不整形に分けられる。D 101は29号土壙出土の短冊形のもので残存長10.2cm、最大幅4.9cmを計る。D 103も短冊形のもので37号土壙3層より出土した。残存長16.5cm、最大幅4.1cmを計り、4面ともよく磨かれている。火をうけ、うすい赤色を呈す。D 105は長方形のもので1b溝より出土した。残存長8.5cm、最大幅4.8cmを計る。その他図化されないが長方形のものが1b溝、不整形のものが表採されている。これらの砥石は他の遺構、遺物より中世から近世以降のものである。

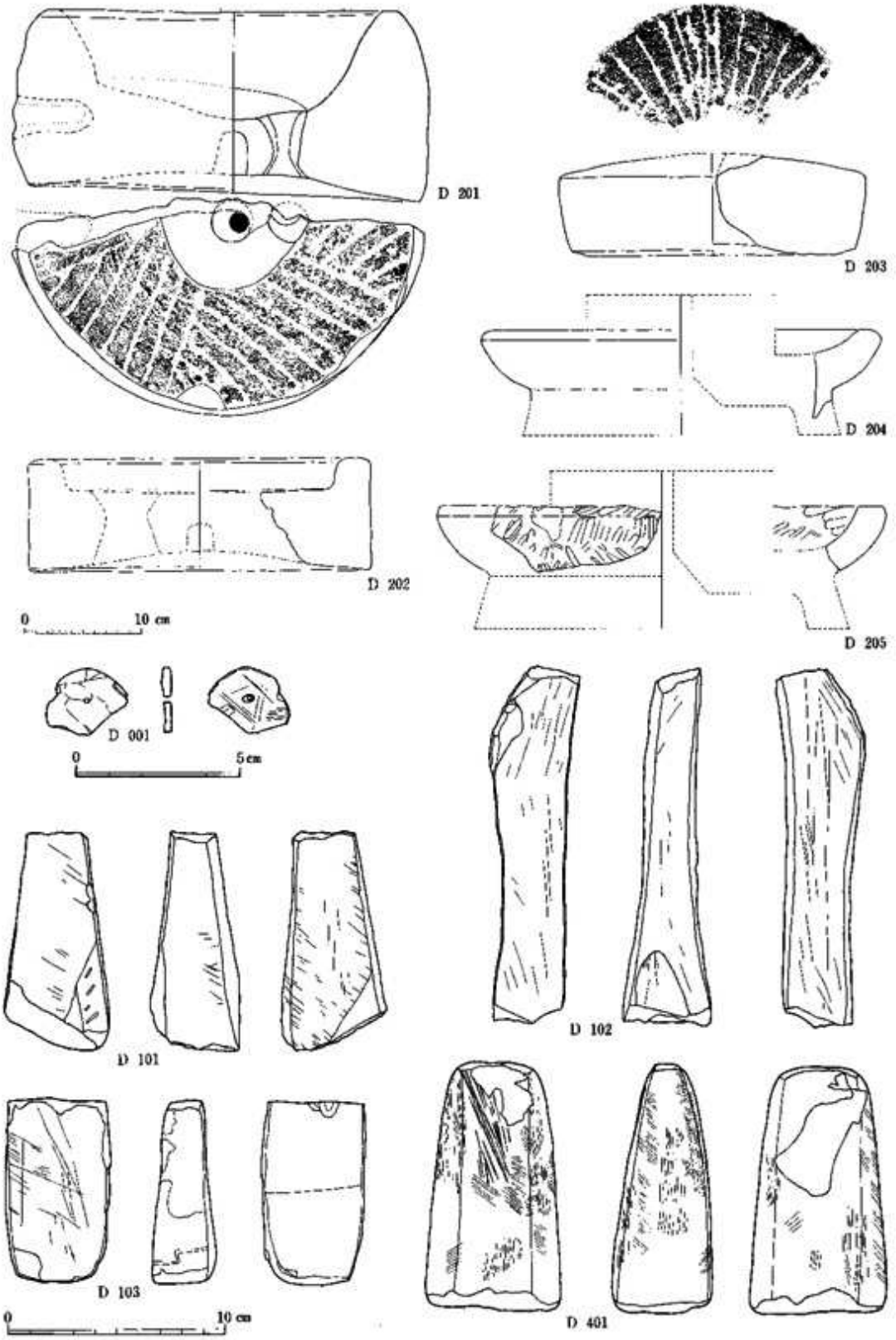
石斧は2号溝上面出土のD 301 1点があり、刃部は欠損しているが、蛤刃の磨製石斧と考えられる。残存長11.5cm、最大幅6.3cm、厚さ4.7cmを計る。

石臼は36号井戸跡、37号土壙、16号溝より5点出土した。いずれも完形のものはなく欠損している。D 201は36号井戸跡出土の安山岩製の上臼で高さ16.2cmを計る。目のパターンは5分画で、目の断面はU字形を呈し、副溝も6～9本と不規則である。芯棒受孔は幅3.1cmを計り、内部に錆が付着しているため鉄芯と考えられる。供給口は挽手の反対側に仕置し、上径4.5cm、下径4.0cmを計る。中間は狭くなっている。挽手は横に仕置し、側方挽手である。くぼみは18cmと深く、じょうご形を呈す。

D 203は37号土壙出土の安山岩製の下臼で残存高84cm、幅26cmを計る。目のパターンは放射状で間隔も不規則である。目の断面はU字形を呈す。

D 204と205は茶臼と考えられる破片であり、37号土壙と16号溝上面より出土した。204は最大径34cmを計る下臼で全体的焼けており、脆くなっている。周縁部は細かい凹凸があり、内面に横方向のノミ痕が残っている。205は最大径38.2cmを計る下臼で内外面に細いノミ痕が観察され、周縁部も放射状にノミ痕がある。

これらの石臼は他の遺物より中世から近世のものと考えられる。


D 201
D 203
D 204
D 202
0 10 cm
D 205
D 001
0 5cm
D 102
D 101
D 103
0 10 cm
D 401

第29図　石製品実測図

5．木製品　（第30～33図、図版22～24）

出土した木製品は大別すれば井戸枠材、下駄、漆器、曲物等の木器類、その他の木材片である。井戸枠材は2号井戸跡の方形井側組みの角材・板材と10号井戸跡の桶組みの板材がある。

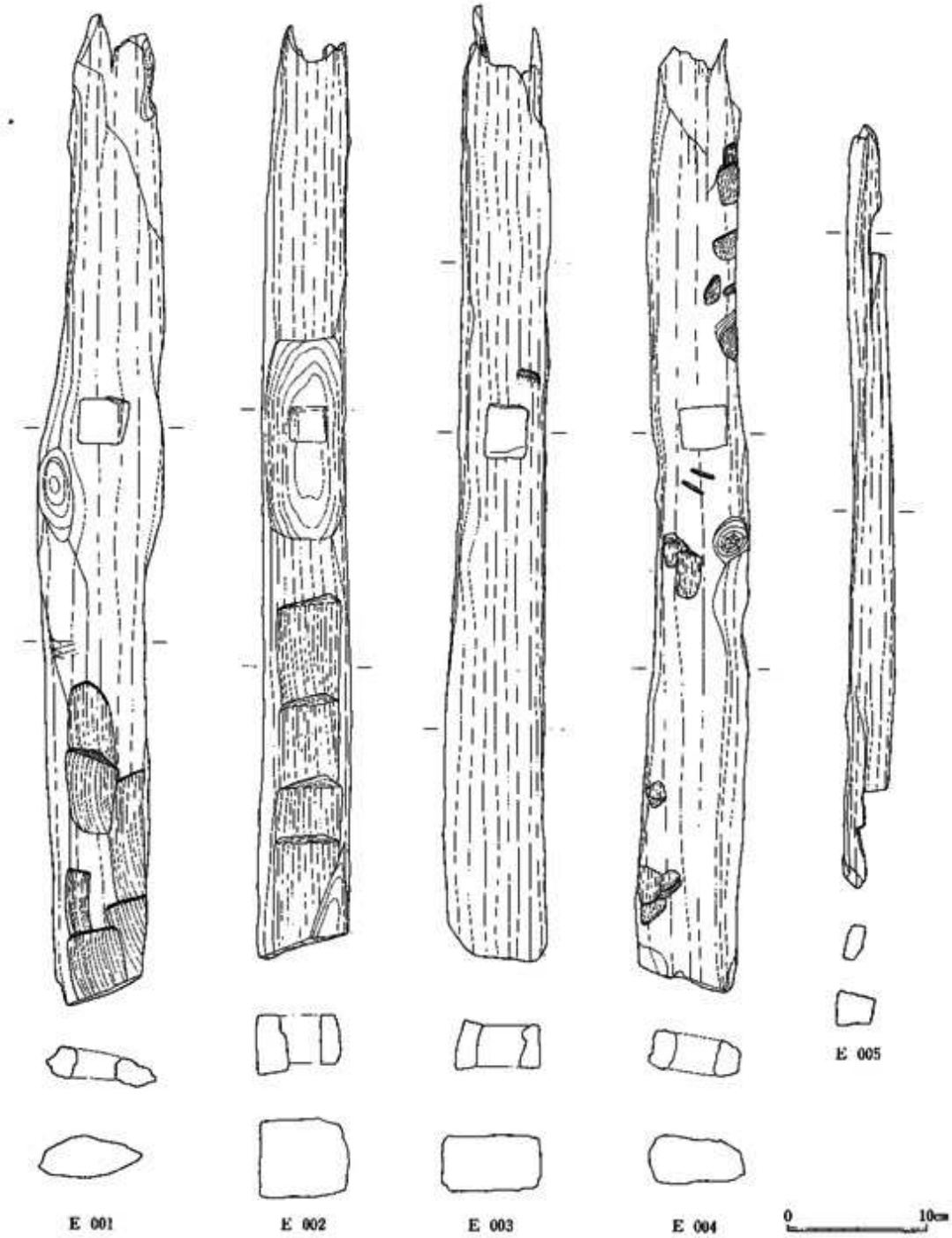
2号井戸の角材は井側の四隅に立てられていたものである。E001は南東隅柱で残存長143.5cm、4～6×15～16cmの不整扁平の材で、下端から81cmの部分に6.5×7cmの柄穴が切ってある。表面には幅8cmの手斧状工具による削り痕がみられる。E002は北西隅柱で残存長135cm、11×13cm角で下端から75cmの部分に5×5cm柄穴が切ってある。柄穴部分は角材両面が削られ厚さが7cmと薄くなっている。また、柄穴から下の部分では一面で幅9cm程の手斧状工具による削り痕がみられる。E003は北東隅柱で残存長138.5cm、12～14×8×9cm角で下端から、72.5cmの部分に6×7.5cmの柄穴が切ってある。E004　は南西隅柱で残存長138cm、5×14cm角のやや扁平な材で、下端から78cmの部分に6×6.5cmの柄穴が切ってある。表面の一部には幅3.5cm程の手斧状工具による削り痕がみられる。4本とも上部は朽ちはてて全長は不明である。下端はやや斜めに切ってあるが、先端を鋭利に削り、突きさした形跡は見られない。北側2本の隅柱は一辺が10cm内外の角材であるが、南側2本は角材というよりはむしろ厚い板材に近い。柄穴は大きさが様々であるが、ほぼ一辺が6cm内外で縦長に切ってある。

10号井戸跡の桶は17枚のやや湾曲した板材を4段の箍で組まれている。板材は長さ150～153cm、厚さ3cm、幅は9～22cmである。板の接合部には30cm間隔で、4本両先端を鋭利に削って差し込んだ木製竹製の合い釘が全ての合わせめにみられた。合い釘の長さは5～6cmである。

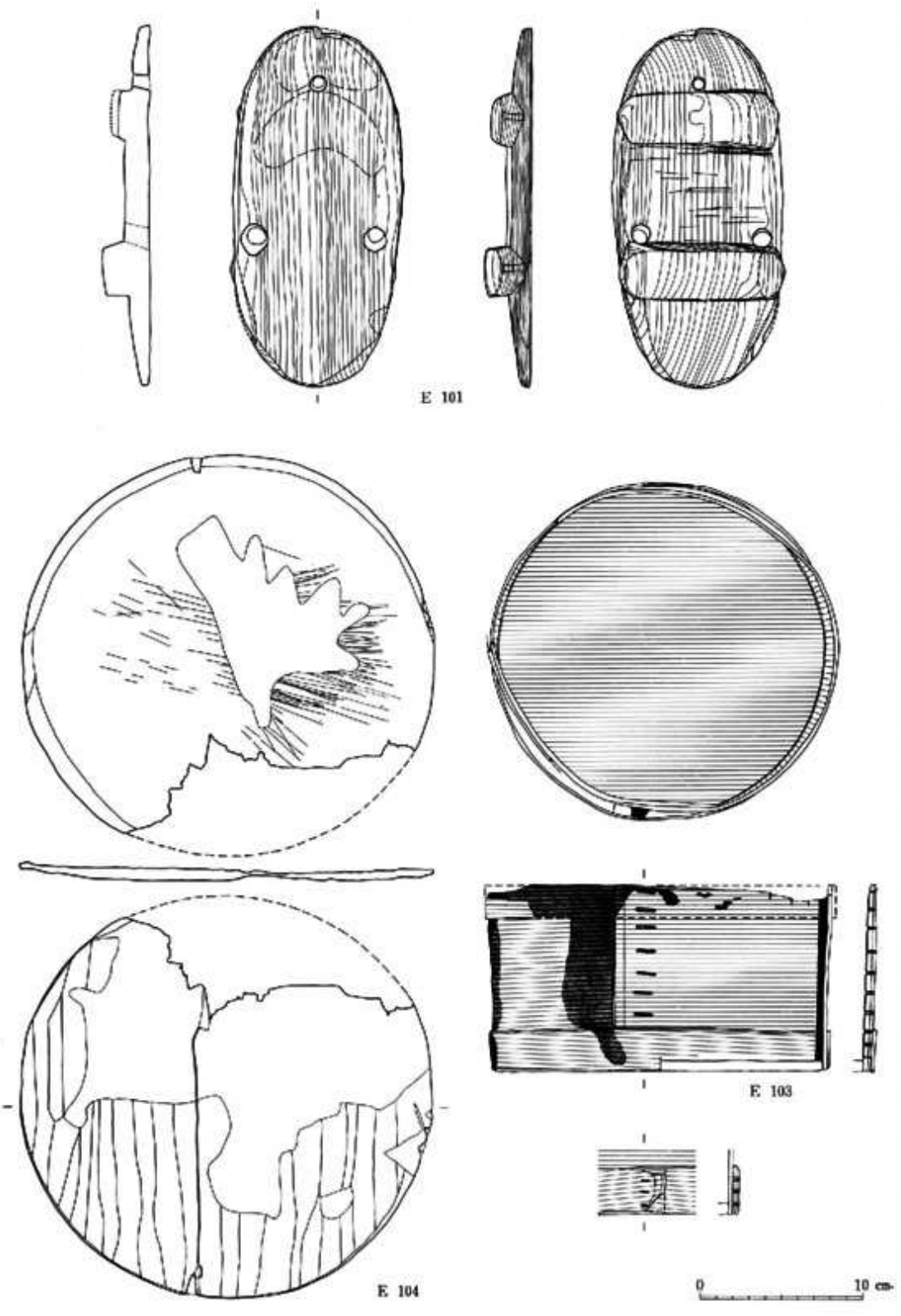
下駄E101は2号井戸掘り方底面より出土したもので、磨滅の状況からみて右足用のものと考えられる。形状は隋円形で、長さ22.3cm、中央幅10.4cmを計る。台木上面は平坦に削っているが、指および指つけ根部分は磨耗して1mm程凹んでいる。台木下面は前後のアゴ部を先端で薄くなるよう斜めに削っており、全体も周縁部は斜めに面取りしている。歯は連歯で台木より削り出しており、両横は台木よりわずかにはみ出しており各々二面の面取りをしている。また2枚の歯は前後をほぼ真直に切っているが、内側は中に向って斜めに切っており、前後にやや反り出したような形態である。歯幅は前歯は3.3cm（つけ根3.6cm）、後歯3.0cm（同3.5cm）、残存歯高は前1.3cm、後1.5cmを計る。鼻緒孔は全て上から穿孔され、前孔はほぼ垂直であるが、両後孔は後方から斜めにいずれもノミ状工具で穿孔されている。孔の位置はいづれも歯の前方に接してあり、前孔は下駄の長軸中心線上であり、後孔も中心線からほぼ等間位置にある。

漆器は合計11点出土した。E102は2号井戸井側内より出土した挽物漆器で、口径9.1cm、底径6.9cm、器高1.5cmの小皿で、底部の台は平坦で、高台削り出しはなく内外面とも漆塗りであるが底面には漆を塗っていない。体部外面には手持ちによるケズリの痕がみられる。

E 105 ～ 113 の 9 点はいづれも37号土壙から多量の焼米や炭化物と共に出土した内外面朱塗りの挽物漆器である。火熱を受けたこともあり、極めて脆く、木質部の腐蝕著しく漆膜だけが残存している部分もある。器形 3 種あり、小皿（E 105 ・ 107 ・ 110 ・ 111 ）4 枚、椀（E108



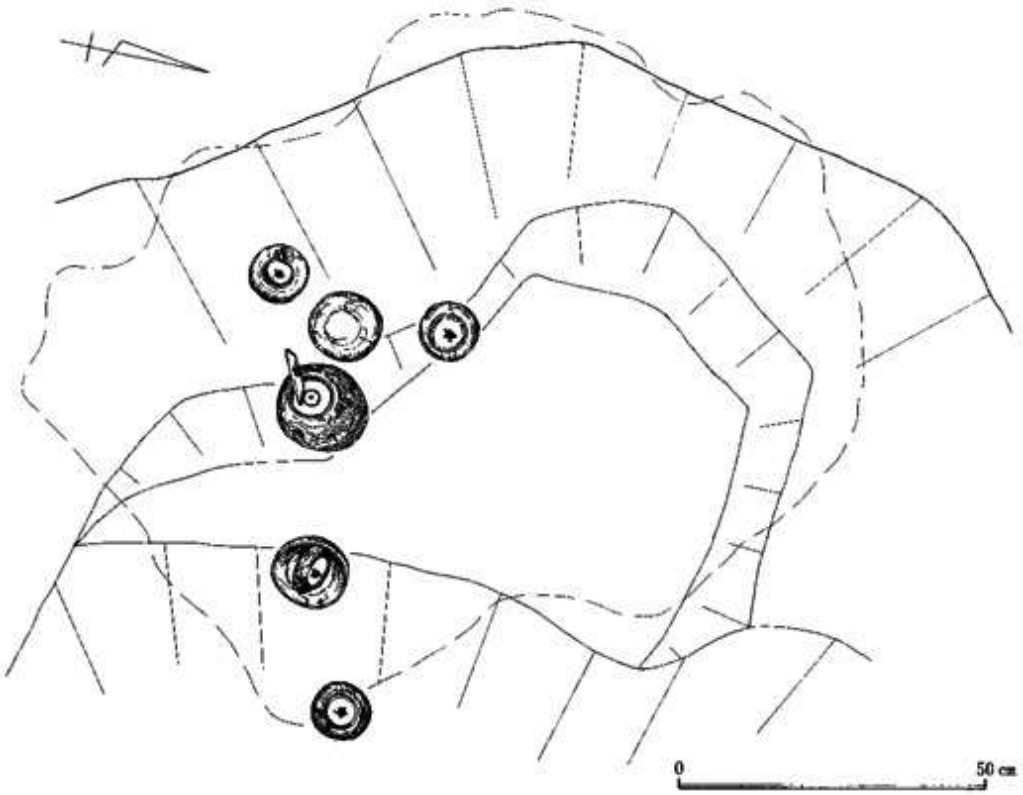
第30図　2 号井戸出土井戸枠材実測図



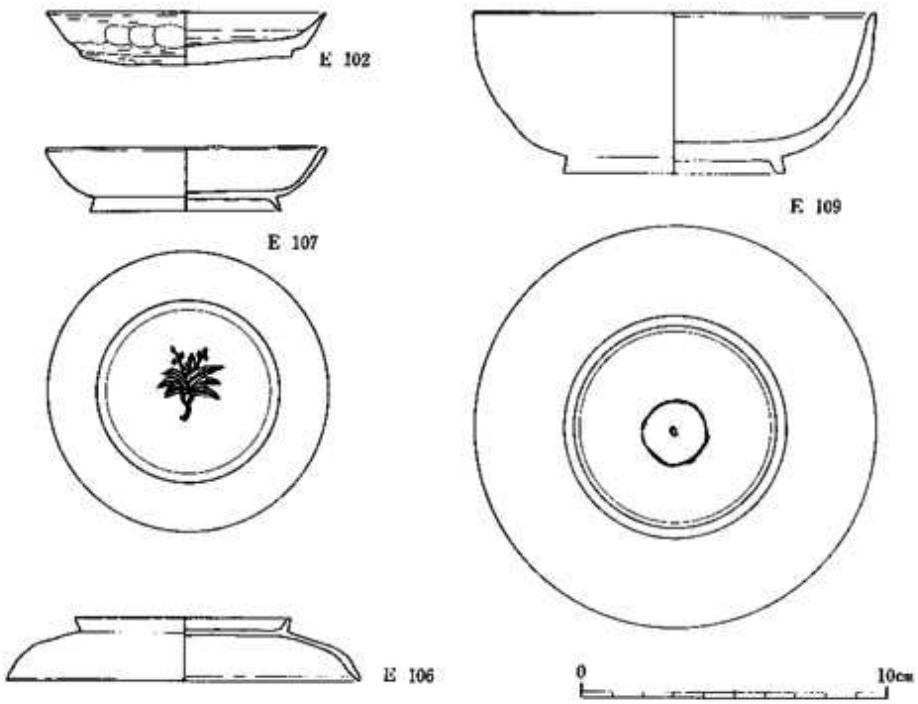
第31図　木製品実測図（下駄、曲物）

・109・112）3個、蓋（E106·113）2枚に分類されている。小皿（E 107）は口径9.2 cm、高台径6.2 cm、器高2.1 cm、高台高0.5 cmを計り、平坦な底面からゆるやかに屈曲してそのまま斜めに開きながら立ち上がり口唇部に至っている。高台は外側に開いている。内外面とも朱塗りで高台内面は黒地に朱で家紋様の草花文様が中央に描かれている。他の3枚も法量・塗り、文様は同様である。椀（E 109）は口径13.2cm、高台径7.3 cm、器高5.3 cm、高台高0.6 cmを計り、平坦な底面から、ゆるやかに湾曲して口縁部はほぼ垂直に立ち上がっている。高台はやや外側に開いている。内外面とも朱塗りで、高台内面は黒地に朱で⊙の文様が中央に描かれている。他の2個もほぼ同様である。蓋（E 106）は口径11.6cm、器高2.1 cm、リング状つまみの径7.0 cm、リング高0.5 cmを計り、平坦な上面からわずかに屈曲し、ゆるやかに湾曲して開きながら口唇部に至っている。リングは外側に開いている。内外面とも朱塗りで、リング内面は黒漆塗りである。E 113はリング内面が黒地に朱で小皿と同様の草花文様が中央に描かれている。

E 114は16号溝内より出土した挽物漆器の半欠品で、大形の椀とみられ、漆膜の遺存状態は不良だが、内外面とも漆塗りで、内面には黒地に朱の線描文様の一部がみられる。



第32図　37号土壙漆器出土状況平面図



第33図　漆　器　実　測　図

曲物（E 103）は27号井戸より出土したものである。1枚板を右回りに一巻きし、桜皮で綴じた後に上端と下端にさらに幅3.5㎝の板を重ねて巻き桜皮で綴じている。器高は11.5㎝、下端直径21㎝、内法直径は20㎝で、底板は直径20㎝、厚さ0.7㎝の柾目板である。側板は厚さ2～3㎝の柾目板で、内面には曲げのため、2～6㎜間隔で切り込み線が刻まれている。

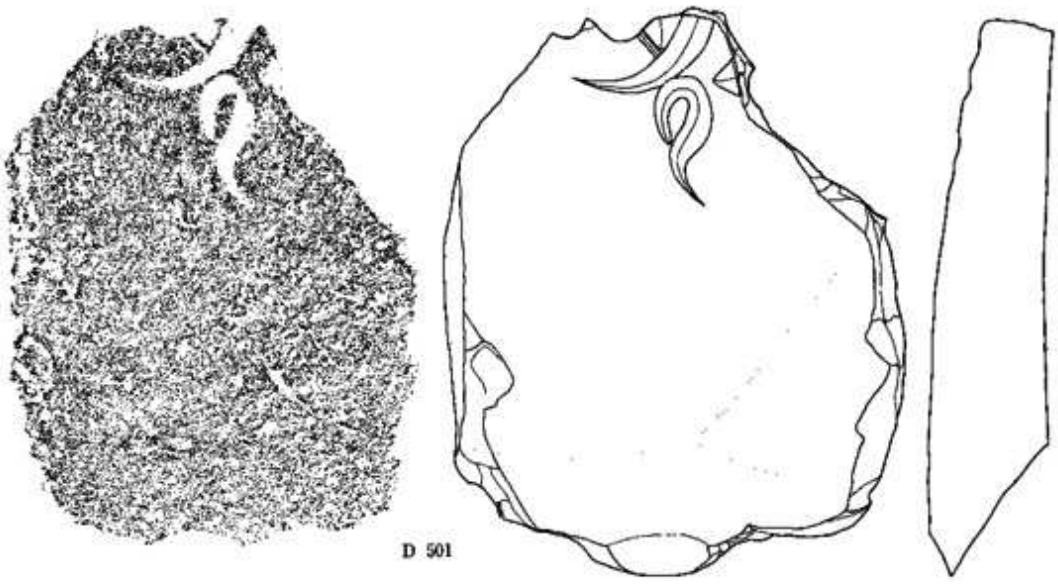
E 104は20号井戸より出土したもので、曲物の底板と考えられる円形の板材で、1枚板ではなく、2枚の板を桜皮で連接してある。直径23.3㎝、厚さは中央で0.9㎝、周縁で3～5㎜である。周縁は一方の面が面取り状にやや削られている。片面はほぼ平坦にていねいな成形をしており、鋭利な刃物による切痕が見られ、もう一方の面は幅0.5～1.5㎝の一方向の削りの痕跡が見られる。

その他に、丸太材片などが井戸内より多数出土している。

6．板　碑　（第34図、図版24）

1b号溝上部より出土した安山岩製の板碑で、縦59㎝、横46㎝、最大厚12㎝を計る。上端部と右側辺上部は欠損している。正面は中央がやや膨んだ平面に仕上げられている。右側面は自然面のままであり、左側面は中央部を平坦に仕上げ、裏面は3平面からなり下部に頂点をもつ。底面は中央が張出して尖っている。

種子は薬研彫りであり、上部を欠損しているが、「𑖀」（バク＝釈迦如来）と判読できる。願文年号は刻まれていない。



第34図　板　碑　実　測　図

Ⅵ．考察とまとめ

遺跡の範囲

今泉城跡は沖積平野の低湿地に構築された館跡で、文献上より見ると、「仙台領古城書上」には東西36間、南北45間とあり、城主は須田玄藩とある。「仙台領古城書立之覚」には西に堀形あり、四重の土手ありと書かれている。

また「仙台領内古城・館」によると平坦な耕地の中に構えられた東西150 m、南北80mほどの完全なる平城形式のものであり、本丸と見られる熊野神社跡を中心として一昔前までは東側と北側に大きな水濠が交叉していたという。

これらのことから今泉城は沖積平野に構えられ、周囲を土塁と水濠でめぐらされている平城形式の館跡であった。

今回の調査区はほぼ中心に近い部分であり、北端で検出された1a溝は周囲の地形より見て幅約17mであり、内堀（内濠）と考えられる。これより北側、祐善寺の東側に位置する部分も低くなっており、外堀（外濠）と考えられる。

さて、今泉城の範囲について述べると、祐善寺を北西隅とし、これより東側に走る外堀を北辺と考えられ、西辺は現在宅地化が進み不明であるが南北に走る道路付近、東南隅がバス停久保山東付近を結ぶ東西約200 m、南北約200 mの範囲の中と推定される。

遺跡の構成

今回の調査で検出された遺構は掘立柱建物跡24棟、竪穴遺構１基、井戸跡18基、土壙35基、溝跡25条、柱穴を含めたピット1200個である。

建物跡は全て掘立柱の建物である。平安時代に位置づけられる建物跡は１・２号の２棟であり、他の建物跡と比較すると掘り方は50～80cmの隅丸方形ないし不整方形で、柱の間隔も等間隔で整然としている。１号は２間×４間の規模で中抜きの建物跡である。２号は１本柱列で１号建物跡の東側に並列して検出され、１号に付随する塀のような施設と考えられる。

３号から24号の建物跡は２間×２間、２間×３間の規模のものが多く、掘り方も20～50cmの円形ないし不整方形で、柱の間隔も不規則なものが多い。これらの建物跡は調査区の南側と北側に集中しており、前者の建物の柱列が磁北にほぼ一致し、後者は真北にほぼ一致している。南側と北側では建物の方向がやや異っている。重複関係より見てこれらの建物跡は中世から近世の中に位置づけられ、５回以上の建て替えが行なわれていたものと考えられる。

竪穴遺構は１基のみ検出され、一辺3.3ｍの方形プランを呈する。住居跡の可能性をもつが柱穴、カマドまたは炉等の施設は検出されなかった。遺物は土師器片だけであり、ロクロ使用のものはなく、折り返し口縁を有するものが出土しており古墳時代の遺構と考えられる。

井戸跡は18基検出され、その形態的特徴より六つのタイプに分類された。Ａ・Ｂタイプは井戸内部に方形及び円形の施設を有するもので他は全て素掘りのものである。

Ａタイプは２号井戸跡１基で楕円形の掘り方内に方形の井側を組んだもので、出土遺物は土師器・須恵器片、漆器小皿、下駄などがあり、中世以降の遺物を含んでいないことから古代の井戸と考えられる。このような井戸跡は形態がやゝ異なるが多賀城跡五万崎地区にも見られる。

Ｂタイプは10号井戸跡１基で円形の掘り方内に円形の桶組を有するものである。重複関係より一番新しい時期に属し、出土遺物も近世の陶磁器片があり、近世末から明治期の井戸と考えられる。

Ｃ～Ｆタイプの井戸は重複関係、出土遺物より中世から近世の井戸であり、今回検出された井戸の大部分がこの中に入る。

土壙は35基と多く検出された。

弥生時代の土壙は23号土壙１基で平面形は不整円形または不整楕円形を呈している。出土遺物は弥生土器だけで小形壺、大型甕片、大形甕片等があり、その時期は樽形囲式に位置づけられる。

古墳時代の土壙19号・43号・51号・52号土壙の４基であり、出土遺物より、塩釜式に相当する19号・43号土壙と南小泉式に相当する51号・52号土壙がある。前者は長方形プラン、後者は楕円形または長楕円形プランを呈する。

中世から近世にかけての土壙は形態的特徴より６つのタイプに分類された。Ａタイプは一辺５ｍ前後の隅丸方形と考えられるもので24号・29号土壙がある。深さは１ｍ弱で堆積土は炭化物灰層が多い。出土遺物は中世陶器、北宋銭等があり、中世に位置づけられる。この土壙は土倉と考えられるが入口等の施設は検出されなかった。またＣタイプの37号土壙中より焼米と共に９個体の漆器（椀・小皿・蓋）が出土したことは注目される。

溝跡は25条検出され、３つのタイプに分類された。Ａタイプの1a・２号・16号・22号溝は幅２ｍを超える大溝で調査区の北端と南端に検出された。北端の溝は1a、２号溝、南端は16号・22号溝で共に平行に走り、それぞれ溝の間にはセクションより土塁状の高まりがあったことがうかがわれる。これらの溝は出土遺物より中世から近世の溝である。1a溝は全体を調査できなかったが地形的に見ると地表面が凹地となり、その幅は約17cmと考えられ、溝というよりは堀跡と考えられる。1b溝は出土遺物より近世以降の溝であり、Ｂ・Ｃタイプの溝は古代から中世にかけての溝である。

以上のことから今泉城跡を構成する遺構は弥生時代から平安時代の遺構を除き、大きな溝（堀）によって区画された中に掘立柱建物跡群、井戸跡・土壙等より構成されている。遺物より今泉城の年代は中世から近世にかけて使用されたものと考えられる。

尚、今回の調査は今泉城跡の一部分であるため今泉城の規模、築城年代、遺構の配置、内堀外堀の範囲等については今後の調査をまちたい。

まとめ

今回の調査によって以下のことが明らかになった。

１．この遺跡は弥生時代中期から中・近世にまで及ぶ複合遺跡である。

２．調査区より検出された遺構は掘立柱建物跡24棟、竪穴遺構１基、井戸跡18基、土壙35基、溝跡25条、柱穴を含むピット1200個と多くを数えた。

３．今泉城跡は沖積平野に構築された平城形式の館跡であり、その使用年代は出土遺物より中世から近世の中に位置づけられる。

４．今泉城跡の構成は大きな溝（堀）によって区画され、中に掘立柱建物群、井戸跡、土壙によって構成されている。

５．井戸跡、土壙、溝中より漆器、下駄、曲物等の木製品が多量に出土した。

最後に本報告書作成にあたり東北歴史資料館藤沼邦彦氏より御教授をうけ、さらに37号土壙出土の漆器の取り上げについては東北歴史資料館研究科長村山城大氏、同技師岡村道大氏の御協力を賜わり、書して御礼を述べる。

参考文献

紫桃正隆　「仙台領内古城・館」第4巻　宝文堂　1974

藤沼邦彦　「宮城県地方の中世陶器窯跡（予察）」　東北歴史資料館研究紀要第2巻　1976

〃　「宮城県山土の中世陶器について」　東北歴史資料館研究紀要第3巻　1977

東北歴史資料館　「伊豆沼古窯・熊狩A窯跡発掘調査報告」　東北歴史資料館資料集1　1979

三輪茂雄　「石臼の謎」　産業技術センター　1975

草戸千軒町遺跡調査研究所　「草戸千軒」No.35　1976・5

〃　「草戸千軒」No.54　1977・12

〃　「草戸千軒町遺跡」　第4回開所記念展レジメ　1977

宮城県教育委員会、宮城県多賀城跡調査研究所　「多賀城跡――昭和51年度発掘調査概報――」　1977・3

秋田市教育委員会、秋田市遺跡保存会　「下夕野遺跡」　1979・11

多賀城市教育委員会　「水入遺跡」現地説明会資料　1979・11

鈴木公雄　「安行系粗製土器における文様施文の順位と工程数」　信濃21－4　1969

須藤　隆　「土器組成論」　考古学研究第19巻第4号　1973

宮城県教育委員会　「宮城県文化財発掘調査略報－安久東遺跡」　宮城県文化財調査報告書第53集　1978

仙台市教育委員会　「六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし」　仙台市文化財調査報告書第16集　1979

市立函館博物館　「函館志海苔古銭」　1973

図版 I

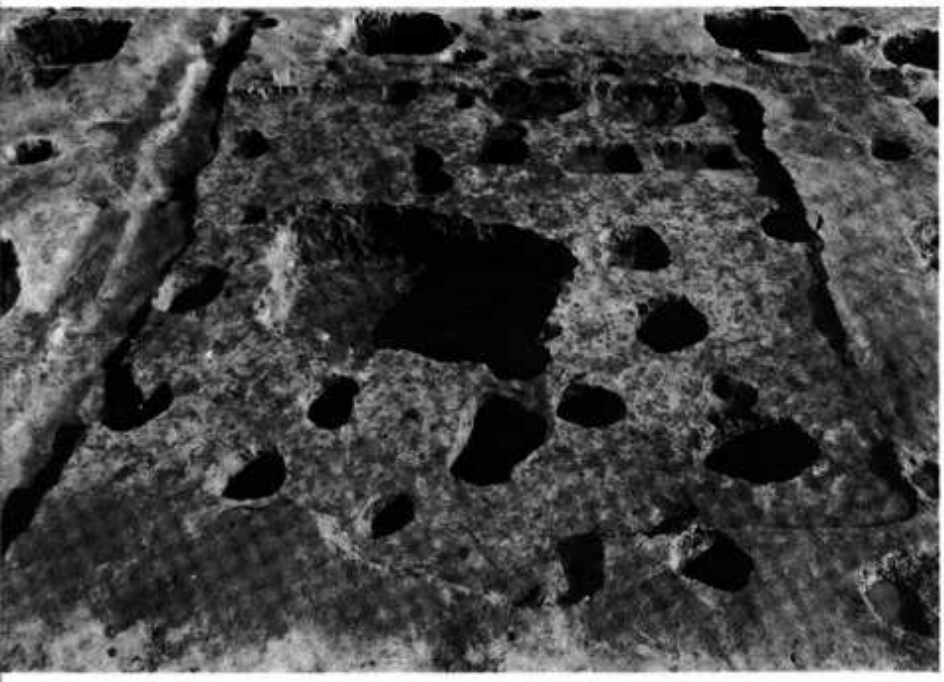
1．遺構確認状況（南より）

2．調査区全景（南より）

3．調査区全景（北より）

図版 2

1．掘立柱建物跡全景
（西より）



2．1号竪穴遺構全景
（西より）

3．2号井戸跡全景
（南より）

図版３

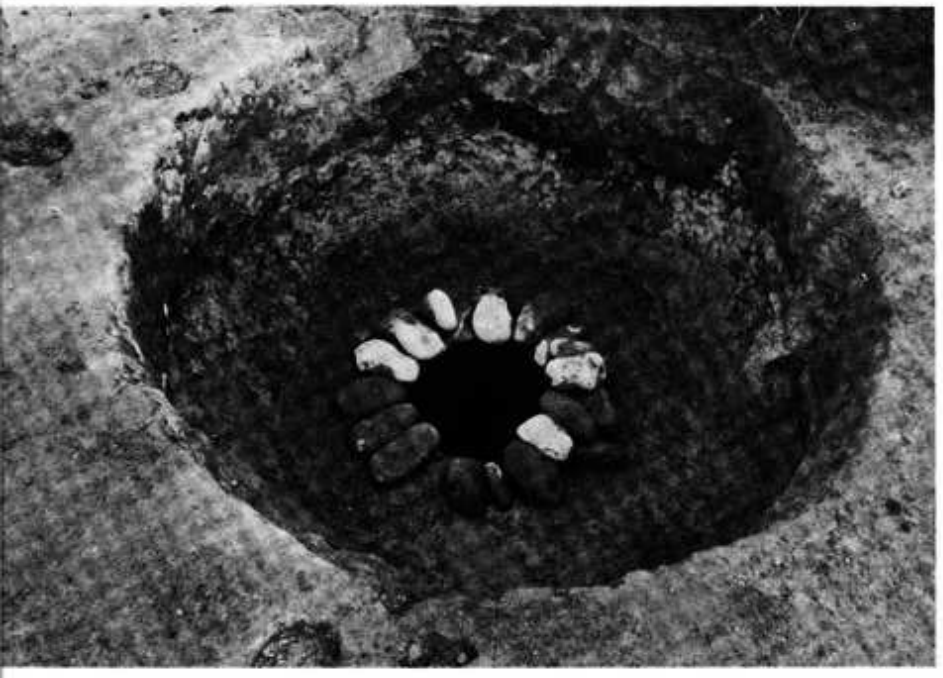
１．２号井戸跡全景
（東より）

２．２号井戸跡セクション
（東より）

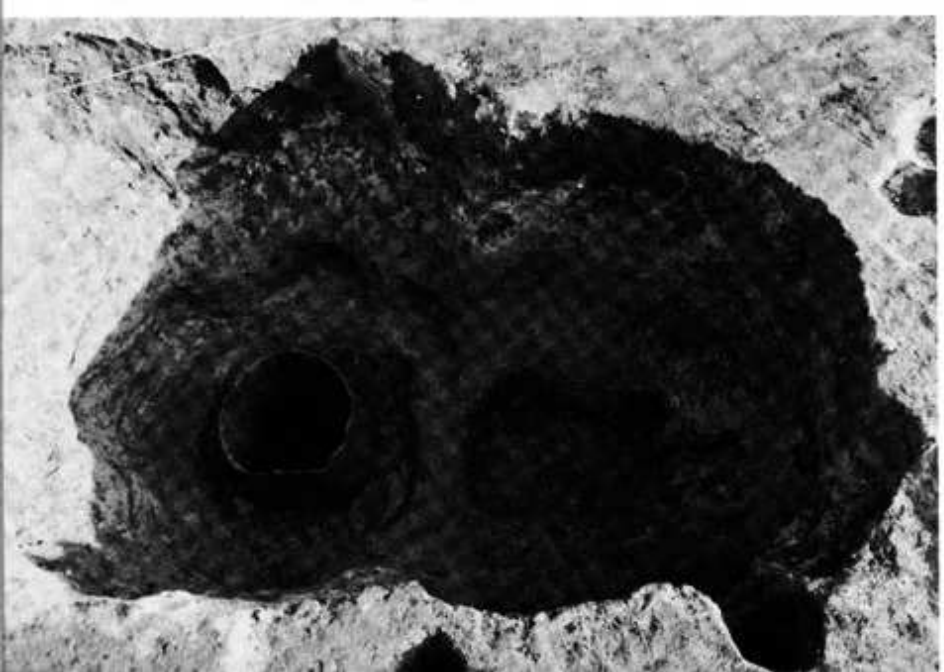
３．５号井戸跡全景
（南より）

図版4

1．8号井戸跡全景
（西より）



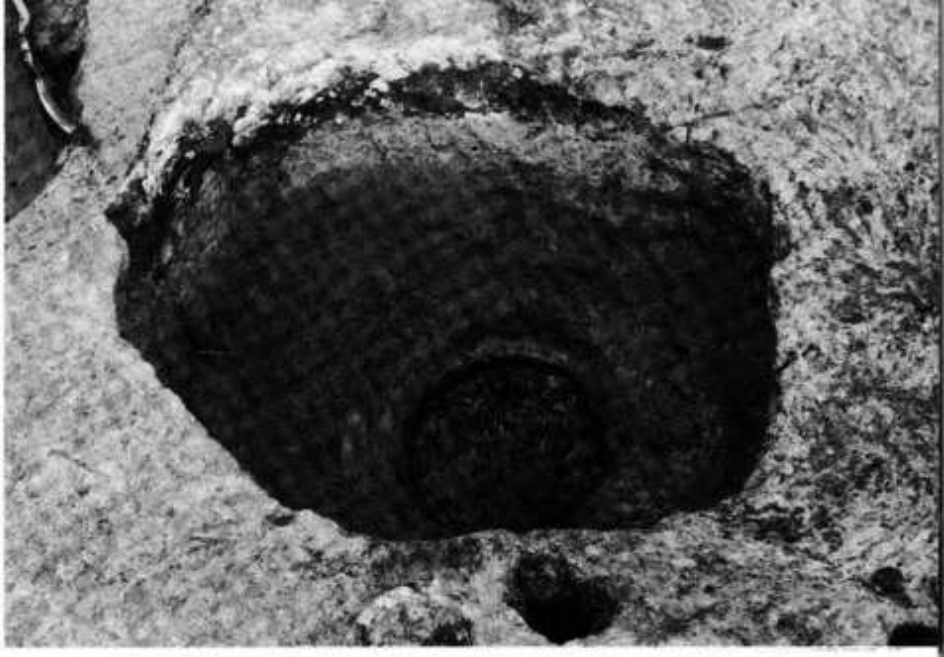
2．10号井戸跡全景
（西より）



3．10号・38号井戸跡全景
（西より）

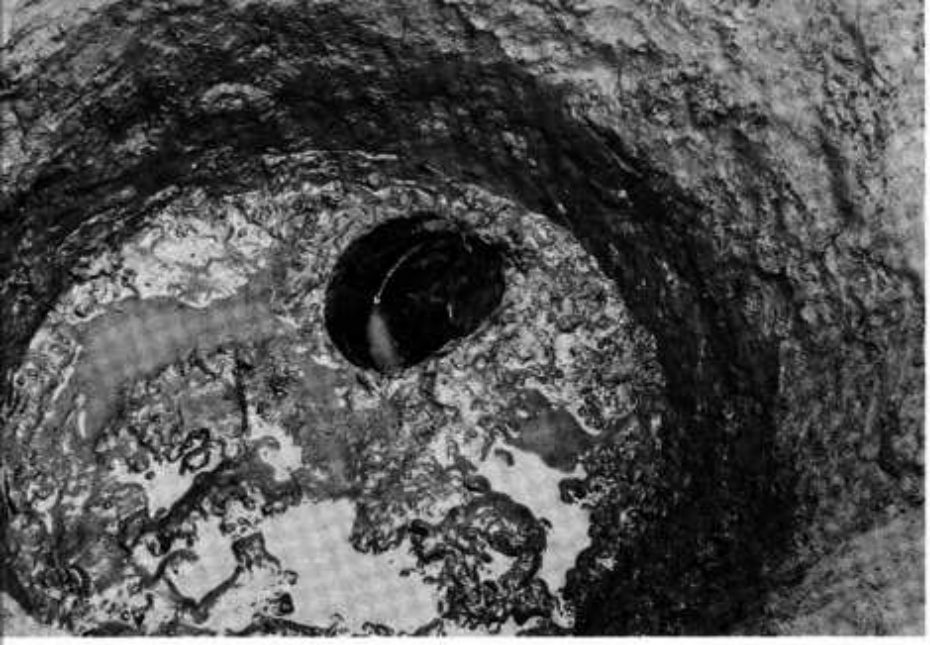
図版 5

1．26号井戸跡全景
（南より）



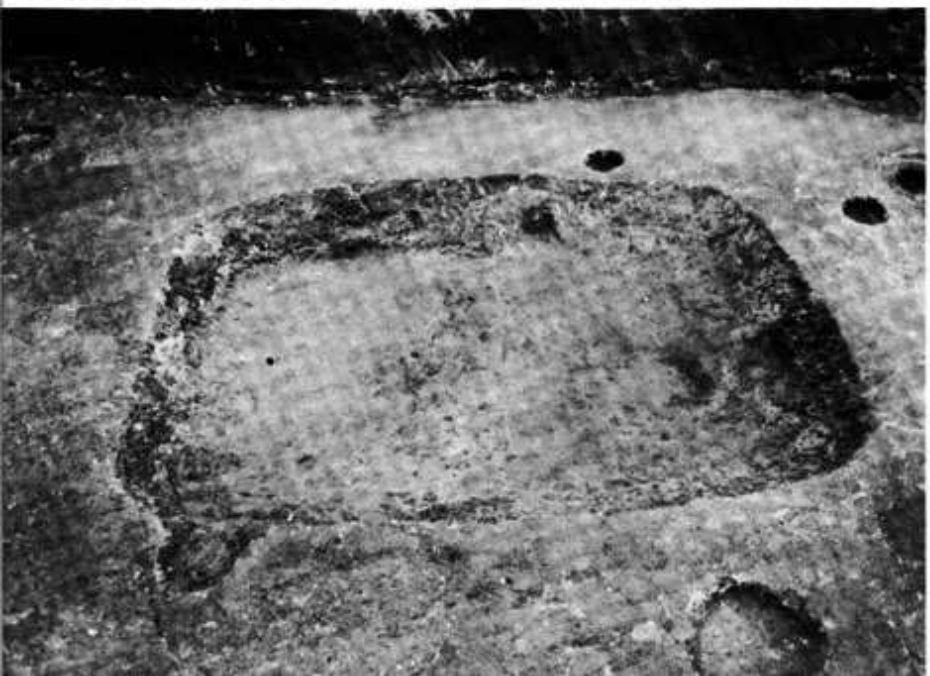
2．36号井戸跡全景

3．50号井戸跡全景



1．27号井戸跡出土遺物（曲物）

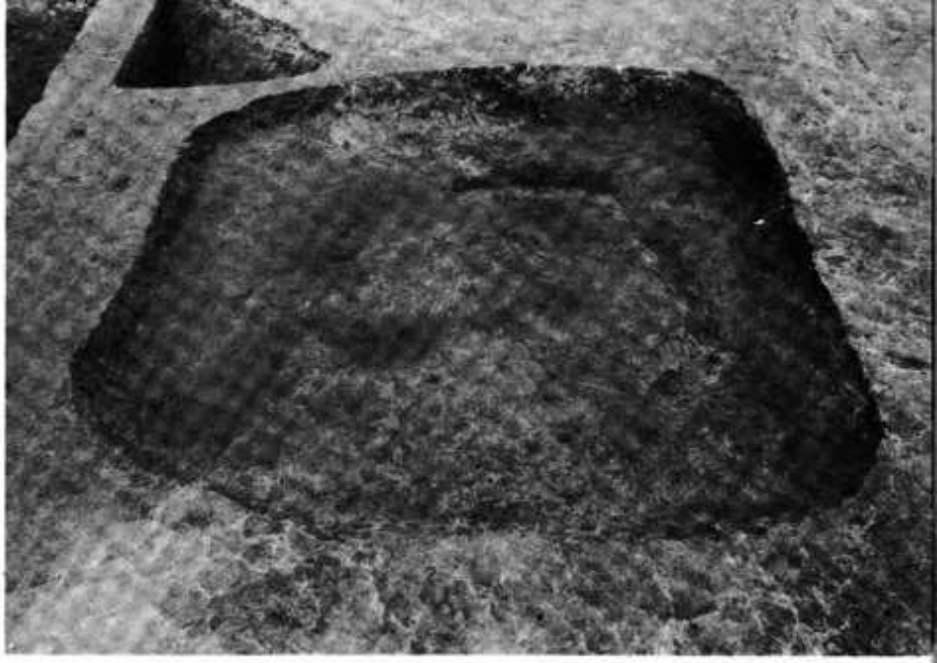
2．6号・7号土壙全景（東より）



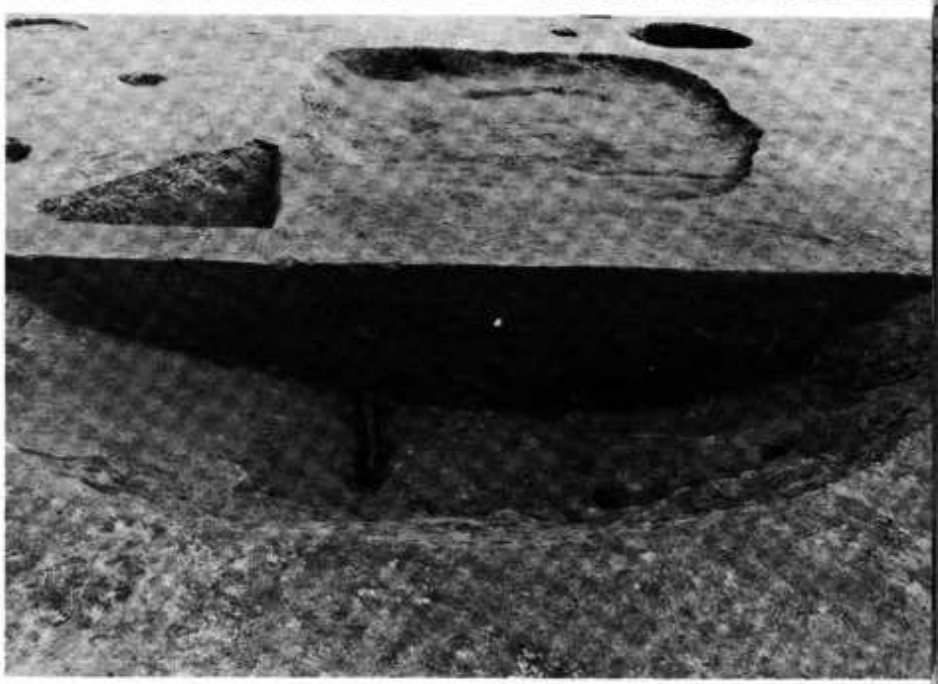
3．11号土壙全景（西より）

図版 7

1．12号土壙全景
（西より）



2．13号土壙セクション
（西より）



3．19号土壙遺物出土状況
（東より）

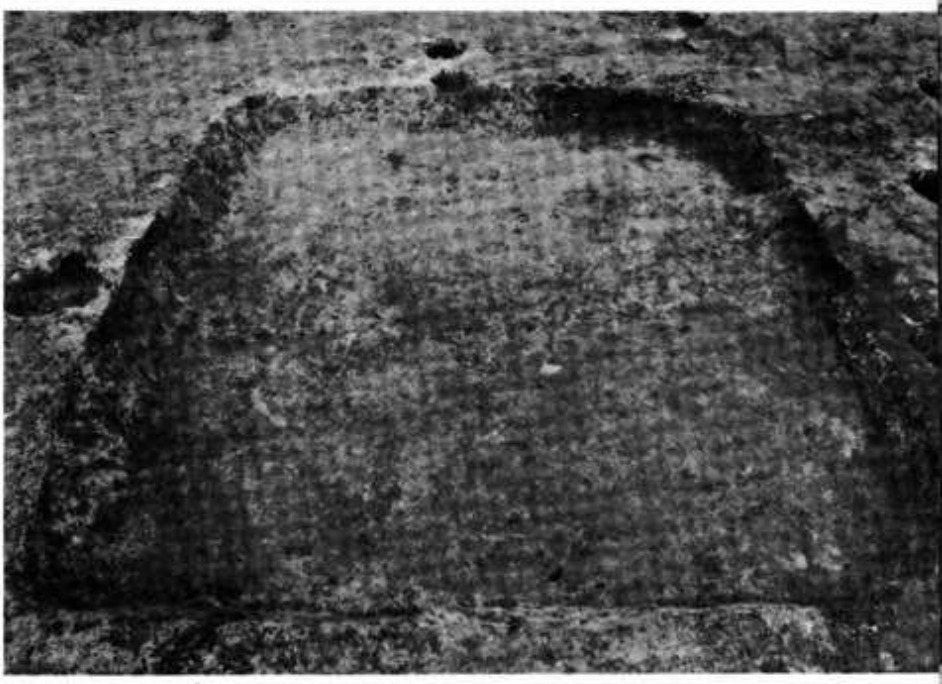
1．19号土壙全景
（東より）

2．23号土壙全景
（西より）

3．23号土壙遺物出土
状況（東より）

図版 9

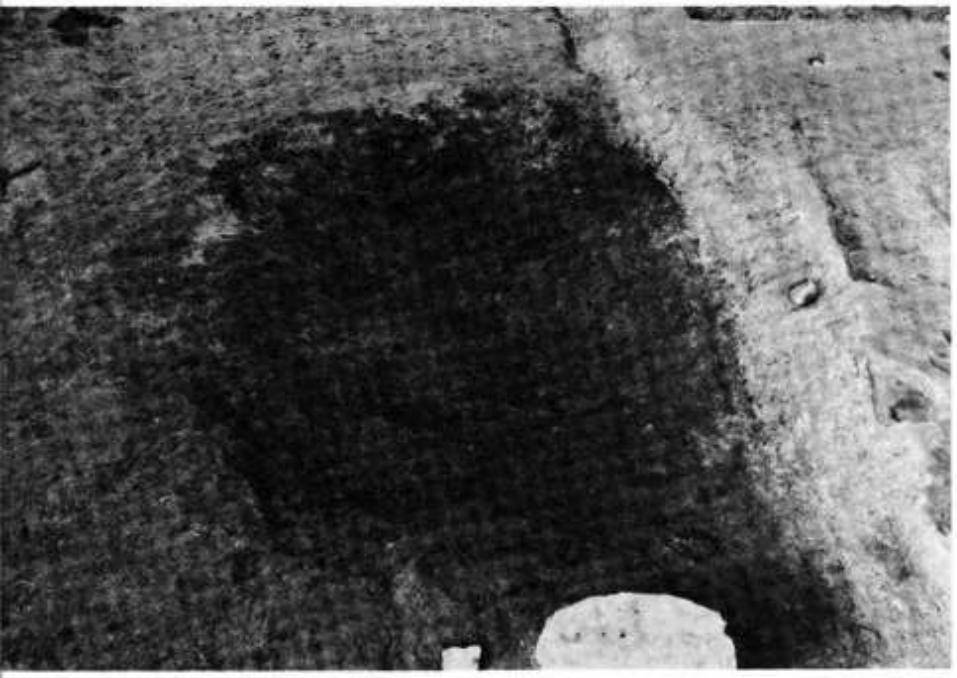
1．24号土壙全景
（南より）



2．25号土壙全景
（南より）

3．24号・29号土壙全景
（南より）

1．31号土壙全景
（西より）

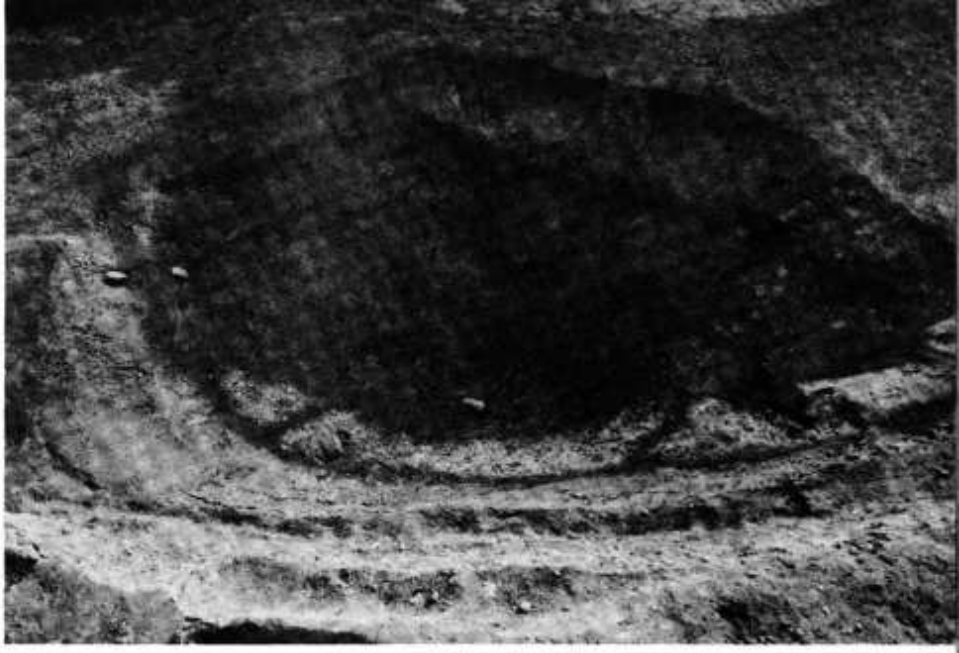


2．37号土壙全景
（東より）

3．37号土壙漆器出土
状況（北より）

図版11

1．37号土壙全景（北より）



2．43号土壙全景（南より）

3．51号土壙全景（北より）

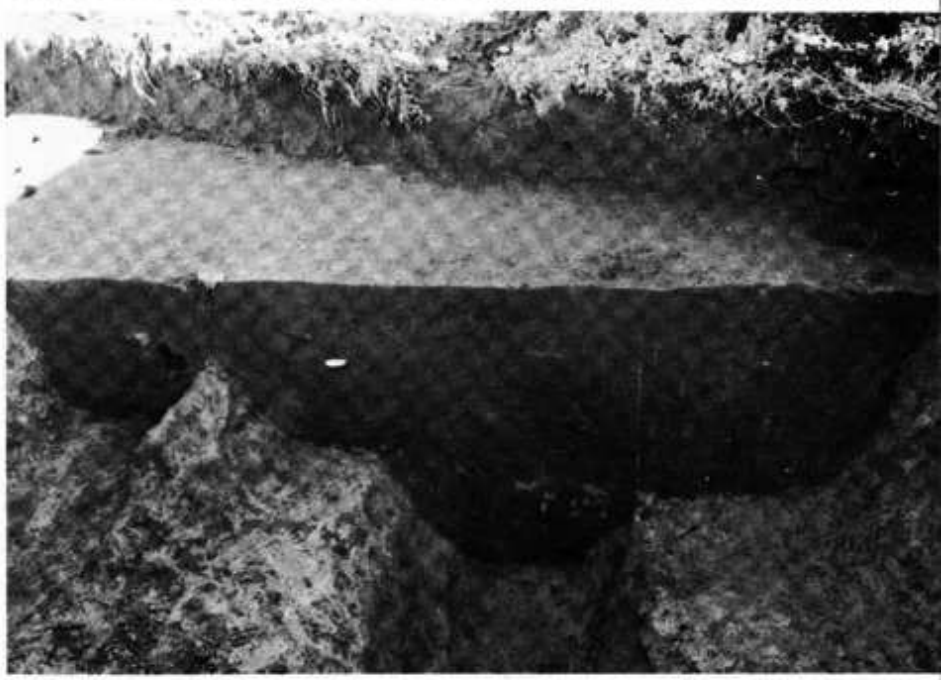
1．52号土壙全景
（南より）

2．53号土壙全景
（西より）

3．54号土壙全景
（東より）

図版13

1．2号溝セクション
（北より）



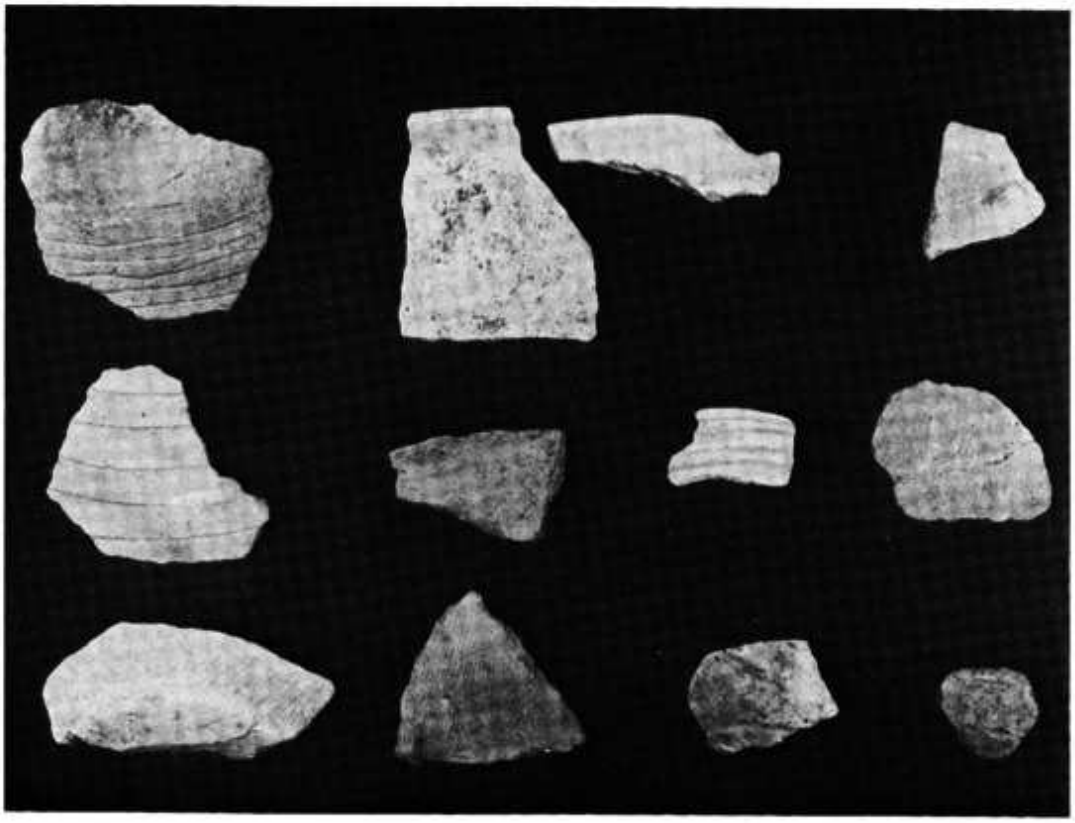
2．16号溝セクション
（西より）

3．16号溝西端全景
（北より）

図版14 弥 生 土 器

2（A000）

1（A006）



図版15　土　師　器

1

2

3

4

5

7

6

1－A 101　2－A 102
3－A 104　4－A 103
5－A 106　7－A 117
6－A 110

図版16 土　師　器

1

2

3

4

5

6

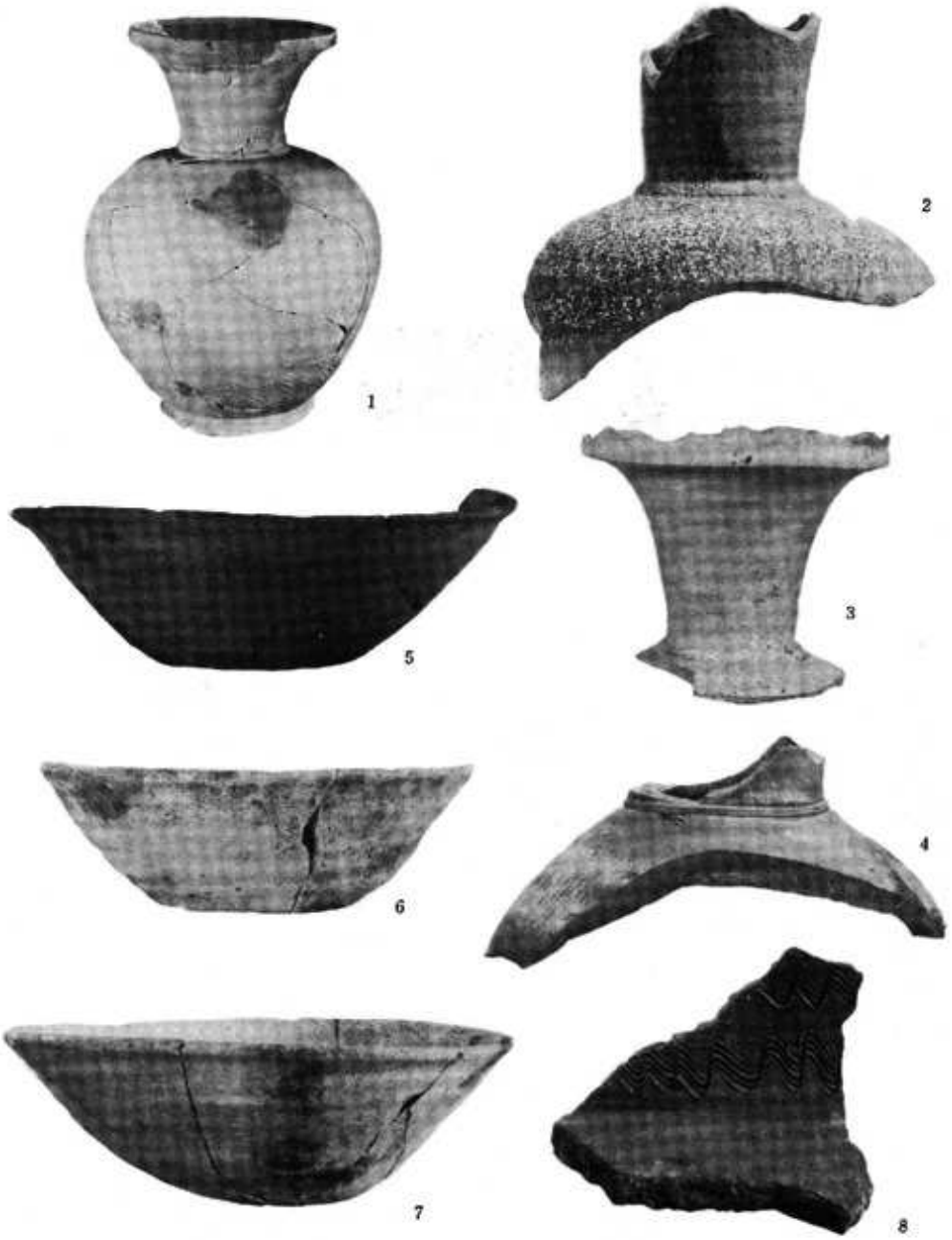
7

8

9

1－A108 竈　右　　5－A204　坏
2－A113　　6－A201　坏
3－A207　竈　　7－A203　坏
4－A120 小形土器　　8－A306　坏
9－A202　坏

図版17 須　恵　器



1－A301　3－A304　5－A307　7－A308
2－A303　4－A305　6－A309　8－A311

図版18 中 世 陶 器

1

2

3

4

5

6

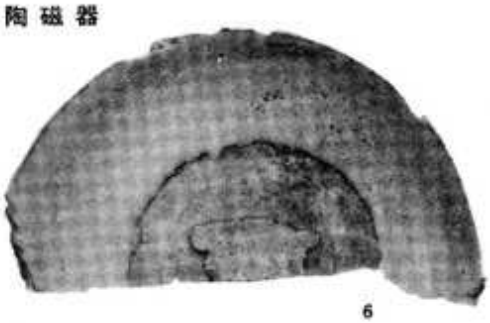
7

8

1－A401　　2－A404
3－A402　　4－A403
5－A416、6－A410　7－A405
8－A415

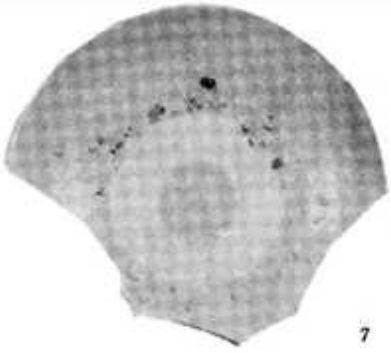
図版19　近世陶磁器

1



6

2



7

3

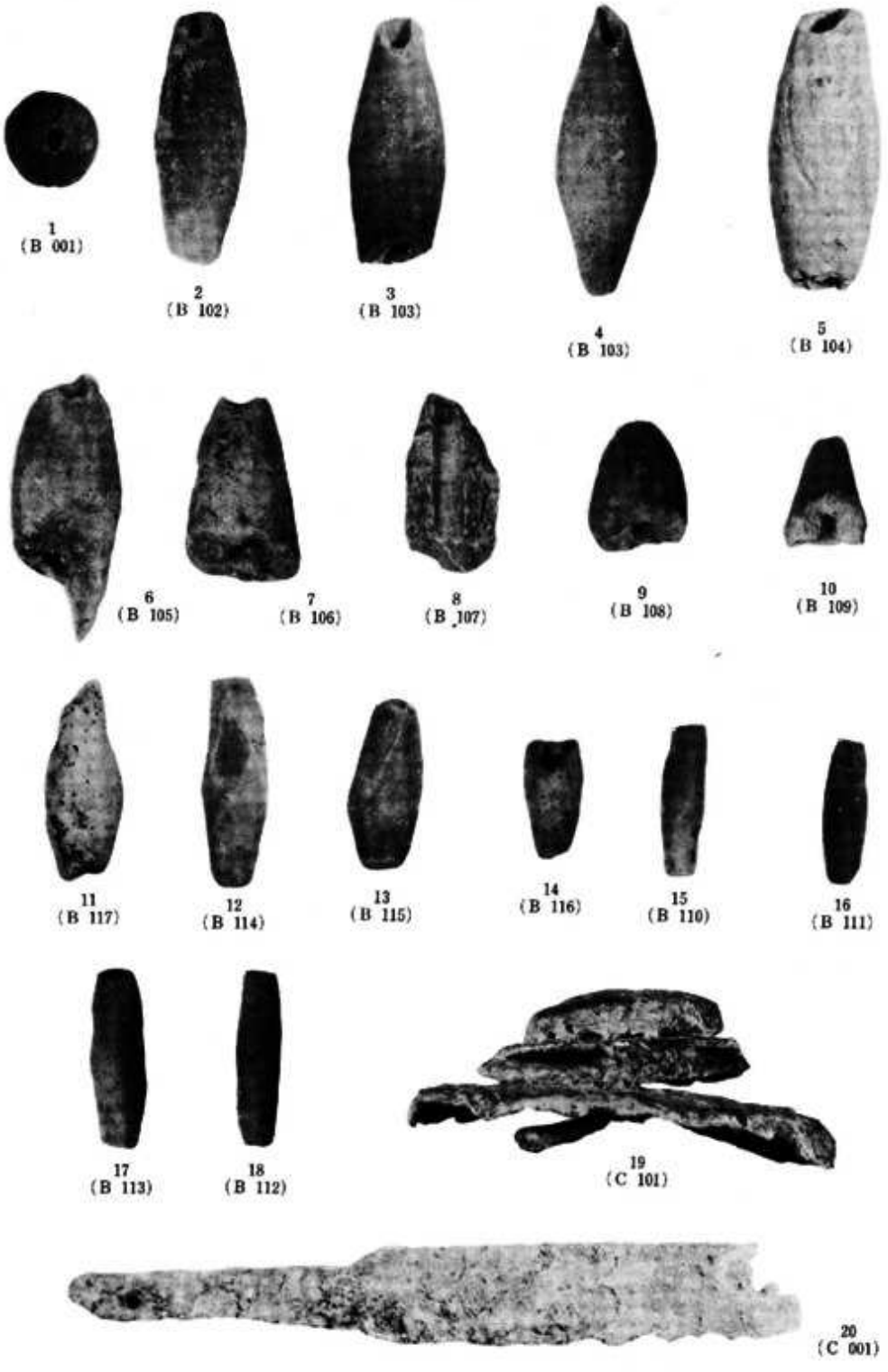
8

4

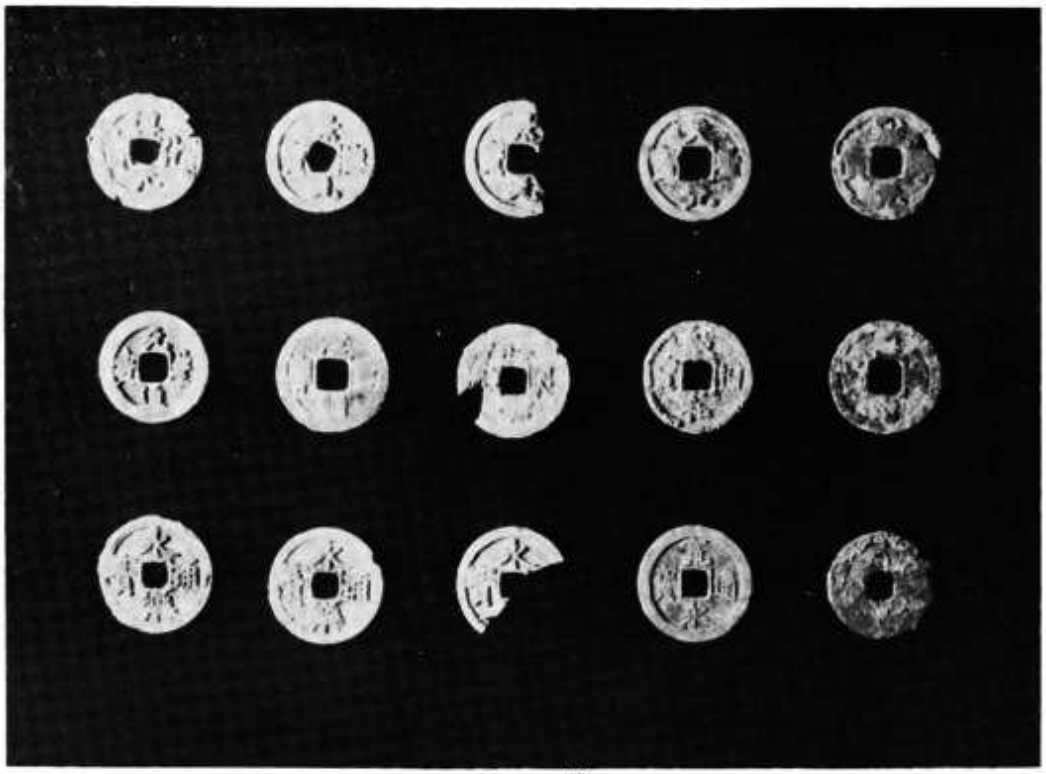
5

1－A 601　6－A 610
2－A 622　7－A 609
3－A 614　8－A 612
4－A 615

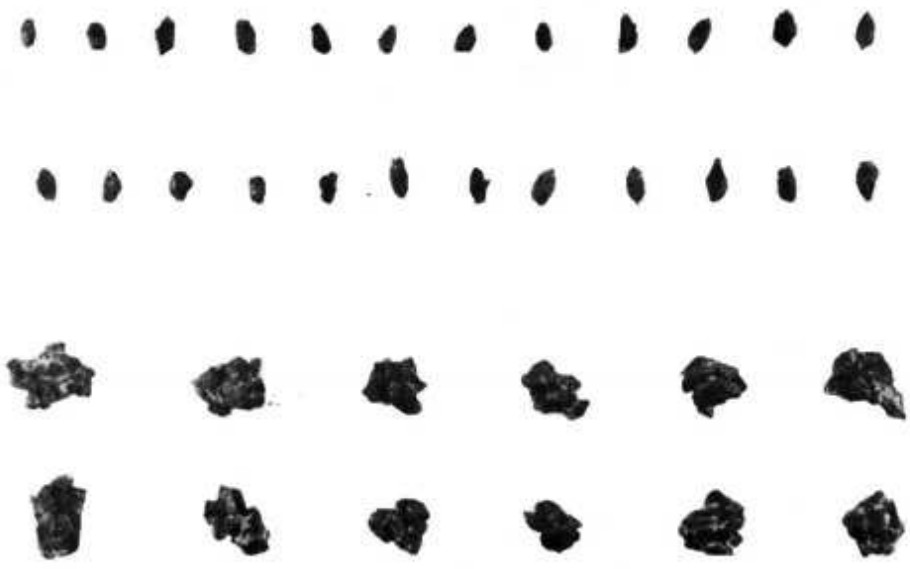
図版20　土製品・金属製品



図版21



1．古　　銭



2．焼　　米

図版22 木　製　品

1

2

3

4

5

6

7

1－E 110　小皿
2－E 111　小皿
3－E 107　小皿
4－E 105　小皿
5－E 113　蓋
6－E 106　蓋
7－E 102　小皿

図版23　木製品・火　鉢

1

3

2

5

4

6

1－E 103　曲　物
2－E 104　曲　物（底）
4－E 114　椀
3－E 101　下　駄
5－E 109　椀

図版24　木製品・石製品・板碑

1

2

4

3

1－E001～004　井戸枠
2－D 401　板碑
3－D 201　石臼
4－D 203　石臼

職　員　録

社会教育課

課長	水野昌一
主幹	早坂春一

文化財管理係

係長	鈴木昭三郎
主査	鈴木尚文
主事	山口宏
〃	渡辺洋一

文化財調査係

係長（兼）	早坂春一
教諭	加藤正範
主事	田中則和
〃	結城慎一
〃	柳沢みどり
教諭	青沼一民
主事	木村浩二
〃	篠原信彦
〃	佐藤洋
〃	金森安孝
〃	佐藤甲二
〃	工藤哲司
〃	渡部弘美
〃	主浜光朗
〃	斎野裕彦
〃	渋谷孝雄（55.3.31　退職）

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第１集　天然記念物鑑屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年４月）
第２集　仙　台　城（昭和42年３月）
第３集　仙台市燕沢薬応寺横穴古墳群調査報告書（昭和35年３月）
第４集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年３月）
第５集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年８月）
第６集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第７集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年３月）
第８集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年５月）
第９集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年３月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年３月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年３月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年３月）
第13集　南小泉遺跡－範囲確認調査報告書－（昭和53年３月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年３月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年３月）
第16集　六反田遺跡発掘調査(第２・３次)のあらまし（昭和54年３月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年３月）
第18集　桃江遺跡発掘調査報告書（昭和55年３月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年３月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年３月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅰ（昭和55年３月）
第22集　経　ヶ　峯（昭和55年３月）
第23集　年　報　１（昭和55年３月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年８月）

仙台市文化財調査報告書第24集

昭和55年度

今　泉　城　跡

昭和55年８月

発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町３－７－１
仙台市教育委員会社会教育課

印刷　株式会社　東北プリント
仙台市立町24－24　TEL63－1166